ストライク・ザ・ブラッド 14
黄金の日々

『タルタロスの薔薇』事件で絃神島を救った浅葱は、絃神島復興のシンボルとしてローカルアイドル活動をやらされる羽目になる。だがそれは浅葱を幽閉した事実を隠蔽するための、人工島管理公社の謀略だった。それを知った古城と雪菜は、浅葱を救出するためにキーストーンゲート第零層へと潜入する。しかし度重なる戦闘によって、そのとき雪菜の身体にはある異変が起きていた。

絃神島に秘められた〝聖殲〟の真実と、雪霞狼に隠された秘密。そして雪菜の決断とは――。

世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー、待望の第十四弾！

み-3-45

ストライク・ザ・ブラッド14
黄金の日々
三雲岳斗
電撃文庫

9784048655033
1920193005707
ISBN978-4-04-865503-3
C0193 ¥570E
ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス
KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA
定価：本体570円
※消費税が別に加算されます

三雲岳斗

大分県出身。主に小説などを書いてる人。取材旅行で使うという名目で新しいカメラを購入したものの、引きこもりの上に仕事が遅くて旅行どころではなく、仕事場の窓からひたすら空を眺める日々。

【電撃文庫作品】

コールド・ゲヘナ①～④
コールド・ゲヘナ あんぷらぐど
レベリオン 全5巻
i.d. I～III
道士さまといっしょ
道士さまにおねがい
アスラクライン①～⑭
ストライク・ザ・ブラッド 1～14
サイハテの聖衣 1～2

イラスト：マニャ子

佐賀県出身、東京都在住。フリーのイラスト、原画描きです。最近はソーシャルゲームのイラストを沢山描いてます。…いつも同じプロフィールを使っていたら、謎の着る毛布愛好者みたいになってました…。因みに今も着ています。

新作OVA

ストライク・ザ・ブラッド
ヴァルキュリアの王国篇

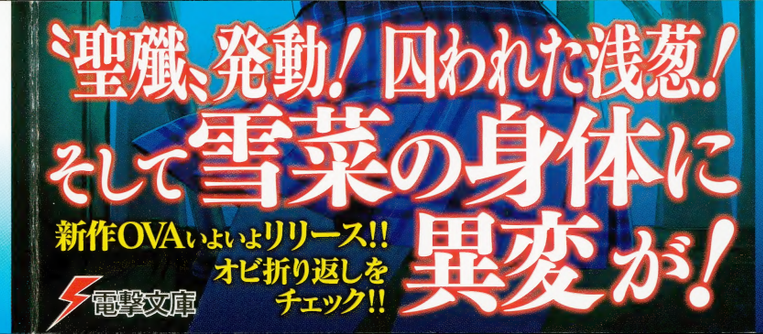
前篇　11月25日(水)発売
後篇　12月23日(水)発売

販売元:ワーナー・ブラザース・ホームエンターテイメント

詳細はアニメ公式ホームページへ

http://www.strike-the-blood.com

©2015 三雲岳斗／KADOKAWA　アスキー・メディアワークス刊／PROJECT STB OVA



〝聖殲〟発動！囚われた浅葱！そして雪菜の身体に異変が！

新作OVAいよいよリリース!!

オビ折り返しをチェック!!

電撃文庫

電撃文庫

STORY

『タルタロスの薔薇』事件で絃神島を救った浅葱は、絃神島復興のシンボルとしてローカルアイドル活動をやらされる羽目になる。だがそれは浅葱を幽閉した事実を隠蔽するための、人工島管理公社の謀略だった。それを知った古城と雪菜は、浅葱を救出するためにキーストーンゲート第零層へと潜入する。しかし度重なる戦闘によって、そのとき雪菜の身体にはある異変が起きていた。

絃神島に秘められた〝聖殲〟の真実と、雪霞狼に隠された秘密。そして雪菜の決断とは――

世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー待望の第十四弾!

12月下旬発売決定!!

マニャ子画集
ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

『ストブラ』のオリジナルイラストを網羅するファン必携の1冊!!

ストライク・ザ・ブラッド14 黄金の日々

ストライク・ザ・ブラッド14

黄金の日々

三雲岳斗

電撃文庫

3014

14 ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

黄金の日々

三雲岳斗

illustration マニャ子

姫柊雪菜
【ひめらぎゆきな】
『剣巫』Swords-Shaman
獅子王機関の可憐な監視者

暁古城［あかつき・こじょう］
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

リディアーヌ・ディディエ

『戦車乗り』Tank Rider

鋼と戯れる異才の童女

藍羽浅葱
「あいばあさぎ」
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生

ディミトリエ・ヴァトラー
『公爵』Duke of Ardeal
軽佻浮薄な〝蛇遣いの〟貴族

紘神冥駕［いとがみめいが］
『僵尸鬼』The Undead
人工島の闇に潜む叛逆の不死者

Contents

序　章　Intro　11

第一章　偽りの偶像　The Counterfeit Idol　23

第二章　第零層へ　Into The Stratum Zero　79

第三章　天使と槍と　Spear And The Angel　129

第四章　聖殲　The Sacred Genocide　189

終　章　Outro　283

あとがき　295

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

ストライク・ザ・ブラッド14

黄金の日々

序章
Intro

『MRA presents Inside Itogami !!』

『お聴きの放送局はＪＯＭＷ――ＦＭ絃神。時刻は午後三時三十分になりました。

これからの時間は、島内で話題の人物や出来事にスポットをあててご紹介する〝インサイド・イトガミ〟のコーナー、本日もこちらキーストーンゲート最上階、人工島第三スタジオからお送りしてまいります』

『さて、まだ記憶にも新しい〝タルタロスの薔薇〟事件――〝魔族特区〟破壊集団タルタロス・ラプスによる魔族登録証の大規模ハッキング攻撃から、ちょうど二週間が経ちましたね。

事件による破壊の爪痕は、絃神市内のあちこちに残されていますが、市街地の復旧作業は現在も急ピッチで進められています』

『開通の遅れていたモノレール環状線ですが、本日始発から平常通りの運行。航空機は一部の国際線を除いて全便運航を再開しました。湾岸道路も、一部区間を残して、この週末には通行規制が解除されるということで、ホッとしている人も多いのではないでしょうか』

『その絃神島で、現在もっとも注目を集めている人物といえば、そう、この方。

タルタロス・ラプスによるハッキング攻撃を阻止し、紘神島への被害を最小限に喰い止めた、美少女すぎる天才ハッカー――〝電子の女帝〟こと藍羽浅葱さんです』

『藍羽浅葱さんは現在十六歳。紘神市内の高校に通う現役女子高生なのですが、実は彼女、知る人ぞ知る天才プログラマーとして、ハッカーの世界では有名人だったんですね。

これまでにも数々の革新的なプログラムを発表して、ついたあだ名が〝電子の女帝〟――そんな才能と実績を評価されて人工島管理公社でアルバイトをしていた浅葱さんは、事件当日、タルタロス・ラプスの攻撃をいち早く察知して、独断でハッキング妨害のプログラムを作成。結果的に彼女の行動が、〝魔族特区〟破壊集団によるテロの脅威から、紘神島を救うことになったわけです』

『それだけでも凄いことなのですが、彼女を一躍有名にしたのは、芸能人顔負けのこのルックス――特に事件直後に撮影された彼女のインタビュー動画は、〝奇跡の七秒間〟と呼ばれてネットではすでに六百万回以上も再生されているそうです。本当に可愛らしい方で、学校の制服もよく似合っていますよね』

『浅葱さんのお父様は現職の紘神市評議員、藍羽仙斎氏。浅葱さんご自身も、幼いころから紘

神島にお住まいということで、以前から地元では美少女として有名だったとか。まさしく〝魔族特区〟が誇るアイドルだったわけですね』

『そんな浅葱さんですが、現在は人工島管理公社の依頼で、絃神島復旧のための大規模プロジェクトに参加中とのこと。さらには事件による被害者支援のための、慈善活動にも積極的に参加されています。来月には絃神島復興支援チャリティーソングを発売の予定。すでにご本人が出演するテレビCMも撮影済みということで、どんな内容になるのか楽しみですね』

『番組では、藍羽浅葱さんに対する応援メッセージ、そして彼女に関する情報をお待ちしています。浅葱さんの今後の活動へのリクエスト、あなたが街で見かけた浅葱さんの姿、あなただけが知っている彼女のプライベートな情報など、番組ホームページよりどしどしお寄せください』

『それでは、ここで一曲聴いていただきましょう。絃神島復興支援チャリティーソング〝Save Our Sanctuary〟のカップリング曲ですね。藍羽浅葱さんで〝片恋 Parameter〟――』

†

指先から採取した血液を、プラスチック製の小さな容器に垂らす。
こぼれ落ちた深紅の一滴が、容器に満たされた液体の中に、ゆっくりと霧のように広がっていく。
体調の変化に気づいたのは、十日ほど前のことだった。
実際にはもっと早くから、肉体の異変は進行していたのだろう。
異変の原因はわかっていた。いつかはそうなる可能性があると、最初から覚悟していたことだ。が、
「……」
鏡に映る自らの姿を眺めて、彼女は強く唇を噛む。
身体が食べ物を受けつけない。無理に食事を摂ろうとして、吐き気を催したところだった。
外見上は目立った変化はない。強いて言えば、目が熱っぽく潤んでいることか。頬もかすかに火照っている。ここ数日、微熱が続いているのだ。そのせいか身体が少し怠かった。
だが、戦えないほどではない。
任務を果たせないわけではないのだ。今は、まだ。

「大丈夫……」

容器の中の検査液が、見たことのない色に変わっている。本来なら、すぐにでも報告が必要な事態だった。

しかし彼女は、何事もなかったかのように容器をケースの中へと戻す。

報告すれば、もうこの場所にはいられない。彼女はそれを知っていたからだ。

「わたしは……大丈夫ですから……」

自分自身に言い聞かせるように、鏡に向かって彼女は呟いた。

まだ、この島から離れるわけにはいかない。彼から目を離すわけにはいかないのだ。

なぜなら彼女は、あの少年の監視役なのだから。

そう。今は、まだ——

†

深夜の海——

東京の南方三百三十キロ付近の海上へと、一機の航空機がゆっくりと降下を始めていた。

四基のターボファンエンジンを搭載した巨大な水陸両用機だ。湖沼や海面などを利用しての発着が可能な、いわゆる飛行艇である。

全長、翼幅ともに四十メートルを超える機体は、民間所有の飛行艇としては規格外の大きさだった。深紅の縁取りが施された機体が、月光を反射して銀色に輝いている。尾翼に描かれているのは、飛龍に牽引された戦車の紋章。欧州に君臨する夜の帝国――〝戦王領域〟の紋章だった。

高度を下げた飛行艇〝ストリクス〟は、やがて夜の海に着水した。激しい水飛沫を撒き散らしながら、海面を滑るように進んでいく。その前方にあるのは島だった。太平洋上に浮かぶ小さな都市、カーボンファイバーと樹脂と金属と、魔術によって造られた人工島だ。

港に向かう〝ストリクス〟の正面には、一隻の外洋船が停泊している。荘厳な城塞を思わせるクルーズ船。悪趣味なほど巨大で豪華な船だった。船のマストに掲げられた船籍旗にも、やはり〝戦王領域〟の紋章が染め抜かれている。船名は〝オシアナス・グレイヴⅡ〟――〝戦王領域〟の大貴族にして、アルデアル公国領主ディミトリエ・ヴァトラーの私有船だ。

その巨大船に寄り添うようにして、〝ストリクス〟は停止した。巨大な白い航跡が波に溶け、静寂と、黒い鏡のような海面が戻ってくる。

機体上部のハッチが開き、〝ストリクス〟の翼の上に人影が現れる。

浅黒い肌を持つ長身の男だ。年齢はよくわからない。顔立ちだけなら若く見えるが、身にまとう威厳と落ち着きは、老獪な武将や政治家のようでもある。身に着けた古風なコートと長い黒髪が、見るからに実直で聡明な彼の風貌によく似合っていた。

「……」

その男が、華美なクルーズ船を見上げて、どこか苛立たしげに嘆息する。夜霧の中に浮かぶ巨大な船体に、乗員の気配は感じられない。漂流船かと見まがうほどの静けさだ。

警戒するように目を細め、男は自らの周囲に黄金の霧をまとった。〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の船上に移動しようとしたのだ。その刹那、まるで一瞬の隙を狙い澄ましたかのように、光が彼の頭上を青く染めた。

並の人間なら即死するほどの膨大な魔力が、上空から無差別に降りそそぐ。

その波動は夜空をいびつに歪め、闇色の蛇の姿へと変わった。

実体を持つほどの膨大な魔力の塊。吸血鬼の眷獣だ。視界を埋め尽くすほどに巨大な異界からの召喚獣が、獰猛な牙を剝き出しにして、前触れもなく襲いかかってくる。

男は表情を変えぬまま、ちっ——と忌々しげに舌を鳴らした。

そんな彼の眼前に、巨大な剣が現れる。それは刃渡り七、八メートルにも達する闇色の大剣だ。もちろん、まともな人間が振り回せるようなサイズではない。が、

「……舞え、〝暴食者（グーラ）〟！」

まるで見えない豪腕に操られるように、その剣が虚空を裂き、巨大な蛇の顎を貫いた。

闇色の刃の表面は無数の牙のように蠕動し、剣の柄が炎のような魔力を噴き上げる。男の剣は、自らの意思を持つ武器——吸血鬼の眷獣なのだ。

だがその魔剣に貫かれてもなお、蛇の放つ魔力が衰えることはなかった。のたうつ巨体が放つ魔力が爆風に変じて、飛行艇ごと男を押し潰そうとする。

それを迎撃したのは、分裂した無数の剣だった。男が新たに召喚した短剣たちが、蛇の眷獣が放つ魔力の波動を、夜の空に縫い止めていく。激突する双方の魔力は拮抗し、大気を甲高く軋ませた。そして――

「気が済んだか、〝蛇遣い〟？」

うんざりしたような溜息とともに、黒髪の男が呼びかけた。

その直後、海上を満たしていた膨大な魔力が、幻のように跡形もなく消失する。

代わりに男の前に出現したのは黄金の霧だ。砂のように虚空からこぼれ落ちる黄金の粒子が、美しい青年の姿へと変わっていく。それは夜目にも鮮やかな純白のコートを着た、金髪碧眼の吸血鬼だった。

白い牙を剝き出しにして、青年――ディミトリエ・ヴァトラーは愉しげに笑っている。

眷獣による奇襲攻撃を仕掛けた側とも思えない、満面の無邪気な笑みだった。

「せっかくの再会だというのにつれないじゃないか、ヴェレシュ・アラダール？」

「俺は貴様のくだらん趣味につき合うために、こんな辺境の島国まで来たわけじゃない」

アラダールと呼ばれた黒髪の男が、ヴァトラーを見返して冷たく言い放つ。

ヴァトラーはそんな彼の言葉を、満足げに目を細めて聞いていた。アラダールはヴァトラー

の本気の攻撃を、まともに受け止められる数少ない対等の友人なのだ。だからこそヴァトラーも、彼に相応の礼儀を払うことを厭わない。出会い頭の攻撃は、ヴァトラーなりの敬意をこめた挨拶だったのだ。

「では、あらためて――ヴェレシュ・アラダール〝戦王領域〟帝国議会議長殿。遥か遠方よりのご光臨を賜り、このヴァトラー、恐悦至極に存じます」

「嫌味のつもりか、ヴァトラー。すべて貴様が仕組んだことだろうが。第四真祖にカインの巫女、おまけに今度は〝沼の龍〟か――よくもまあ、これだけ厄介な状況を揃えたものだな」

恭しく頭を垂れる金髪の青年貴族を睨んで、アラダールは頬を歪める。そんな友人の生真面目な反応に、ヴァトラーは、くっと喉を鳴らして笑い。

「それは失敬した、アラダール。だけどキミがこの島に来たということは、議会の元老たちも、ようやく乗り気になってくれたと思っていいのかな」

「彼らとて見過ごすわけにはいかないのだろうさ。〝棺桶〟の開放を知らされてはな」

それに、と黒髪の吸血鬼は、嘆息混じりに頭上を見上げた。

クルーズ船〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の甲板に、小柄な少女が立っている。逆巻く炎のように刻々と色を変えていく虹色の髪。微笑む彼女の唇の隙間には、白い牙がのぞいていた。

「六番目の〝焔光の夜伯〟か――」

「そう。〝混沌の皇女〟が匿っていた、最後の〝宴〟の鍵だヨ」

アラダールの呟きに、ヴァトラーは獰猛に微笑ってうなずいた。〝焔光の夜伯(カレイドブラッド)〟と名付けられた少女たちは、いずれも第四真祖の眷獣を封印するために人工的に造り出された吸血鬼だ。その数は全部で十二体。だがすでにその封印は、すでに十一体まで解放されてしまっている。

いまだ不完全な当代の第四真祖が、六番目(ヘクトス)の眷獣を手に入れたときなにが起きるのか、それは数百年も生きてきたヴァトラーたちですら完全には知り得ないことだった。ただひとつだけ確実にわかっていることは、存在しないはずの第四の真祖の出現が、この世界の秩序と安定をかき乱す、という事実だけだ。おそらくは取り返しがつかないほど決定的に。

アラダールは表情を消したまま、微笑み続ける旧友を見据えた。

「我らが王の赦しは得た。だが、ヴァトラー――貴様、わかっているのか？　完全な第四真祖を復活させるということの意味を？　貴様の本当の目的はなんだ？」

「決まっているじゃないか、アラダール。過去も現在も変わらないよ。ボクの望みはひとつだけだ――」

芝居がかった仕草で両腕を広げ、ヴァトラーは静かに背後へと視線を向ける。夜の海上に煌々と輝いているのは人工の〝魔族特区〟だ。それを見つめる青年貴族の瞳に、炎に似た獰猛な光が浮かぶ。

そして彼は答えを告げた。この上なく短く明白な答えだった。

第一話 偽りの偶像

The Counterfeit Idol

1

赤く透きとおった液体を数滴、小さな器の上に垂らす。
周囲にふわりと広がったのは、甘く刺激的な芳香だった。
「完璧だ……」
世界最強の吸血鬼と呼ばれる少年――第四真祖、暁古城は、その匂いを嗅ぎながら、どこかうっとりとした呟きを洩らしている。温かな液体をそっと口に含み、舌先で転がすようにして味を確かめる。陶酔したように瞳を閉じて、口元に浮かべたのは満足げな微笑だった。口の中の余韻を愉しむように、深くゆっくりと息を吐く。
「これぞまさに至高の一滴……全身に力が漲ってくるようだぜ」
空になった器を握ったまま、古城は感動に背中を震わせている。
そんな兄の姿を不気味そうに眺めていたのは、エプロン姿の暁凪沙だ。
「あの、古城君？」
「悪いな、叶瀬。いただくぜ……ほんの一口、味見するだけだからな……くくくく……」
この場にはいない後輩の名前を口にして、古城は再び深紅の液体を口に運んだ。今度はより大胆に咀嚼して、一息に喉へと流しこむ。

「ねえ、ちょっと、古城君」
「ふっ……オリーブオイルで炒めたニンニクに、桜燻製チップで燻した自家製ベーコンを贅沢に使用、具材は新鮮なタマネギ、ニンジン、キャベツにロンバルディア産のトマト。さらに隠し味としてハーブソルトを効かせた完璧なミネストローネ。まさに究極の逸品じゃないか」
自ら調理したスープの味に酔っている古城は、妹の呼びかけに気づかない。もう一口だけ味見しちまおう、と独りごち、大鍋をかき混ぜていたおたまを引き上げる。と、
「ねえ、古城君ってば！　聞いてるの!?」
「おわっ!?」
ついに業を煮やした凪沙が、古城の耳元で声を張り上げた。
古城はぎょっとしたように顔を強張らせ、そこでようやく我に返る。
「なんだ、凪沙か……どうしたんだ？」
「どうしたじゃないよ。なにこっそり一人でつまみ喰いしてるの。夏音ちゃんも雪菜ちゃんも休みなしで頑張ってるのに」
凪沙は両手を腰に当てて、園児を叱る保育士のような口調で古城に言う。
古城たちがいるのは、大きな公園の一角に置かれた屋台風の仮設テントの中だった。
衝立で仕切られた裏側には簡易キッチンが設置され、業務用ガスコンロの上で大量のミネストローネが煮えている。大鍋四つで約三百人分。調理するだけでもけっこうな重労働だ。少し

くらいのつまみ喰いは、許されるような気もするのだが。

「悪かったって。ちょっと味見してただけだろ。列の整理はもういいのか？」

「駄目駄目だよ。昨日より人が増えてるかも。炊き出しの評判を聞きつけた人たちが、わざわざ遠くからやってきてるみたい。いちおう整理券は配ってあるんだけど、列の最後尾は公園の外まで伸びてるし。表に出てる鍋はそろそろ空になりそう」

凪沙が早口で途切れなくまくし立ててくる。古城は衝立から顔を出し、公園内の様子を見回した。テントに並ぶ人々の行列は、ざっと数えただけでも二百人を軽く超えている。少し前に見たときよりも、明らかに人数が増えていた。

「わかったわかった。ちょうど味付けが終わったところだから、すぐに持ってく」

「よろしくね。あと手が空いたら、お皿の補充と雪菜ちゃんの手伝いもお願い！」

「あいよ」

慌ただしく駆け出していく妹の後ろ姿を見送って、古城は無意識に苦笑を洩らす。

後輩の叶瀬夏音にボランティアの手伝いを頼まれたときには、もっと地味で厳かなイベントだと思っていたのだが、実態はずいぶん予想とは違っていた。押し寄せてくる大群衆を相手の食料配布は、どちらかといえばお祭りやスポーツイベントのノリに近い。元体育会系の古城としても、この手の騒々しい雰囲気は嫌いではなかった。

食料の配給を待っているのは、ごく普通の結神島の住人たちだ。

彼らのほとんどは二週間前に起きたテロリストによる魔族登録証ハッキング事件――通称〝タルタロスの薔薇〟事件の被害者だった。〝魔族特区〟の高度な医療システムの恩恵もあって、奇跡的に死者こそ出なかったものの、無差別に召喚された眷獣たちの暴走によって、市街地には大きな被害が出た。住居を壊され、いまだ避難所で不自由な生活を強いられている人々も多い。古城たちが訪れているのは、市内でも特に被害の大きかった地区である。

テントの正面ではボランティアのスタッフが、順番を待つ人々に温かなスープやおにぎりを配っている。担当のスタッフは全部で七、八人ほど。その中には姫柊雪菜の姿もあった。

「悪い、遅くなった。スープお待ち！」

「あ、先輩。ありがとうございます」

危なっかしい足取りで大鍋を運ぶ古城に気づいて、雪菜が不安そうに駆け寄ってくる。三角巾で髪をまとめた彼女の姿は、普段と違って見えて少し新鮮だった。

雪菜の背後のテーブルには、ラップをかけた大量のおにぎりが所狭しと並んでいる。

実のところ、この炊き出しテントでもっとも人気の品は、豚汁でもミネストローネでもなく、このなんの変哲もない握り飯だった。やたら可愛い女子中学生が握ったおにぎりが無料で食べられる、という噂がいつの間にか広まっていたらしく、絃神島全土からおにぎり目当ての被災者が大量に集まってきたのである。

それが宣伝になって、ほかの慈善団体の協力も得られたし、相当額の寄付が集まったという

のだから、世の中というのは不可解だった。結果的に被災者が救われたのだから、よしとするべきなのかもしれないが。

「姫柊のほうこそお疲れ。これ全部、姫柊が握ったのか？」

「はい。追加のおにぎりはこれで最後です。お米がもうなくなってしまったので」

調理用のナイロン手袋を脱ぎながら、雪菜が困ったように眉尻を下げた。

「そうか。足りるといいけどな」

空っぽになった炊飯釜を見下ろして、古城は渋い表情を浮かべる。

行列を作っている人々の大半は、雪菜たちのおにぎりが目当てなのである。それが手に入らないと知らされたら、彼らが落胆するのは容易に想像できた。暴動が起きたりしないだろうな、と思わず心配してしまう。

「それにしてもすごい人数だな。こんな朝早くから」

「みんな温かい食べ物を心待ちにしていたんだと思います。この地区は、ガスや水道の復旧が、まだ終わっていないそうですから」

生真面目な口調で答えてくる雪菜に、お、おう、と古城は曖昧にうなずいた。おにぎりを握る雪菜たちの写真が、ネット上で話題になっていることは、本人には教えないほうがいいのだろうな、と思う。

もっとも〝タルタロスの薔薇〟から二週間が経って、紘神島の食料事情も改善している。炊

き出しの握り飯以外に食べ物が手に入らないというような、危機的な状況ではすでにない。

今回のボランティアの目的も、どちらかといえば被災者のための気分転換や娯楽の提供が目的だ。その意味では雪菜たちは、自らの役割をすでに十分に果たしたといえなくもない。

古城がそんなことを考えている間にも配給希望者は次々に押し寄せ、用意された食料がものすごい勢いで減っていく。食材や紙皿の補給のために、忙しく走り回るボランティアスタッフたち。中でもひときわ目立っているのは、あざやかな銀髪碧眼の少女――叶瀬夏音だった。

「あ、お兄さん」

大きな段ボール箱を抱えた夏音が、古城の姿に気づいて足を止める。

幼いころに修道院で暮らしていた夏音は、慈善活動の知識が豊富だ。今回の被災者支援でも、最年少のスタッフとして皆から信頼されている。日本人離れした美貌とも相まって、被災者からの人気も高い。しかし夏音は、よくいえばおっとりした性格であり、悪くいえばマイペースで少々トロかった。半ば壮絶な戦場と化した炊き出しの現場には、明らかに不向きな人材だ。

「ちょうどよかった。お話がありました――」

夏音は微笑みながらそう言うと、狭く乱雑なテントの中を無警戒に歩き出す。

待て、と古城が止める暇もなかった。心配そうに凝視する古城たちの前で、予想どおり夏音はなにかにつまずいてバランスを崩し、

「あ……」

「っとお!?」
「夏音ちゃん!?」
危うく転倒しかけた夏音の身体を、間一髪で支えたのは古城だった。小柄な夏音を左手一本で抱き止め、落下した段ボール箱は雪菜がキャッチする。
「大丈夫か、叶瀬？」
「あ、お兄さん、雪菜ちゃん。すみませんでした」
古城に抱き支えられたままの姿勢で、夏音は穏やかに微笑んだ。〝中等部の聖女〟という彼女のあだ名に相応しい、神々しくも清楚な微笑みだ。
一瞬、その笑顔に見とれた古城に、夏音は、あらためて恭しく頭を下げてくる。
「今日はありがとうございました。雪菜ちゃんも、感謝でした」
「あ、いや、俺がやったのはスープの用意だけだから。むしろ手伝えて愉しかったよ」
涼やかな夏音の瞳に見つめられ、古城は照れたように目を逸らした。
雪菜も、俯き気味に肩を落として溜息を洩らし、
「はい。それに今回の絃神島の被害に関しては、わたしたちも無関係ではないですし」
「そ、そうだな……」
自分の胸元を無意識に押さえて、古城はバツの悪い表情を浮かべる。
なにしろ古城たちは〝魔族特区〟破壊集団タルタロス・ラプスが、絃神島の食料備蓄倉庫を

爆破する現場に居合わせたのだ。しかも彼らの行動を阻止できず、目の前でみすみす食料備蓄倉庫を燃やされてしまった。それどころかタルタロス・ラプスの首謀者の一人は、今や第四真祖の十番目の眷獣として古城の中で眠っていたりもする。そんなわけで古城としても、紘神島が食糧危機に陥ったことに、責任を感じずにはいられないのだった。

「まあ、だから俺たちのことは気にしないでくれ。働いてるほうが罪悪感がまぎれるから」

「わかりました。でも、私がお兄さんたちに感謝しているのは本当でした」

詳しい事情を知らないはずの夏音は、古城たちを問い詰めることもなく、ただ優しく微笑んでそう言った。そして彼女は、腕時計を指さすような仕草をすると、

「あとそれから、そろそろ学校に行く準備をしたほうがいいと思いました」

「え？　もうそんな時間だったのか？　道理で腹が減ってたわけだ……」

公園に設置された時計を見上げて、古城は戸惑いの表情を浮かべる。

いつの間にか時刻は午前八時近くになっていた。急いで登校しなければ遅刻確定だ。

幸いなことにボランティアスタッフには、時間に融通の利く大学生なども多い。古城たちが途中で抜けても問題ないと事前に言われている。

しかし早朝から炊き出しの手伝いをしていたせいで、古城の胃袋は、かなりの空腹を訴えていた。目の前に置かれた配給用のおにぎりが、やけに美味そうに思えてくる。

そんな古城の葛藤を見透かしたように、夏音が席を外したタイミングを見計らい、なにかを

差し出してきたのは雪菜だった。彼女が両手で抱えていたのは、おにぎりを載せた小皿である。やや大きめの握り飯がみっつ、紙皿の上にちょこんと並んでいる。

「あの、よかったら食べていってください。おにぎり、取り置きしておきましたから」

「お、マジで？　俺が喰っていいのか？」

「はい。お口に合うかはわかりませんけど」

「いや、助かる。実はけっこう腹が減ってたからさ」

渡された紙皿を受け取って、古城はさっそく握り飯にかぶりついた。作りたての握り飯は、まだほのかに温かく、焼き海苔もパリッとした食感を保っている。さすがに手作りだけあって、形はやや不格好ではあるものの、十分に出来のいい部類に入るだろう。具材は定番の焼き鮭と梅干し、そして辛子マヨネーズで味付けされた唐揚げである。無言でもりもりと握り飯を頬張る古城を、雪菜はどことなく慈愛に満ちた表情で見守っている。

「――って、姫柊は喰わないのか？」

「わたしはあまり食欲がないので……あの、お味はどうですか？」

半ば無理やり話題を変えるように、雪菜が感想を求めてくる。古城はふたつ目の握り飯を咀嚼しながらうなずいて、

「ああ。意外に美味いぞ」

「はあ。意外……ですか……そうですか」

「ええと……姫柊？」
「いえ、なんでもありません。お茶、淹れてきますね」
なぜか微妙にむくれた雰囲気で立ち去る雪菜を、古城は怪訝な表情で見送った。その雪菜と入れ違いで、夏音がテント裏に戻って来る。
中等部の制服に着替えた夏音は、胸元に握り飯を載せた紙皿を抱いていた。
「あの、お兄さん」
「叶瀬……？　どうした？」
「これ、お兄さんのぶんのおにぎりでした」
え、と古城は目を瞬いて、差し出された紙皿と、夏音の表情を見比べた。
「え……と、叶瀬が作ってくれたのか？　俺に？」
「はい。よかったら召し上がって欲しい、でした」
「お、おお……サンキュ。助かる。じ、実はけっこう腹が減ってたんだ」
ぎこちない発音でそう言って、古城は夏音から握り飯の皿を受け取った。雪菜のおにぎりを食べた直後でわりと満腹だったのだが、期待に満ちた夏音の表情を見ていると、断るわけにはいかないという気になってくる。
夏音のおにぎりは雪菜のものとほぼ同サイズだが、気を利かせてくれたのか、皿の上にはそれらが計十個、ピラミッド状に盛りつけられていた。古城はその中のひとつを手に取って、覚

悟を決めてかじりつく。胃袋にはまだ多少の余裕があるものの、完全な空腹時と比べれば、食べるペースが衰えていることは否めない。そんな古城を、夏音はジッと不安そうに見つめて、

「お口に合いませんでしたか？」

「いや、美味いよ。うん、美味い」

古城は首を振りながら、夏音のおにぎりを口の中に押しこんでいく。よかった、と胸を撫で下ろす夏音。彼女に見つめられているせいで途中で食べるのをやめることもできず、結局、山盛りのおにぎりすべてを胃の中に収めることになる。

「ご、ごちそうさま」

「お粗末さまでした」

どうにか食べ終えて両手を合わせる古城に、夏音がぺこりと頭を下げた。使用済みの食器を下げるため、夏音がいなくなるのを待って、古城は息も絶え絶えに頭上を仰ぐ。と、

「大丈夫ですか、先輩？」

いつの間にか戻っていた雪菜が、呆れ顔でそう言って、古城の前に紙コップのお茶を差し出した。夏音のおにぎりを食べる古城のことを、しっかり監視していたらしい。

出されたお茶を、古城はありがたく受け取って、

「さ……さすがに喰い過ぎたな」

「なにやってるんですか、もう。ご飯つぶ、ついてますよ」

古城の頬についた米つぶを、溜息混じりに拭き取ってくれる雪菜。すでに言い訳する気力も残っていない古城は、ハハ、と弱々しく笑う。古城が食べたおにぎりは十三個。平均的なおにぎりの重量を一個百グラムと仮定して、約千三百グラムの白米を食した計算になる。世界最強の吸血鬼などと呼ばれる古城の胃袋でもさすがに限界だ。

「悪いな、姫柊」

「いえ、べつに。わたしは先輩の監視役なんですから、これくらいは――」

雪菜が澄まし顔でそう言いかけたとき、突然、騒々しい足音が聞こえてきた。勢いよくテント裏に駆けこんできたのは、エプロンを脱いだ凪沙である。

「古城君！」

「っ!?」

古城の頬に触れたままだった雪菜が、ビクッと背中を震わせて飛び退いた。古城はゲホゲホと咳きこみながら振り返り、

「な、凪沙!?　なんだ、いきなり!?」

「なに驚いてるの、二人とも？」

過敏な反応を見せる古城たちを見て、凪沙は不思議そうに首を傾ける。そして彼女は背中に隠していた紙皿を、得意満面の笑みとともに取り出した。

「まあいいや、それよりこれ、おにぎり！」

「え？」

「もうすぐ学校行く時間だけど、古城君、朝ご飯を食べる時間、なかったでしょ。そんな古城君のために凪沙が作っておいてあげたんだから、しっかり味わって食べてよね。具材だって、古城君の好きな焼きタラコとツナマヨを選んでおいたから！」

照れ隠しのような早口でそう言って、凪沙は紙皿を押しつけてくる。載っていたのは、皿から余裕ではみ出すほどの巨大なおにぎりがふたつだった。

「お、おお……サンキュ……た、助かる。実はけっこう腹が減ってたんだ……」

妹の好意をむげに断るわけにもいかず、震える声で礼を言う古城。凪沙は嬉しそうに目を細めて、

「そうだよね！　ほら、見つからないように急いで食べてね。まだ表には順番待ちの人たちがたくさん残ってるんだから！」

は……はは……と古城は弱々しく笑い、半ばヤケクソ気味に凪沙のおにぎりを睨みつけた。祈るような表情で瞑目し、いただきます、と皿ごと噛み砕くような勢いで牙を立てる。

「……」

雪菜はそんな古城を眺めて溜息をつき、哀れむようにそっと目を閉じた。

2

なんだかんだで古城が教室に辿り着いたのは、始業時刻の少し前だった。おにぎりの食べ過ぎで圧倒的に体調が悪い。早いところ座って休もうと、古城は自分の席へと向かう。が、

「あ、来た、暁！　こっちこっち！」

「棚原？」

教室に入った古城をいきなり呼び止めたのは、クラスメイトの棚原夕歩だった。中等部時代からの同級生ということもあって、それなりに気心の知れた相手ではある。声のでかい彼女の呼びかけを無視することもできず、古城は仕方なく夕歩の前に座る。

いったいなんの用だ、と訝る古城に、夕歩は窓際にある空き机を指さして、

「ねえ、暁。最近、藍羽浅葱と連絡取ってる？」

「浅葱？　ああ……あいつまた今日も欠席か」

教室内を見回しながら、古城は平静な口調で言った。

タルタロス・ラプスの事件以来、浅葱は一度も学校に来ていない。人工島管理公社に籠もりきりで、絃神島復興の手伝いをさせられているらしい。それでも古城が彼女のことを心配していないのは、浅葱が毎日のようにメールやメッセージを送ってくるからだ。そのほとんどが、

人工島管理公社での仕事内容や、出された食事についての愚痴だったりするのだが。

「そういや、昨日もなんかやたら長いメールが送られてきてたな。バイト先の仕事が忙しくて死にそうとかなんとか……」

「そっか。じゃあ、やっぱり今日も学校休みかな。困ったなあ……小学生の従妹に、藍羽とのツーショットの写真を送るって約束しちゃったんだよね」

小さく唇を尖らせて、夕歩は残念そうに呟いた。手に持っていたスマートフォンを、未練がましく掌の上で弄ぶ。

「従妹……？」と、古城は不思議そうに夕歩を見返して、「なんで小学生が浅葱の写真なんか欲しがるんだ？」

「そりゃ藍羽のファンだからでしょ」夕歩が事もなげに説明する。「あたしが藍羽のクラスメイトだって言ったら、その子、すっごく喜んじゃって」

「はー……まるでアイドル扱いだな」

古城が心のこもらない声で感想を洩らす。あの浅葱に小学生のファンがいるといわれても、今イチ実感が湧かず、ピンとこない。

そんな危機感のない古城の態度に、夕歩は少しムキになったように声を大きくして、

「アイドル扱いじゃなくて、アイドルなのよ。なんたって国際指名手配のテロリスト集団を、たった一人で阻止した紘神島の救世主なんだし。話題になるのも当然でしょ。まあ、紘神島の

中だけのローカルアイドルなんだけどね」
「ご当地名物みたいなもんか。地元ゆかりの戦国武将とか、ゆるキャラとか」
「ま、まあそうね。でも、本土でもそこそこ話題にはなってるみたいよ。ほら、藍羽って実は美人だし。ファッションのほうは頑張り過ぎて、ちょっと残念な方向に行っちゃってるけど」
「いやまあ、あれはあれでいいんじゃねーの。似合ってるっちゃ似合ってるし」
無駄に華やかな浅葱の髪型や服装を思い出しながら、古城はそれとなく擁護する。たしかに空回りしている印象はあるものの、綺麗になろうと頑張っている彼女のことは嫌いではない。
夕歩は古城のその言葉を聞いて、少し面白そうに唇の端を上げ、
「暁がそういうことを言うの、なんかちょっと意外かも」
「そうか？」
「そうよ。まあいいけどね。あ、そうだ、暁。あんた、藍羽の写真、持ってない？」
ニヤニヤと口元を緩めたまま、夕歩は唐突に話題を変えた。古城は、戸惑って眉を寄せる。
「写真？」
「そうそう。クラスの集合写真とかじゃなくて、プライベートなやつ」
「俺のスマホ、ぶっ壊れて買い換えたばっかなんだよな。なんか残ってるヤツあったけな」
そう言って古城は自分のスマートフォンを引っ張り出した。重要なデータは引き継がれているはずだが、生き残っている写真は多くない。

「ああ、あった。年末にブルーエリジアムに行ったときのやつだ」
「え、ブルエリ!?　すごいじゃん。ブルエリってことはあれでしょ、水着でしょ!?」
夕歩が興奮気味に身を乗り出してくる。いや、と古城は煮え切らない表情を浮かべ、
「ああ、まあ、いちおうこれも水着といえば水着か」
「……なにこれ？」
スマホの画面をのぞきこんだ夕歩が、咎めるように古城を睨んで訊いてきた。
映っていたのは、プールサイドにいる古城と浅葱。二人お揃いのダサいTシャツを着て、それぞれ金属製のコテと焼きソバのパックを握っている。
「いやだから浅葱と一緒にブルエリに行ったときの写真。焼きソバ屋でバイトしてたんだ」
「そういう写真が見たかったわけじゃないから！　これのどこがプライベートなのよ!?」
「唐揚げ食べ放題に行ったときのヤツもあったぞ。あとは闘将軒の特盛りラーメン完食記念の写真も」
「喰ってる写真ばっかじゃん！　なんで純真な小学生の夢を壊すような写真しかないわけ!?」
失望感もあらわに夕歩が声を荒らげた。そんなことを言われても、と古城は気怠く息を吐き、
「だからあいつがアイドルなんて無理があるんだよ。おまえは浅葱になにを期待してんだ」
「そう言われれば、そうなんだけど」
夕歩が拗ねたように頬を膨らませる。浅葱は黙っていればたしかに美人なのだが、見た目に

反して、色気とは無縁のタイプでもあった。ちやほやされて喜ぶ性格ではないし、他人に媚びが売れるほど器用でもない。彼女のそういうサバサバした部分を古城は気に入っているのだが、どう考えてもアイドルに向いているとは思えなかった。

しかし夕歩は、まだどこか諦めきれない様子で、古城のスマホを勝手に操作し、ネットの動画サイトに接続する。再生されたのは、聞き覚えのある歌声だった。

「でも、藍羽のプロモーションビデオはけっこう可愛くて好きなのよね。本格的なアイドルみたいで。ほら、これ」

「ああこれか」

表示されている動画を眺めて、古城は小さく肩をすくめる。流れている曲目は〝Save Our Sanctuary〟――人工島管理公社のプロデュースによる紋神島復興支援チャリティーソングとして、島内の至るところで流れている曲だ。

歌っているのは、純白のサマードレスを着た浅葱。海岸沿いを裸足で歩く映像の中の彼女の姿は、たしかにアイドルといわれても違和感がない。世間の反応も上々らしい。しかし古城はその映像が、正直あまり好きではなかった。

そんな古城の心境を見透かしたように、おや、と夕歩は片眉を上げて、

「なに？　暁、気に入らないの？」

「まあな。なんとなく、違和感があってさ」

「ふうん。それはそれは……そうよねえ。藍羽が急に遠くなっちゃった感じ、するわよねえ」

いいことを聞いた、というふうにニヤニヤと笑いながら、夕歩は一人で納得している。なにか明らかに誤解されているような気もしたが、訂正するのも面倒なので、古城は彼女を放っておくことにした。もういいだろ、とスマホを回収し、今度こそ自分の席へと向かう。

その古城に途中で話しかけてきたのは、大人びた長身の女子生徒だった。クラス委員の築島倫だ。音洩れしている古城のスマホを、彼女はものめずらしそうに見つめて、

「おはよ、暁くん。なに見てるの？」

「ああ、築島。なんか浅葱のプロモーションビデオらしい」

「紘神島復興支援ソング？」スマホの画面を一瞥するなり、倫は興味をなくしたように首を振り、なぜかきっぱりと言い切った。「それ、よく撮れてるけど、偽物よ」

「偽物？」

「うん。たぶん魔術かCGじゃないかな。浅葱が自分でそんなものを作るとも思えないけど」

「そうか……だからか」

古城はふと真顔になって、画面の中の浅葱を見つめた。見慣れた彼女の横顔がアップになったところで、動画の再生は止まっている。

「……だから？」

倫が目つきを鋭くして古城を睨む。適切な言葉を思いつかずに、古城は困り顔で目を眇め、

「これ、嘘っぽくて好きじゃなかったんだよな。浅葱らしくないっていうかさ」
その説明を聞いた瞬間、へえ、と倫は柔らかく微笑んだ。少し見直した、と言いたげに、古城を見つめて優しく笑う。
「暁くんって鈍いんだか鋭いんだか、よくわからないところがあるわよね」
「なんだよそれ。ていうか、築島はどうしてこれが偽物だってわかったんだ？」
「ピアス」
倫は表情を変えないまま、ひと言だけ素っ気なく告げてくる。古城は、思いきり間の抜けた顔で彼女を見返し、
「は？」
「ピアスの色が違う」
「ああ、そう言えば……」
プロモーションビデオ撮影時の浅葱は、古城の知らない赤いピアスをつけていた。見るからに高価そうな大振りの宝石が嵌まったヤツだ。浅葱が普段愛用している青いピアスとは、たしかにずいぶん印象が違う。
「って、それだけか？」
「十分よ。浅葱があれを外したり、ましてやほかのをつけるはずないもの」
「は、はあ」

倫にきっぱりと断言されて、古城は反論の言葉を失った。浅葱の親友である倫がそこまで言うのだから、古城としても信用するしかない。

「それに浅葱が歌って踊ることなんてあり得ないし。あの子、隠してるけど実は音痴だから」

「お……おう」

身も蓋もない倫の指摘に、古城は今度こそ納得する。実際、浅葱のカラオケ嫌いは、古城もよく知っていた。音感も声質も悪くないのだが、なぜか歌だけは駄目なのだ。

そんな浅葱が絃神島復興のためとはいえ、人前で歌うとは思えない。自分で歌を歌うくらいなら、音声合成ソフトをイチから自作してパソコンに歌わせるようなタイプなのだ。

そして浅葱の歌が偽物だとすれば、彼女のプロモーションビデオすべてが、偽物だとしても不思議ではなかった。一度でも疑い始めてしまうと、もはやビデオの中の少女が、浅葱と同一人物とは思えない。

もっとも古城たちにしてみれば、プロモーションビデオの真贋はどうでもいいことだった。アイドルの歌や映像に修正が入るのはよく聞く話だし、そもそも浅葱は本職のアイドルですらないのだから。

問題なのは、偽の浅葱の存在ではない。なぜそんな偽物を用意してまで、人工島管理公社は、浅葱をアイドルに仕立て上げたのか、ということだ。

それと疑問はもうひとつ。

「……」

古城は不機嫌そうに唇を結んだまま、自分の席に脚を投げ出して座った。始業を告げるチャイムが鳴っても、疑問が頭にこびりついて離れない。

浅葱が学校を休んでいる理由は、紘神島の復興支援に協力しているからだと聞いている。

だが、その活動が、そもそも偽りだったとすれば。

本物の彼女は、今、どこでなにをしているのだろう――？

3

「偽物……ですか？　あの藍羽先輩が？」

その日の放課後、古城は校門前で待ち構えていた雪菜と連れ立って、人工島西地区にある総合病院へと向かっていた。〝タルタロスの薔薇〟事件で負傷した、矢瀬基樹の見舞いが目的だ。

浅葱を狙ったタルタロス・ラプスの襲撃に巻きこまれ、失血と魔術的なダメージで、一時は昏睡状態に陥っていた矢瀬だが、入院して一週間が過ぎたあたりからは普段の調子を取り戻し、今では見舞いの品として菓子やジャンクフードを要求する程度には元気になっている。

「うちのクラスの女子がそう言ってるだけで、証拠があるわけじゃないんだけどな」

そう言って古城は、通学定期の入ったパスケースを手の中で弄ぶ。

数日前に復旧したばかりのモノレールの駅には、紘神島復興支援プロジェクトのポスターが、大々的に貼り出されていた。ポスターのメインはもちろん浅葱の写真だ。アイドル風の作り笑顔を浮かべた浅葱の姿は、たしかに古城の知っている彼女のイメージとは違う。

「でも、〝タルタロスの薔薇〟が消えたあと、藍羽先輩とは一度も会ってないんですよね」

古城の隣を歩く雪菜が、意外に真面目な表情でそう呟いた。

カンのいい彼女のことだから、古城が気づくずっと前から、街中に氾濫する浅葱の映像に、違和感を覚えていたのかもしれない。

「メールが毎日送られてくるから、べつに心配してなかったんだけどな。でも冷静に考えたら、本当に浅葱が打ったメールかどうかなんてわかんねーよな」

「そうですね。せめて藍羽先輩と直接話ができればいいんですけど」

「会いに行っても、すんなり会わせてはくれないだろうな。電話もずっと留守電だし」

「藍羽先輩、すっかり有名人ですしね。中等部でもよく話題になってます」

駅の自動改札をくぐりながら、雪菜が言う。やっぱそうなのか、と今さらのように感心する古城。ローカルアイドルとしての浅葱の活躍は、古城の想像以上に世間に知られているらしい。

「まあ、とりあえずは矢瀬に相談だな。あいつなら事情を知ってるかもしれないし」

古城は、あえて投げやりに呟きながら駅の外に出た。

矢瀬基樹は浅葱の幼なじみで、しかも人工島管理公社の幹部職員の兄がいる。浅葱の現状を

古城たちがあれこれ心配するより、矢瀬に調べてもらったほうが、手っ取り早くて確実だ。

その矢瀬が入院している病院は、駅前にある目立つビルだった。すでに何度も見舞いに来ているので、病室の場所はわかっている。

古城たちは受付で名前を書いて入館証をもらい、エレベーターを乗り継いで矢瀬の病室へと向かう。しかし目的の病室の前に辿り着いたところで、二人は呆然と足を止めた。

「え……？」

無人の病室内を見回して、古城は間の抜けた声を出す。矢瀬が使っていたはずのベッドは、綺麗に片付けられて、持ちこんだ大量の私物は消えていた。

病室のドアにかけられていた入院患者名のプレートも、いつの間にか取り外されている。古城になんの連絡もないまま、退院したということらしい。

「矢瀬くんのお友達？」

通りすがりのナース服の女性が、立ち尽くしている古城に声を掛けてくる。以前、見舞いに来たときにも何度か見かけた若い看護師だ。

「あ、はい。あいつ、いつの間に退院したんですか？」

矢瀬に対する不満を顔に浮かべて、古城が訊いた。看護師は少し困ったように微笑んで、

「退院というか、転院かな。昨日の夜、お兄さんがやってきて連れて行ったの」

内緒だけどね、と看護師は唇の前に指を立てる。幼い子どもを相手にしているような、可愛

らしい仕草だ。
「矢瀬の兄貴が？」
「護衛の人もたくさんいたよ。矢瀬くんのお父さんって、人工島管理公社の偉い人みたいだし、心配する気持ちはわかるけどね」
看護師はそう言って小さく息を吐く。矢瀬兄弟の父親――矢瀬顕重は、人工島管理公社の名誉理事だった。そして〝タルタロスの薔薇〟事件で命を狙われ、今も生死不明とされている。その結果、矢瀬の親族の間では、顕重の後継者の座を巡って、激しい駆け引きが行われているらしい。矢瀬兄弟が更なる暗殺を警戒するのは、むしろ当然のことだった。
矢瀬の急な転院も、そのあたりの事情と無関係ではないのかもしれない。古城たちに連絡がなかったのも、警備上の都合なのだろう。
「矢瀬の転院先ってわかりますか？」
ダメ元で訊いてみる古城に、看護師は笑いながら首を振る。
「それはわからないな。もし知ってても教えられないけどね」
「ですよね」
古城は深く溜息をつき、看護師に礼を言って病室を後にした。重い足取りで廊下を戻り、再びエレベーターを乗り継いで病院の外に出る。
「どういうことでしょう？」

押し黙る古城の横顔を見上げて、雪菜が独り言のように訊いてくる。

わからん、と古城は頼りなく両手を上げ、

「転院するのはいいんだけど、連絡もなしってのが引っかかるよな。矢瀬の兄貴が、弟を誘拐する理由はないし、俺たちが心配する必要はないんだろうけど――」

矢瀬の転院。そして浅葱の長期欠席。少しばかり特殊な状況ではあるが、それぞれの行動に不自然な点はない。古城たちが心配する理由はないのだ。

だが、事件らしい事件がなにも起きないまま、立て続けに友人たちとの連絡手段が失われた。そのことが古城を不安にさせている。念のために矢瀬の携帯電話にメッセージを送ってみるが、予想どおり返信の気配はなかった。

「先輩？」

横断歩道の途中で立ち止まった古城を、雪菜が怪訝そうに見つめてくる。

古城は、見覚えのある交差点の看板を見上げて、

「あ、いや……たしかこの病院って、浅葱ん家の近くだったなと思って」

「そうなんですか？」

「うろ覚えだけど、なんとなくな」

きょとんと目を瞬いている雪菜に、古城は無責任にうなずいてみせた。若干、曖昧ではあるものの、正月に浅葱の自宅を訪ねたときに、この交差点を通った記憶がある。

「どうせここまで来たんだし、菫さんに会いに行ってみるか」
「菫さん？　藍羽先輩のお母様ですか？」
「浅葱のことが聞けるかもしれないしな――あ、姫柊は無理につき合ってくれなくてもいいぞ」
「いいえ、ご一緒します。こんなときこそ、先輩の行動をしっかり監視しておかないと。藍羽先輩のお母様は、とてもお綺麗な方でしたし――」
いつになく真剣な表情を浮かべて、雪菜が言う。古城は思わず目を見開いて、
「ちょっと待て！　なんの心配をしてんだよ!?」
「ご自分のこれまでの行いを振り返ってみてはいかがですか？」
雪菜に半眼で睨まれて、古城は苦々しげに唇を歪めた。たしかに古城はやむを得ない事情で、これまでに何人かの女子の血を吸ってきたものの、さすがに浅葱の継母の血を吸うようなことはない――はずだ。
浅葱の自宅があるのは、緩やかな坂の上に位置する高級住宅街の一角だった。美しい街路樹に添って歩いて行くうちに、見覚えのある和洋折衷の屋敷が見えてくる。
「な。この道で合ってただろ？」
「はい。でも……」
屋敷を囲む塀を眺めて、雪菜が不意に立ち止まった。その理由に古城もすぐに気づく。浅葱

の自宅の前の道路が、鉄パイプ製のバリケードで封鎖されていたのだ。
バリケードの前に立っているのは、銃器で武装した警備員たちだ。
「特区警備隊……!?」
彼らの着ている制服を見て、雪菜が小さく声を洩らす。道路を封鎖しているのは、一般の警察官ではなかった。特区警備隊と呼ばれる彼らは、〝魔族特区〟内の治安維持を担当する、人工島管理公社直轄の〝対魔族〟武装警備員だ。
屋敷を取り囲むように配置されているのは、おそらく二個分隊——十名前後。バリケードの背後には装甲車も停まっている。浅葱の父親は絃神市の評議員を務める重要人物だが、そんな彼の護衛だとしても、明らかに過剰な大戦力だ。
その厳重な警備に一瞬、怯んだのは事実だが、ここまで来て、なにもせず引き返すわけにもいかなかった。古城は精いっぱい人畜無害な高校生を装って、警備員の一人に呼びかける。
「あの、すみません。この先に友達の家があるんですけど——」
「ご友人の名前は？」
ごつい体格の警備員が、防護マスクをつけたままの無表情な顔を向けてくる。古城はバリケードの奥にある屋敷を指さして、
「え……と、藍羽浅葱です。そこの藍羽さん家の」
「藍羽浅葱さんですね。許可証を提示してください」

「は？　許可証？」

警備員の予期せぬ要求に、古城は唖然として訊き返す。

「この先の区画に入るには、人工島管理公社発行の許可証が必要です。お持ちでない方の通行は許可できません」

「いや、ちょっと待ってくれ。だって、ついこないだまではそんな許可証なんて――」

「……先輩」

喰い下がろうとした古城の腕を、雪菜がそっと引っ張った。古城がハッと表情を硬くする。バリケードの奥にいた武装警備員たちが、いつの間にか銃を構えていた。軍用自動小銃の銃口は、はっきりと古城の胸元に向けられている。

古城が無理にバリケードを突破しようとすれば、警備員たちは間違いなく引き金を引くだろう。それが彼らの任務なのだ。

「帰ろう、姫柊」

ふて腐れたように両腕を広げて、古城は元来た道を戻り始める。詳しい事情はわからないが、これ以上の交渉は無駄だと直感したのだ。

だが、無駄足だったわけではない。ひとつだけ確信できたことがある。

本物の浅葱が姿を現さないのは、彼女自身の意思ではない。誰かが浅葱を隔離しようとしているのだ。人工島管理公社すら、意のままに操ることのできる誰かが――

「ご協力ありがとうございます」
苛立ったように歩き続ける古城たちの背中へと、武装警備員が事務的な口調で告げてくる。
古城は最後まで振り返らなかった。

4

見慣れた制服姿の浅葱が、垢抜けた笑顔で質問に答えている。紘神島ローカル放送の番組に、ゲストとして出演しているのだ。
「……」
テレビ画面に映る浅葱の姿を、矢瀬基樹はベッドに寝転んだまま、うんざりしたように眺めていた。たしかによく出来た映像だが、自然過ぎて、逆に不自然さを感じる。インタビューを受けている浅葱は偽物だ。おそらく古城あたりも、そろそろこの違和感に気づくころだろう。
逆に言えば、矢瀬や古城くらい彼女のことをよく知っている人間でなければ、偽物だと気づけない、ということでもあるのだが。
精巧な偽の映像を用意してまで、公社が、浅葱をアイドルに仕立て上げた理由はわかっている。〝タルタロスの薔薇〟によって紘神島は大きな被害を受け、多くの市民が一時的にかなりの不便を強いられた。彼らの苛立ちや不満を逸らすカリスマ的な復興のシンボルが、紘神島に

は必要だったのだ。

その意味で、浅葱はうってつけの人材だった。なにしろ〝魔族特区〟破壊集団から紘神島を救った天才プログラマーで、しかも現役の女子高生だ。ローカルアイドルとして売り出すには、十分過ぎるほどの肩書きだろう。

そしてマスコミを使って浅葱の姿を映し出すことで、浅葱本人が姿を消しても、誰も気づくことはない。〝カインの巫女〟として覚醒した浅葱を、世間から隔離するために、人工島管理公社は彼女の人気を利用しているのだ。

実にふざけた話だった。

しかしそれがわかっていても、矢瀬にはどうすることもできない。タルタロス・ラプスに撃たれた脚の傷はようやく治ってきたが、過適応能力の濫用と能力増幅薬の過剰摂取による内臓のダメージが大きすぎた。しばらくは能力を使った戦闘はもちろん、古城の監視も無理だろう。おまけに矢瀬が〝彼女〟と呼んでいる獅子王機関三聖の一人――閑古詠とも、あの事件以来、連絡が取れなくなっている。

結局、矢瀬に出来るのは、テレビに映る浅葱の偽物を仏頂面で眺めていることだけだった。

そんな矢瀬の病室のドアが、突然、ノックもなしに開けられた。入ってきたのはエリート然とした、知的な顔立ちの男性だった。十歳年上の矢瀬の異母兄、矢瀬幾磨だ。

「怪我の具合はどうだ、基樹？」

仕立てのいい欧州製のスーツを着た幾磨が、ジャージ姿の弟を見下ろして訊いてくる。矢瀬は露骨に警戒した顔で、無言のまま兄を見返した。

幾磨は、北米連合名門大学院の修士号を持つエリートで、人工島管理公社の都市管理室長を務める多忙な男だ。そんな幾磨が理由もなく、見舞いに来るとは思えない。

「どういうつもりだ、兄貴？　なんで俺をこんなところに連れてきた？」

転院直後の慣れない病室を見回して、矢瀬が質問する。

矢瀬が連れてこられたのは、人工島北地区の研究所街にある、製薬会社の付属病院だった。医療機関というよりは新薬の臨床試験施設という趣の、ハイテクだが無味乾燥な建物である。携帯電話などの電子機器は、入室時にすべて没収され、おかげで矢瀬は古城たちに転院を知らせることもできなかった。

しかし幾磨は不機嫌な弟の顔を、少し不思議そうに見返して、

「この部屋は気に入らなかったのか？　いちおう最高級の個室だと聞いていたんだがな？」

「そういう問題じゃねえよ。あんた、いったいなにを考えてる。俺に説明できないことか？」

「おまえ相手に隠し事はしないよ。そんなことをしても意味はないしな」

幾磨はそう言って、薄く笑う。矢瀬は過適応能力者（ハイパーアダプター）――魔術に頼らない天然モノの超能力者だ。それなりの条件さえ整えば、数キロメートル離れた場所からでも、他人同士の会話を聞き取ることができる。幾磨は弟のその力を、誰よりもよく理解しているのだ。

「転院させたのは警備の都合だ。一般の病室では、おまえを護り切れそうにないからな」
「護る？　俺を？」
幾磨が口にした意外な言葉に、矢瀬はなんとも言えない表情を浮かべた。
「俺の命なんかを狙ってくるやつがいったいどこに――」
「矢瀬の家督をおまえに継がせる。表向き、暗殺されたことになっている親父の代わりにな」
幾磨が、弟の疑問を遮って言い放つ。矢瀬は、一瞬、その意味を理解できずに固まった。
「俺を……矢瀬家の当主にするってことか……？」
「そうだ。おまえが成人するまでは、暫定という形になるだろうが」
「馬鹿な！　そんな勝手を一族の連中が認めるわけねーだろ！」
自分が病院にいることも忘れて、矢瀬が怒鳴る。
矢瀬本家の当主といえば、古来より政財界に影響力を行使してきた、巨大資本グループの総帥だ。手に入る絶大な権力と引き換えに、求められる器量は並大抵のものではない。
老獪な一族の重鎮たちを黙らせるだけの圧倒的な政治力がなければ、たちまちのうちに押し潰されて、悲惨な末路を辿ることになるだろう。
「だいたい俺は当主の器なんかじゃねーよ！　あんたのほうがよっぽど向いてるじゃねーか！」
「しょせん俺は愛人の子だ。せめて一族の特質だけでも受け継いでいればどうにかなったかもしれないが、俺には過適応能力なんてものは発現しなかったからな」

幾磨は、冷静に事実だけを告げてくる。矢瀬一族は代々、優秀な過適応能力者を多く輩出してきた家系だった。現当主である矢瀬顕重は、特に強大な力の持ち主だといわれている。そして幾磨には、ついにその能力は発現しなかった。矢瀬家の跡継ぎとして申し分のない実力を持ちながら、幾磨が後継者に選ばれなかったのはそれが理由だ。

「だが、基樹。おまえは違う。禁忌四字の一族の正統後継者だ。口さがない老人どもを黙らせるためにも、次期当主はおまえでなければならないのさ」

「俺が……あんたに協力しないと言ったらどうする……？」

苦々しげな口調で質問する矢瀬に、幾磨は平然と笑ってみせる。

「べつにそれでも構わないさ。おまえが相続権を放棄すれば、さすがに命までは狙われないだろう。だが、いいのか？　そうなればおまえの母親を護る者は誰もいなくなるぞ？」

「最初から俺に選ばせるつもりはなかったわけか」

矢瀬が拗ねた子どものように唇を曲げた。幾磨は悪びれない態度で首を振る。

「心配するな。面倒な実務や根回しは俺がやる。後見人でも補佐でも、好きな肩書きをつけてくれればいい。もちろんおまえが自分でやるというのなら止めはしないが」

やれやれ、と矢瀬は大きく首を振り、乱暴にベッドへと倒れこんだ。点けっぱなしだったテレビの画面を指さして、さりげなさを装った声で訊く。

「ひとつはっきりさせておきたいんだが、あの茶番を仕組んだのはあんたじゃないんだな？」

「藍羽浅葱――〝カインの巫女〟か」

幾磨が小さく舌打ちする気配があった。矢瀬が浅葱の幼なじみであるのと同じ理由で、幾磨も彼女のことをよく知っている。人工島管理公社が浅葱を利用していることを、幾磨も快く思ってはいないのだ。そのことを理解して、矢瀬はほんの少しだけ表情を緩めた。

「今ならまだ彼女を救う目はある。おまえが俺たちに協力するならな」

「俺たち……？」

幾磨の何気ない呟きに、おや、と矢瀬は眉根を寄せた。協力者の存在を幾磨が仄めかしているように聞こえたからだ。

矢瀬家の当主の地位を簒奪し、浅葱の身柄を確保する。それはある意味、人工島管理公社に対する反乱だ。そんな無謀な計画に協力する者が、そうそう見つかるとは思えない。

どういうことだ、と訝しむ矢瀬のすぐ背後で、かすかに空気が揺れる気配がした。誰もいないはずの病室の隅に、唐突に小柄な影が現れたのだ。

「保護者との話し合いは終わったか？」

驚く矢瀬の背中に向けて、舌足らずな――そのくせ傲岸な声が聞こえてきた。振り返った視界の片隅に、豪奢なドレスのフリルが揺れる。

「なんで、あんたが……？」

虚空から溶け出すように現れた女を見つめて、矢瀬はうめいた。

人形めいた幼い容姿とは裏腹に、不思議な迫力を持つ女性だった。

矢瀬の担任でもある彩海学園の英語教師。そして〝魔族殺し〟の異名とともに、欧州の魔導犯罪者を恐怖させた冷酷無比な攻魔師。

「貴様の父親と、今の人工島管理公社の理事会には、私も貸しがあるからな。進路希望で悩んでいるのなら、相談に乗ってやらなくもないぞ、矢瀬基樹？」

〝空隙の魔女〟――南宮那月はそう言って、ふふん、と尊大に笑っている。

5

紘神島特有の焼けつくような陽射しの下、煌坂紗矢華は、一棟のマンションの前に立っていた。左肩にキーボード用の大きな楽器ケースを背負い、右手で引きずっているのは使いこんだ旅行用のスーツケースだ。そして紗矢華の左手には、銀色の鍵が握られている。

ありふれた集合住宅用のスマートキーである。

しかし紗矢華は、その鍵を、高価な美術品であるかのように大切そうに握り締め、

「これが……これが雪菜のマンションの合い鍵……！」

そう言って感動に肩を震わせた。

紗矢華が見上げているマンションは、第四真祖の監視のために雪菜が滞在中の物件だ。その

部屋の合い鍵が今日になって、紗矢華の手元に送られてきたのだ。

「私がこれを受け取ったということは、雪菜とのルームメイト復活……！　獅子王機関公認で同棲が認められたということよね!?」

うふふふ、と不気味な笑みを洩らしながら、紗矢華はオートロックを解除してマンションの中へと入っていった。目的の雪菜の部屋は七〇五号室。その隣の七〇四号室が、彼女の監視対象である第四真祖――暁古城の自宅である。

エレベーターで七階に上がった紗矢華は、暁と書かれた表札を眺め、

「暁古城が隣に住んでるというのが気にいらないけど、お隣さんのよしみだし、仕方ないわね。寝坊したときに起こしたり、一緒にご飯を食べるくらいはやってあげてもいいんだけど！」

どこか言い訳がましい口調で、頬を赤らめながら独りごちた。そして紗矢華は、七〇五号室の前へと移動。玄関ドアの鍵を解除する。

「ごめん。勝手に入るね、雪菜」

雪菜たちが帰宅している気配はない。お邪魔します、と小声で呟きながら、紗矢華は彼女の部屋へと入っていった。書類の上では、この部屋は獅子王機関の所有物であるため、不法侵入ではないのだが、それでもプライベートな場所に踏みこんでいるという罪悪感はつきまとう。

だが、そんな紗矢華の罪の意識は、部屋の中を見た瞬間に霧散した。

雪菜の部屋には、私生活を感じさせる品物が、ほとんどなにも置かれていなかったからだ。

組み立て式のシンプルなベッドとキャビネット、食卓を兼ねた小さなテーブル。

それが雪菜の部屋に置かれた家具のすべてだった。開けっ放しのクローゼットの中には彩海学園の制服の予備と、ごくわずかな私服が入っているだけだ。その私服の大半は、紗矢華が雪菜のために選んで勝手に送りつけたものだった。

「相変わらずね、もう……」

寒々しいリビングを見回して、紗矢華は深々と溜息をつく。

高神の杜にいたころから、雪菜はなにも変わっていない。獅子王機関の任務だけが、彼女の生活のすべてなのだ。任務と無関係な所持品は、すべて削ぎ落とされている。それはまるで彼女自身が、いつ消えてしまってもいいと主張しているようだった。

あまりにも純粋で、それゆえに脆く頼りない――

そのことが紗矢華には、ひどくもどかしい。

幼いころに家族をなくした紗矢華にとって、雪菜は実の姉妹以上の存在だ。だから雪菜には、幸せに生きて欲しいと思う。獅子王機関の剣巫という役目から逃れることはできなくても、彼女なりの幸福を見つけることはできるはずなのだ。

そして彼女にそれを教えるのは、自分の役目だと紗矢華は思う。つまりこれはアピールが足りないということなのだ。もっと積極的に愛情を表現して、自分が雪菜をどれだけ大切に思っているか、しっかり伝えなければなるまい。彼女が消えたら悲しむ人間がいることを、雪菜に

理解してもらわなければ――

「……って、あれ？」

教科書などを入れたキャビネットの前で、紗矢華はふと視線を止める。キャビネットの上に置かれていたのは、木製の小物入れだった。中に入っているのは、正直に言って、価値のなさそうなガラクタばかりだ。箱根の温泉旅館のリーフレット、使用済みフェリーチケットの半券、ハロウィンの絵柄が描かれた菓子の空き箱や、ゲームセンターの景品とおぼしき小さなネコのぬいぐるみ。そして暁古城の写真――

生活感のない寒々しい雪菜の部屋で、その小物入れの周囲だけが、優しい温もりに包まれているように感じられた。あまり理解したくはなかったが、そこにこめられた思い出を、雪菜が大切にしていることだけはわかる。そしてその思い出の多くには、暁古城がかかわっているのだろう。そのことが紗矢華には腹立たしい。

「なんかむかつくわね。暁古城のくせに――」

紗矢華は唇を尖らせながら、雪菜のベッドに腰を下ろした。

雪菜の枕を顔に押し当てながら息を吸い、もやもやした感情を落ち着かせようとする。彼女にとって大切ななにかを雪菜が見つけることができたのなら、紗矢華としても嬉しいことだが、それが暁古城の影響というのが気に入らなかった。

なにしろあの男は世界最強の吸血鬼という極めつけの危険人物で、がさつでスケベで、雪菜

のみならず紗矢華に対しても散々不埒な行為を働いたのだ。あんな男が雪菜の傍にいるというだけで、紗矢華の胸はざわついてしまう。

しかしこうして雪菜の部屋の鍵を手に入れたからには、このまま彼を野放しにしておくつもりはなかった。これ以上、暁古城が雪菜に悪影響を与えないように、今後は紗矢華がきっちり監視するのだ。おそらく獅子王機関の上層部も、そのために紗矢華を派遣したのに違いない。

「ん？」

決意も新たに紗矢華は立ち上がり、そしてふと表情を硬くした。雪菜の小物入れの後ろ側に、まるで隠すように置かれていた容器を見つけたのだ。飾り気のない容器の表面には、びっしりと英語の注意書きが印刷されている。〝魔族特区〟でしか売られていない、特殊な医薬品のパッケージだった。

「簡易検査キット……なにこれ……？」

紗矢華は乱暴に容器を手に取った。容器の封は開いている。中身は血液を一滴たらして判定するタイプの検査薬と、基礎体温の推移を測定するためのグラフ用紙だ。

「雪菜……」

そのグラフ用紙に記された数字を見て、紗矢華は蒼白になった唇を震わせた。

呆然と目を見開いたまま、立ち眩みを起こしたようにその場にへたりこむ。

そのまま動けずにいる紗矢華の横顔を、カーテンの隙間から射しこむ夕陽が赤く染めている。

6

紘神島の中央に位置する巨大建造物、キーストーンゲートの外縁部――二階テラスに面したオープンカフェで、古城と雪菜はそれぞれ飲み物をすすっていた。

カフェの正面にあるのは、キーストーンゲートの西側エントランスだ。そこからシースルーエレベーターに乗って最上階まで上がると、紘神市のローカルラジオ局であるFM紘神の放送スタジオがある。そこで放送中の番組に浅葱が出演するということで、古城たちは、わざわざ様子を見に来たのだ。もし本物の浅葱がラジオ局を訪れているというのなら、ここで待っていれば、彼女が通りかかるのではないかという淡い期待もある。

もっともそんなふうに考えたのは、古城たちだけではなかったらしい。エントランスの周囲には浅葱のファンとおぼしき人々が集まって、彼女が出てくるのを待ち構えている。いわゆる出待ちという行動だ。待機中のファンの数は総勢三十人近く。そのほとんどは中高生で、男女比では六対四程度で女子のほうが多い。ローカルアイドルとしての浅葱の人気ぶりを、あらためて目の当たりにした気分の古城だった。

「姫柊、喰わないのか？　これ、けっこう有名らしいぞ」

トレイの上に置かれたドーナツを指さして、古城が訊く。カフェに長居するために、いちお

う注文しておいたのだ。美味いと評判のドーナツだったが、残念ながら今日の古城は、油っこいものを食べられる状態ではなかった。早朝に食べ過ぎた大量のおにぎりのダメージを、地味に今も引きずっているのだ。

「いえ、わたしは。すみません、あまり食欲がなくて」

雪菜はそう言って下を向く。注文したオレンジジュースにも、彼女はほとんど手を着けていなかった。古城の記憶が間違っていなければ、雪菜は朝食も食べてないはずだ。

「俺に謝ることじゃないけど、でも、大丈夫か？　顔色、良くないぞ？」

古城が気遣うように雪菜の顔をのぞきこむ。浅葱の自宅を訪れたあたりから、ずっと気になっていたのだが、今日の雪菜は少し弱っているような印象があった。もともと白い肌が、余計に青白く感じられるし、瞳も熱っぽく潤んでいるように見える。

しかし雪菜は、なぜかきっぱりと首を振り、

「いえ。わたしはなんともありません。少し気温が低いせいだと思います」

「……気温が低い？」

本気で言っているのか、と古城は顔をしかめた。太平洋のド真ん中に浮かぶ絃神島は、温かな海流や湿度の影響もあって、真冬でもかなり温かい。というよりも、正直暑い。しかもこのオープンカフェは西陽の直撃を受けるため、座っているだけでも汗ばむほどだ。

それでも寒さを感じているというのなら、雪菜の体調には、なにか深刻な問題が発生してい

るということになる。

「っ……！」

深刻な表情を浮かべる古城の前で、雪菜が突然咳きこんだ。

「姫柊……？」

「大丈夫、ちょっと噎せただけです。本当になんでもありませんから」

焦って立ち上がろうとした古城を、雪菜が苦しげな表情で制止する。しかし本人の言葉とは裏腹に、どう見ても大丈夫という雰囲気ではなかった。荒い呼吸を繰り返す雪菜は、吐き気をこらえているように見えなくもない。

「なんでもないってことはないだろ。叶瀬の手伝いで今朝は早かったし、さすがに疲れてるんじゃないか？　今日はもう帰って休もうぜ」

「でも、藍羽先輩の安全を確認しないと――」

「それはほら、ここで見張ってどうなるものでもないし、待ってれば向こうから連絡があるかもしれないだろ。いちおう留守電も入れといたしな」

古城は溜息混じりの声で、雪菜の説得を試みた。たしかに人工島管理公社の動きは怪しいが、今のところ、浅葱の身に差し迫った危険があるという状況ではないのだ。雪菜に無理をさせてまで、現れるかどうかもわからない浅葱を待つ理由はない。

しかし雪菜は、なぜかムキになって喰い下がり、

「いえ、わたしは大丈夫ですから。もう少しだけ様子をみましょう」
「べつにいいって。姫柊だってたまには体調の悪い日くらいあるだろ」
「どういう意味ですか。セクハラですか？」
ぞんざいな口調で説き伏せようとする古城を、雪菜はムッと不満そうに睨みつけてくる。古城は、なんでだ、と唇を歪めて、
「おまえな、せっかく人が心配してるのに……」
「とにかく、わたしの体調には問題はありません。それよりも、もう一度、藍羽先輩のご自宅に行ってみましょう。今度は式神を使って調べてみます」
「まあ、姫柊がそれでいいんなら、俺としては助かるけどさ――」
ぐったりと肩を落としながら、古城は意地を張る雪菜に屈服した。ここで不毛な押し問答を続けるよりも、適当に浅葱の自宅を調べて、さっさと引き上げたほうがマシだと思ったのだ。
グラスに残っていたアイスコーヒーを飲み干して、古城はカフェの外へと向かう。
見知らぬ世界に踏みこんだような異様な感覚に襲われたのは、その直後のことだった。
「え……？」
ぞくり、とした冷気が古城の背中を駆け抜けた。本能が危険を訴えているのだ。
「下がってください、先輩！　人払いの結界です！」
担いでいた背中のギターケースから、雪菜が銀色の槍を引き抜いた。金属製の柄がスライド

して長く伸び、折り畳まれていた三枚の刃が戦闘機の翼のように展開する。
その槍を素早く旋回させて、雪菜は低く身構えた。完全な臨戦態勢だ。
「結界……って、いつの間に……？」
古城が唖然と呟きを洩らす。
オープンカフェの客や店員、そしてエントランスにたむろしていた浅葱のファンたちの姿は、知らぬ間に一人残らず消えていた。残っていたのは古城と雪菜だけだ。
こんな街の中心部で、白昼堂々、魔術攻撃を仕掛けてきた者がいるのだ。犯人の狙いは古城か雪菜――あるいは、その両方なのだろう。そして、
「なんだ、あいつ……!?」
無人と化したエントランスゲートから、静かに歩み出てくる人影がある。
そのことに気づいて古城はうめいた。白いフード付きのマントで全身を覆った痩身の影だ。
古城たちとの距離は約三十メートルほど。しかしそれだけ離れていても、相手が放つ異様な気配ははっきりと感じられた。
殺意や敵意というよりも、大きな嵐が近づく前の、張り詰めたような静けさに近い。ほんの些細なきっかけで、すべてを薙ぎ払う暴風へと豹変しそうなおぞましさがある。
「先輩、気をつけてください……あの人は、危険です」
雪菜が、かすかに怯えたような口調で警告する。

「あ、ああ……だけど、あいつ、べつになにも――」

武器を持っていないのではないか、と古城が呟きかけた直後、タン、と軽い音を立てて白いマントの影が跳んだ。重力を無視した異様な動きで、古城たちとの距離を詰めてくる。

「〝雪霞狼〟！」

雪菜が構えていた銀色の槍が、青白い光に包まれた。ありとあらゆる結界を斬り裂き、魔力を無効化する神格振動波の輝きだ。

その輝きを、粒子のように撒き散らしながら、雪菜が前に飛び出した。呆然と立ち竦む古城を庇って、白マントを迎撃しようとしたのだ。

だが、その雪菜の眼前で、白マントの姿がゆらりと霞んだ。

足捌きによるフェイントと、高速の重心移動が生み出す残像だ。

獣人種族の反応速度をも上回る雪菜の攻撃を、白マントは易々と回避した。雪菜は咄嗟に槍を旋回させて、続けざまに無数の連撃を放つが、それでも白マントはとらえきれない。

焦る雪菜を嘲笑うように、白マントは彼女の猛攻をすり抜け、棒立ちの古城の前に着地した。反射的に身構える古城の胸元へと、白マントが揃えて伸ばした指先を向ける。その指先から放たれたのは、魔力で紡がれた見えない刃だった。

「――っ!?」

声にならない悲鳴とともに、古城の身体が吹き飛んだ。制服の胸元が派手に裂け、古城の喉

から鮮血がこぼれる。古城が不老不死の吸血鬼でなければ、絶命してもおかしくない衝撃だ。

「暁先輩！」

傷つく古城の姿を見て、雪菜の瞳に怒りの色が浮いた。槍の石突きを地面に叩きつけた反動で一気に白マントとの距離を詰め、体重を乗せた最速の一撃を放つ。

そして白マントは雪菜に背中を向けたまま、その攻撃を余裕でかわしてみせた。

絶望的なまでの力の差だった。獅子王機関の剣巫である雪菜が、一方的にあしらわれている。失望した、というふうに白マントがフードの下で首を振る。そのほっそりとしたシルエットが、二重写しとなって古城の視界の中でダブる。

「なんだ……分身……だと!?」

古城が絶句して見つめる前で、白マントの肉体が分裂する。一瞬の残像ではなく、完全な分身だ。古城と雪菜、二人を同時に倒すために、魔術による分身体を作り出してみせたのだ。

二体の白マントが、それぞれ左腕を伸ばす。広げた掌の中に現れたのは、無数の光の球体だった。球体はやがて輝きを増し、鋭く尖った光の矢へと変わる。

「霊弓術!?　この技、まさか――!?」

雪菜の表情が恐怖に強張った。

頭をすっぽりと覆ったフードの下で、白マントが赤く濡れた唇を吊り上げる。

「――獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る！」

後退した雪菜が槍を構え直し、目を伏せて静かに呼吸を整えた。その唇から厳かな祝詞がこぼれ出す。負傷で動けない古城を護るため、魔力無効化の結界を張り巡らせようとしたのだ。

白マントの魔術がどれほど強力でも、神格振動波の結界は破れない。だが、

「遅い――」

雪菜の結界が完成する前に、彼女の足元の地面が割れた。

割れ目から出現したのは、錆びた鎧をまとった動く死体だ。全身の肉が腐り落ちて、骨と関節をつなぐ腱だけが残っている。頭骨の中は空洞で、脳も眼球も入ってはいなかった。なのにその骸骨は錆びた槍を構えて、雪菜の呪術を妨害したのだ。

「く……あっ……！」

死体が繰り出す槍の一撃を、雪菜が〝雪霞狼〟で受け止める。だが、骸骨の兵士は圧倒的な膂力で、そのまま槍を振り抜いた。小柄な雪菜は、そのまま為すすべもなく吹き飛ばされて、アスファルトの道路に叩きつけられる。

「姫柊っ!?」

古城は、傷ついた身体を無理やり引きずるようにして立ち上がる。

雪菜を襲った骸骨兵士は、魔力によって生み出された白マントの使い魔だ。見た目とは裏腹に動きが速く、通常の生物ではあり得ない圧倒的な腕力を持っている。

しかし古城を瞠目させたのは、骸骨兵士の容姿や腕力ではなかった。

錆びた槍を構えた骸骨兵士が、雪菜と同じ動きをしている。二人の構えは瓜二つだ。その構えから繰り出される攻撃も同じ――白マントの使い魔は、剣巫の技を使っているのだ。

「くそっ……この距離じゃ……」

激しい攻防を続ける雪菜と使い魔を睨んで、古城がギリギリと歯噛みする。吸血鬼が自らの血の中に棲まわせている召喚獣――眷獣の力を使えば、骸骨兵士を倒すのは簡単だ。

しかし、雪菜が近くにいる限り、古城の眷獣は使えない。強力すぎる古城の眷獣の攻撃は、雪菜をも確実に巻きこんでしまうからだ。

「悪いけど、おまえさんの相手はこっちだよ」

分身した白マントの一体が、負傷した古城を見下ろして冷ややかに告げてきた。予想外に若い女の声だ。悪戯っぽく響く洒脱な口調に、古城は戸惑う。どこか聞き覚えのある声だった。

「少し大人しくしていてもらおうかね、第四真祖」

そう言って白マントが左手を振った。

放たれた無数の光の矢が、複雑な軌跡を描いて飛来し、四方から古城を襲ってくる。そのすべてをよけるのは、吸血鬼の反応速度をもってしても不可能だった。

「ぐっ――!?」

両手両脚を同時に撃ち抜かれて、古城は地面に転がった。想像したほどの痛みはない。だが、白マントの予告どおり動けない。四肢を貫いた光の矢が、古城を地面に縫いつけているのだ。

「先……輩……！」

血まみれの古城を目にした瞬間、雪菜の瞳から光が消えた。

動きを止めた彼女を目がけて、骸骨兵士が槍を突き出す。その錆びた槍の穂先が根元から、飴細工のように斬り裂かれて地面に落ちた。

雪菜が無造作に放った銀色の槍が、骸骨兵士の全身を粉々に打ち砕く。

使い魔を操っていた白マントが、初めて動揺する素振りをみせた。

「あ……あああっ……あああああああああああああぁ――っ！」

雪菜が声を振り絞る。悲鳴とも雄叫びともつかない悲痛な絶叫だ。〝雪霞狼〟が目の眩むような激しい閃光を放つ。白マントが放った光の矢は、そのすべてが閃光に呑まれて消えた。

「姫柊……!?」

地面に縫い止められたまま、古城は呆然と呟いた。

分身した二体の白マントが、同時に雪菜を目がけて攻撃を仕掛けた。古城の胸元を抉った、あの手刀の一撃だ。だが無数の残像を伴うその攻撃を、雪菜はことごとく回避した。

青白い閃光とともに雪菜が跳び、二体の白マントを銀色の槍が刺し貫く。

襲撃者の全身を覆うマントが、乾いた音を立てて地面に落ちた。

分身の一体が消滅し、骸骨兵士の残骸も煙のようにかき消えた。古城を地面に縫い止めていた矢も消えている。

それを確認した雪菜の身体が、力尽きたようにぐらりとよろめいた。〝雪霞狼〟が放っていた輝きも消え去り、雪菜は槍の重さに耐えかねたように膝を突く。

「姫柊!?　しっかりしろ、姫柊……!?」

荒い呼吸を続ける雪菜の傍に、古城は懸命に駆け寄った。

そんな二人の姿を眺めて、白マントを拾い上げた襲撃者が気怠く息を吐いている。

マントの下の襲撃者の素顔は、美しい顔立ちの女だった。

若く見えるが、実際の年齢はわからない。透きとおるような白い肌。淡い萌葱色の髪と、同じ色の瞳。鼻筋のとおった彫りの深い顔立ち。そして尖った長い耳。彼女は魔族。長生種だ。

〝魔族特区〟の住人である古城すら、初めて目にする極めて稀少な魔族だった。

「やれやれ。南宮那月を相手に〝神憑り〟を使ったと聞いたときから、もしやとは思っていたのだけどね。この力……やはりそういうことだったんだね、雪菜?」

腕の中に抱いた猫を撫でながら、長生種の女が問いかける。古城に肩を借りていた雪菜が、怯えた子どものように全身を硬くした。

キッ、と古城は、怒りの視線を長生種に向け、

「おまえ……姫柊のことをなんで知って……!?」

「師家……様……」

古城の疑問を遮るように、雪菜が震える声で長生種の女を呼んだ。

長身の長生種は萌葱色の瞳で、雪菜を冷ややかに見つめている。

激しく混乱した表情で、古城は彼女たちの顔を見比べた。雪菜が師家と呼ぶ人物を、古城はたった一人しか知らない。獅子王機関の縁堂縁。雪菜の師匠に当たる人物だ。

「師家様って……え？　ってことは、まさか、あんたがニャンコ先生の本体なのか……!?」

長生種の女が抱いている猫を見つめて、古城は今度こそ絶句する。艶やかな黒い毛並みに金色の瞳。細い首輪につけられた金緑石の飾り。たしかに見覚えのある猫だった。縁堂縁が操っていた使い魔だ。

「自覚がなかったわけじゃないんだろ？　いつから気づいていたんだい、雪菜？」

震えている雪菜を睨めつけて、縁が訊く。

雪菜はなにも答えない。縁から目を逸らしたまま、無言で唇を噛んでいるだけだ。

「さて、どうしたものかね。実際にこの目で確かめた以上、あたしとしても見過ごすわけにもいかないのだけれどね」

そう言って縁は屈みこみ、銀色の槍に手を伸ばした。雪菜はハッと胸元に〝雪霞狼〟を抱き寄せて、縁に奪われまいと抵抗する。

「駄目です……師家様、今はまだ……！」

「雪菜！」

縁が鋭い声で雪菜を叱責する。しかし雪菜は槍を手放さない。

「待てよ、おい!?　なんで、ニャンコ先生が姫柊を攻撃してくるんだ!?」

状況を理解できないまま、古城は雪菜たちの間に割って入った。このまま黙って見ていたら、師弟二人が戦闘を再開しそうな予感があったからだ。

その古城の耳元に、雪菜がそっと唇を寄せた。そして思い詰めたような早口で告げてくる。

「逃げます、先輩！」

「え!?　逃げるって――」

どうやって、と古城が訊き返す前に、雪菜は制服の裾から呪符をばらまいていた。

チッ、と縁の舌打ちが聞こえる。さすがの彼女も、あの生真面目な雪菜が、この期に及んで自分に逆らうとは予想していなかったのだ。

「響よ――！」

縁の反応が遅れたほんの一瞬の隙に、雪菜は呪符の起動を終えていた。金属製の式神符が、猛禽の群れに姿を変えて縁を襲った。獅子王機関の剣巫ではなく、舞威媛が得意とする遠隔攻撃呪術。その意外な攻撃のせいで、縁の迎撃は、さらにひと呼吸遅れた。

その間に雪菜は、巨大な狼型の式神を作り出し、その背中に乗って逃走を始めていた。もちろん古城も彼女と一緒だ。〝雪霞狼〟を持つ雪菜に対しては、追跡魔術も効果が薄い。縁の能力をもってしても追撃するのは困難だ。

あえて苦手な遠隔攻撃呪術を使うことで、雪菜は、師匠である縁を出し抜いたのだ。

半年前までの雪菜なら、おそらく思いつきもしなかった戦い方だろう。
間違いなく雪菜は成長している。縁の想像すら上回るスピードで。その予想外の成長速度が、雪菜にとっての不幸であることに果たして本人は気づいているのか――
「雪菜……おまえは……」
長生種の攻魔師が、萌葱色の美しい瞳を細めて嘆息する。
彼女の腕に抱かれた黒猫が、黄昏の空を見上げて小さく鳴いた。

第二章 第零層

Into The Stratum Zero

1

夕暮れの街を、真紅の戦車が疾走している。全長はせいぜい軽自動車程度。リクガメに似たずんぐりとした形の、超小型有脚戦車である。

市街地における対魔族戦闘を想定して設計された、有脚戦車の機動性は高い。多少の段差や障害物は余裕で乗り越えるし、場合によっては垂直の壁すらよじ登ってみせる。瞬間的な最高速度は時速百二十キロにも達しているだろう。建物の密集した都市圏において、この機体に追いつける者がいるとは思えない。

しかし有脚戦車の操縦者が、速度を落とす気配はなかった。強化プラスチック製の真紅の装甲には、無数の傷が刻みつけられている。逃走を続ける有脚戦車を、何者かが追撃しているのだ。

『警告――六時方向に敵影。距離千八百。総数四』

有脚戦車のコクピット内には、警告音が絶え間なく鳴り響いていた。

バイクに跨がるような姿勢でそれを聞いていたのは、十二歳前後の小柄な操縦者だ。燃えるような赤い髪を持つ、外国人の少女である。身体にぴったりフィットするパイロットスーツを着て、その胸元に縫いつけられたゼッケンには、ひらがなで『でぃでぃえ』と書かれている。

「追っ手か。さすがに速いでござるな」

表示された追跡者たちの情報を眺めて、リディアーヌ・ディディエは舌打ちした。

戦車の脚部に内蔵された走行用モーターは、すでに限界以上に過熱して、出力が低下し始めている。速度を上げて逃げ切りたいところだが、今の状況では困難だ。

『相対速度マイナス七十六・六メートル毎秒。接触まで推定十七秒』

戦車の戦闘補助人工知能AIが、再び警告を発してくる。リディアーヌは拗ねた子どものように頬を膨らませ、武器の安全装置をすべて解除した。

「発煙弾投射。電撃地雷散布！」

『――発煙弾投射。電撃地雷、装填。散布開始』

補助人工知能AIがリディアーヌの指示を復唱し、搭載された兵装を射出する。

ディディエ重工・紘神島ラボで開発された発煙弾は、獣人種族の嗅覚や、呪術による追跡を阻害する特別製。電撃地雷には平均的な魔族を半日程度、昏倒させる威力がある。いかに凄腕の追跡者といえども、そう容易く乗り越えられる妨害ではないはずだ。が――

次の瞬間、有脚戦車を襲ってきたのは、予期せぬ方角からの衝撃だった。

有脚戦車の直上からの、巨大な斧を振り下ろしたような一撃だ。

想定外の荷重をかけられた有脚戦車の球体ホイールが、路面のグリップを失ってスピンする。接地した腹部装甲が、アスファルトを削って火花を散らした。

「膝丸、今のは!?」

『対物ライフルによる狙撃です。損傷は軽微。弾道解析――射手の位置を特定』

「機銃全門斉射！」

『了解。自動照準、銃撃開始』

有脚戦車に搭載された四門の対人機銃が火を噴いた。もとよりビルの屋上にいる狙撃手を、地上から狙えるとは思っていない。だが、敵の狙撃を妨害する程度の効果はあるだろう。

その間に有脚戦車は姿勢を立て直し、逃走を再開しようとする。

だが、それよりも一瞬早く、煙幕の中を突っ切って現れた追跡者の一人が、有脚戦車の背面へと跳び乗っていた。

「肉薄攻撃!?　取りつかれたござるか!?」

『機銃弾、残弾数ゼロ。弾幕、維持できません』

「旋回！　振り落とせ！」

リディアーヌが有脚戦車を強引に回転させて、追跡者の迎撃を試みる。普通の人間では決して耐えられないであろう急激な加速。だが、追跡者は平然と有脚戦車の背中に張りついたまま、小脇に抱えた武装を構えてくる。

「まさか、こやつら――普通の人間ではない!?　特区警備隊の魔導打撃群でござるか！」

敵の正体に気づいて、リディアーヌがうめいた。魔導打撃群とは、特区警備隊の中でも最強

を噂される、公社理事会直轄の特殊部隊である。ただし、人工島管理公社はその存在を認めていない。魔導打撃群に所属する攻魔師の装備は、紋神島における魔族研究の成果をフィードバックして造られているからだ。魔族の生体研究成果の軍事利用――それは〝魔族特区〟最大の禁忌なのである。

漆黒の戦闘服を着た追跡者が、有脚戦車の前脚へと銃口を向けた。六本の銃身を持つ機関銃が、至近距離から猛然と弾丸を撃ち放つ。

その銃撃は有脚戦車の装甲を突き破り、左の前脚を完全に破壊した。

「膝丸！」

リディアーヌがたまらず悲鳴を上げる。旋回中だった有脚戦車が、バランスを崩して道路の側壁に激突する。

『小口径ガトリング銃の至近弾です。左前脚部、大破。第四関節の連結を解除』

「ワイヤーアンカー射出！　モノレールの橋脚を使って、海に逃げるでござる！」

リディアーヌが補助人工知能に指示を出す。

彼女が〝膝丸〟と名付けた有脚戦車の装甲材は、特殊な呪術強化プラスチックだ。耐衝撃性能に優れたその装甲は、二十ミリ砲弾や対戦車ロケット弾の直撃にも耐えるが、連続した攻撃を一点に集中されると意外に脆い。次に同じ攻撃を喰らったら、今度こそ、〝膝丸〟は完全に破壊されてしまうだろう。

『ワイヤーアンカー使用不能。射出装置、破壊されました。後脚部及び主電源ユニット大破。生命維持装置を予備電源に切り替えます』

補助人工知能から次々に損害報告が上がってくる。次々に失われていく操縦席の計器の光を、リディアーヌは呆然と眺めていた。

「ここまでござるか……」

自嘲するように微笑んで、赤毛の少女は自爆装置に手を伸ばす。

リディアーヌは、兵器産業の名門企業、欧州ディディエ重工に育てられたエリート・チャイルドだ。そして試作有脚戦車の開発者兼テストパイロットとして〝魔族特区〟に派遣されてきた。戦いで命を落とすことに、多少の口惜しさはあるものの後悔はない。リディアーヌが頑なにサムライの口調をやめないのは、死を恐れない彼らの高潔な精神性に、憧れを抱いているからだ。

そんな彼女の唯一の心残りは、友人を救い出せなかったことだ。幽閉された友人の救出に失敗して、リディアーヌは追われていたのである。

魔導打撃群の攻魔師たちが、銃を構えて近づいてくる。彼らが十分に近づくのを待って、リディアーヌは自爆装置を起動しようとした。

有脚戦車のメインモニタが、閃光で白く染まったのは、その直後だ。

「……っ!?」

攻魔師たちの顔色が変わった。

一切の前触れもなく吹きつけてきたのは、肌を焼き焦がすような濃密な魔力だ。

それは巨大な刃と化して、容赦なく地上を薙ぎ払う。

突然の衝撃に巻きこまれて、リディアーヌを包囲していた攻魔師たちが、為すすべもなく吹き飛ばされた。周囲の建物が崩壊し、道路がえぐれる。それはまさに天災そのものの光景だった。普通の人間なら、その一瞬で落命しても不思議ではない。

「ほう。今のに耐えるか」

必死に衝撃波に抗う攻魔師たちの背後から、感心したような声が聞こえてくる。

声の主は小柄な少年だった。美しい黒髪に褐色の肌。瞳の色は黄金だ。

幼さを残した顔つきに似合わず、少年の姿には不思議な威厳が感じられた。気性の激しい若い獅子を見ているようだ。その威圧感に打たれたように、攻魔師たちが身構える。

「その強化服、獣人の細胞を植えこんでいるのか。俺の記憶違いでなければ、魔族の生体組織の軍事利用は、聖域条約の禁止事項だったはずだが？」

無造作に歩みを進めながら、少年が冷ややかに語りかけてくる。

「なんと……」

傷ついた有脚戦車の中で、リディアーヌは言葉をなくしている。

少年の名をリディアーヌは知っている。イブリスベール・アズィーズ。第二真祖

〝滅びの瞳〟直系の第二世代の吸血鬼。〝滅びの王朝〟の王子である。

なぜ彼がこんなところに、と訝るリディアーヌの眼前で、攻魔師たちが動き出していた。

「吸血鬼……〝旧き世代〟だ。眷獣に警戒しろ」

小隊長らしき男が仲間に指示を出す。全身に傷を負いながらも、攻魔師たちの動きに乱れはなかった。たちまちイブリスベールは包囲され、銃口が彼に向けられる。

「その戦車乗りの小娘とは縁があってな。寄ってたかってずいぶんと嬲ってくれたようだが、今すぐに立ち去れば見逃してやるぞ、下郎ども」

吹き寄せる殺気を歯牙にもかけずに、イブリスベールは陽気に笑った。

恐怖に衝き動かされたように、魔導打撃群の小隊長が絶叫する。

「第二小隊、各自の判断で狙撃を許可する。撃て――」

「愚か……」

攻魔師たちの放った弾丸が、透明な壁に堰き止められたように失速する。イブリスベールが無意識に撒き散らす魔力が、物理的な重圧となって弾丸を押し戻したのだ。

「な……!?」

小隊長の声が驚愕に震えた。その動揺が隊員たちにも伝わっていく。なまじ腕の立つ攻魔師だからこそ、彼らは気づいてしまったのだ。自分たちが敵に回した少年の本当の恐ろしさに。

「切り刻め、〝ケベフセヌエフ〟――」

イブリスベールが放つ魔力の霧が、猛禽の姿となって実体化する。翼長十四、五メートルにも達する金色のハヤブサだ。その巨大な翼が巻き起こす風が、無数の刃と化して渦を巻く。

「貴様。まさか〝滅びの瞳〟直系の……」

小隊長が、恐怖の相でイブリスベールを見た。だが、彼の言葉はイブリスベールの耳には届かない。黄金の眷獣が巻き起こした竜巻が、魔導打撃群の攻魔師たちを一人残さず呑みこんでいたからだ。周囲の被害を抑えるために手加減しても、なおその威力は圧倒的だった。膨大な魔力が生み出す衝撃と刃が、彼らの戦闘服を引き裂き、武装を無力化していく。

やがて暴風が消え去ったとき、その場に無傷で立っていたのは、イブリスベールだけだった。異国の王子が身に着けているのは、金糸で縁取られた豪華な白装束。そして彼の左右の手には、それぞれコンビニチェーンの買い物袋と、湯気の立つカップ麺が握られている。

「やれやれ。麺が伸びてしまったではないか、雑魚どもめ」

カップ麺の容器を見下ろして、イブリスベールは不興げに小さく鼻を鳴らした。コンビニで購入したカップ麺を、彼は滞在先のホテルに持ち帰る途中だったのだ。

そして彼は、中破した有脚戦車に目を向けて、やれやれ、と再び溜息をつく。

2

放課後の暁凪沙は忙しい。委員会や部活や宿題や、掃除、洗濯、夕飯の準備。週に一、二度、気まぐれに帰宅する母親は、大量の洗濯物を持ち帰るのが常だし、入院中の父親の見舞いにも、たまには行ってやらねばならない。兄の古城がいれば遠慮なくこき使うこともできたのだが、今日の彼は帰宅が遅くなると聞いていた。

そんなわけで凪沙が今日のぶんの家事を片付け終えたときには、なんだかんだで午後六時を過ぎていた。夕飯のおかずをつまみ喰いしつつ、まったりと古城の帰宅を待つことにする。

来客を知らせるチャイムが鳴ったのは、それから間もなくのことだった。

「はいはい。ちょっと待ってくださいね」

短パンにTシャツというラフな服装のまま、凪沙は玄関へと向かう。

そしてドアを開け、ギョッとした。そこに立っていたのは、見知らぬ学校の制服を着た少女だった。すらりとした長身で、芸能人かと疑うほどにスタイルがいい。ポニーテールにまとめた長い髪は淡い栗色。咲き誇る桜を連想させる美しい少女だ。

「って、あれ？　え？　あ、雪菜ちゃんの先輩の――」

凪沙は警戒心もあらわに彼女を見た。以前にも何度か、遭遇したことのある相手だ。名前は、

たしか煌坂紗矢華。姫柊雪菜が絃神島に来る前に通っていた学校の先輩らしい。

そんな彼女を、凪沙が今ひとつ信用できずにいるのは、初対面の印象が最悪だったからである。彼女と古城の喧嘩に巻きこまれて浅葱が怪我をした現場を、凪沙は目撃してしまったのだ。

当時の凪沙の紗矢華に対する印象は、やたら美人だが情緒不安定で、すぐに刃物を振り回すアブナイ女、という程度のものであった。

しかし今日の紗矢華はずいぶん印象が違った。今にも泣き出しそうな頼りない表情を浮かべ、怯えたような目で凪沙を見ている。さんざん思い悩んだ挙げ句に、藁にもすがる思いで訪ねてきたのだろう、と思えた。

「こんにちは。あの……暁古城は、いる？」

紗矢華が遠慮がちな声で訊いてくる。

凪沙は、なんとなく申し訳ない気持ちになって、

「まだ帰ってきてないんです。今日は矢瀬っち――友達のお見舞いに行くって言ってたから」

「そう……じゃあ、雪菜も一緒よね」

「はい。そうだと思います……けど」

凪沙は迷いなく首肯する。古城と雪菜が二人一緒に行動するのは、見慣れたいつもの光景だ。最初のうちこそ、つき合っているわけでもないのに、と不思議に思っていたのだが、最近では、むしろ当たり前すぎて、疑問を覚えることすらなくなっていた。

「あの……あなた、雪菜のクラスメイトなのよね？」
「え？　あ、はい」
近づいてくる紗矢華の迫力に、やや威圧されながら凪沙はうなずいた。紗矢華は、なにやら思い詰めたような真剣な眼差しで凪沙を見つめ、
「最近の雪菜の様子はどう？　なにか変わったことはなかった？」
「え？　変わったこと、というと？」
「その……怠そうとか、眠そうとか、熱っぽくて目が潤んでるとか……」
「え、なんですか？　風邪気味ってことですか？」
今イチ要領を得ない紗矢華の疑問に、凪沙は困惑しつつ訊き返す。
ここ最近の雪菜の様子は、いつもと変わりなく感じられた。早朝の炊き出しボランティアのせいで、やたら眠かったのは凪沙のほうである。だが、強いて普段との違いを探すなら――
「そう言えば、雪菜ちゃん、食欲はなさそうだったかも。昨日の夜も、あまり食べてなかったし。吐き気がするからって、今日のお昼はレモンスカッシュだけ飲んでたし」
あんなに華奢なくせに、これ以上ダイエットしてどうするのか、と凪沙は冗談めかした口調で言う。しかしそれを聞いた紗矢華の反応は劇的だった。
「やっぱり……」
蒼白な顔でよろめいた紗矢華が、手に持っていたなにかを足元に落とした。端整な目元を両

手で覆って、苦悩するように膝を突く。

「暁古城の馬鹿……あたしの雪菜になんてことをしてくれるのよ……！」

「え？　古城君……？」

紗矢華の意味ありげな呟きに、焦ったのは凪沙のほうだった。古城と雪菜のなんらかの行為が、紗矢華をこんなにも動揺させているらしい。

「待ってください。うちの古城君が雪菜ちゃんになにをしたんですか？　ていうか、こんなところで立ち話もなんだし、うちに上がってってください。晩ご飯の準備も出来てますから、食べながら古城君たちの帰りを待っててもらっても――」

放心したようにうずくまっている紗矢華を、凪沙が家の中に引き入れようとする。そもそも紗矢華のような目立つ少女が、玄関先に座りこんでいる状況が異常だ。こんな光景を近所の人たちに見られたら、どんな噂が立つかわかったものではない。

しかし紗矢華は虚ろな眼差しで顔を上げ、

「ありがとう。でも、早く雪菜を見つけないといけないから……今のあの子は普通の身体じゃないんだし」

「は、はい……!?」

よろめきながら立ち上がった紗矢華が、ふらふらとおぼつかない足取りで歩き去って行く。凪沙はそんな紗矢華の背中を、不安な気持ちで見送った。

やがて紗矢華の姿が完全に見えなくなったころ、凪沙は足元に落ちていたケースに気づく。
「なにこれ？　テスト……キット？　えーっと、検査薬ってことだよね……」
漠然とした不安に襲われながら、凪沙はケースをつまみ上げた。
おそらく紗矢華の落とし物だ。親指ほどの大きさのプラスチック製ケースの中には、液体と小さな紙切れが入っている。長い入院生活を経験したことのある凪沙には、見ただけで、だいたいの使い途が想像できた。血液を一滴ばかり垂らすと、ケースの中の試薬が反応して、体調の変化を判定してくれるという代物だ。
たとえばウイルスの感染状況やアレルギー、あるいは妊娠しているか否かについて――
「診断結果は……陽性……え？」
ケースに書かれていた説明文を眺めて、凪沙は今度こそ絶句する。

3

運河沿い――高速道路の高架橋の下で、暁古城は滴り落ちる雨粒を眺めていた。
古城と雪菜が、縁堂縁から逃げ出した直後に、大粒の雨が降り始めたのだ。
太平洋上に浮かぶ絃神島では、突然の夕立や通り雨はめずらしくない。しかし今日の雨は、少し長引きそうだった。人工島の街並みが夕霧に煙って、視界が悪い。逃走中の古城たちにと

って は好都合といえなくもないが、それよりも鬱陶しさのほうが優っていた。

「先輩、怪我は大丈夫なんですか？」

ぐったりと座る古城を不安そうに見つめて、雪菜が怖ず怖ずと訊いてくる。

古城の制服は血まみれだ。四肢にはそれぞれ弓矢で貫かれたような刺し傷が刻まれ、胸元は、ばっさりと左右に斬り裂かれている。縁堂縁にやられた傷である。ろくに抵抗もできないまま、一瞬でここまでの重傷を負わされたのは、正月に〝静寂破り〟にやられて以来のことだった。獅子王機関の三聖と同等以上の戦闘能力。それだけでも縁の底知れない実力がよくわかる。雪菜が彼女を恐れるのも無理はない。が――

「もうだいたい治ったかな。着替え、買ってきてくれてサンキュな」

古城が両手にぐっと力を入れてみせる。縁にやられた全身の傷は、わずかなむず痒さだけを残して、ほぼ完治していた。吸血鬼の真祖のデタラメな再生能力の賜物だ。

「いえ。元はと言えば師家様が、あんな無茶をしたのが原因ですし」

雪菜が硬い表情で首を振る。古城を巻きこんでしまったことに、責任を感じているのだろう。

そうだな、と古城は、両手を頭の後ろで組みながら気怠く笑い、

「ニャンコ先生の中身が、まさかあんな美人とは思わなかったな。しかもあんな暑苦しそうなマントなんか着こみやがって。中にいた猫が熱中症になったらどうする気だよ」

「心配するところって、そこですか？」

雪菜がようやく少しだけ表情を和らげた。古城はそんな雪菜をふと見上げて、
「そういやニャンコ先生のヤツ、どうして姫柊を襲ってきたんだ？　弟子の腕試しにしては、ちょっと過激すぎないか？」
「師家様は、わたしを追い詰めたかったんだと思います。ギリギリまで」
ためらうような短い沈黙を挟んで、雪菜が弱々しく微笑って答えてくる。古城は、彼女のその表情に困惑を覚えた。
「姫柊に本気を出させるためにか？　なにかそこまでする理由があったのか？」
「はい。たぶん」
雪菜は唇を噛んで目を伏せる。それきり沈黙を続けているのは、それ以上は喋らないという意思表示なのだろう。なにかしら古城には言えない事情があるらしい。
「まあいいか。それより姫柊、寒くないか？　このまま雨が長引くようなら、コンビニでビニール傘でも買ってきて帰るって手も――」
やる気のない口調でそう言って、古城は億劫げに立ち上がった。その背中に、とん、と軽い衝撃が伝わってくる。制服越しに伝わってきたのは、かすかな温もりと柔らかな弾力だ。
無警戒だった古城の背中に、雪菜が全身を密着させて抱きついてくる。予期せぬ彼女の行動に、古城は動揺を隠せない。
「ひ、姫柊……!?」

「先輩……わたし、今夜は帰りたくありません」
「は!?　はあ……!?」
耳を疑うような雪菜の言葉に、古城の思考が停止した。
「いや、おかしい。その言い方はいろいろおかしいだろ！　ていうか、帰りたくないもなにも、姫柊は一人暮らしなんだし――」
「ですが、あの部屋はもともと獅子王機関が用意したものです。おそらく今ごろは獅子王機関の追っ手に占拠されているとみて間違いないかと」
「え？　ああ、帰りたくないってそういう意味か……」
雪菜の真意を理解して、古城はどうにか混乱から立ち直る。当然といえば当然のことだが、雪菜もやはり不安を感じているのだ。師匠である縁堂縁に襲撃され、育ての親とも呼ぶべき獅子王機関に追われているのだから、落ち着いていられるはずもない。
「いやでも、なんで獅子王機関が姫柊のことを追い回すんだ？　俺が狙われるのならまだわかるけど、姫柊はなにも悪くねーだろ。さっきの戦いだって正当防衛だし」
「いえ。獅子王機関がわたしを危険視する理由はわかります」
古城の背中から手を離し、雪菜は力無く頭を下げた。彼女のほうに向き直り、古城は無言で眉を寄せる。ここ数日、雪菜の様子がおかしいことには、古城もなんとなく気づいていたが、だからといって獅子王機関に狙われるような問題を彼女が起こすとは思えない。

おそらく縁堂縁との短い会話の中に、雪菜が狙われている理由が隠されていたのだろう。しかしどれだけ考えてみても、古城にはその理由を想像することができなかった。

戸惑う古城を気遣うように、雪菜は微笑んで首を振る。

「我が侭を言ってすみませんでした。先輩は先に帰ってください。凪沙ちゃんも心配してると思います」

「先に帰れ……って、姫柊はどうする気だ？」

なにかを吹っ切ったような表情の雪菜に、古城は嫌な予感を覚えて訊いた。

「わたしはもうあの部屋には戻りません。でも、安心してください。先輩のことはちゃんと監視してますから。最後までちゃんと見てますから」

「いや、安心できねえよ。恐ェよ、そんなこと言われたら」

鳥肌の立った二の腕をさすりつつ、古城は深く溜息を洩らす。思い詰めたような目をした今の雪菜を、このまま放置しておくのは、どう考えても危険だ。

それに古城たちが自宅に戻ったせいで、無関係の凪沙が、獅子王機関の襲撃に巻きこまれるような事態は避けたかった。少なくとも事情がはっきりするまでは、なるべく外にいたほうがいいのかもしれない。

「まあいいか。どうせ明日は学校も休みだしな。どっかで着替えて、カラオケでも行くか」

「カラオケ……ですか？」

唐突な古城の提案に、雪菜がきょとんと目を瞬く。行き先がカラオケである必要は特にないのだが、中高生が日没後に、怪しまれることなく長時間過ごせる場所は多くない。その中で、なんとなく真っ先に思いついたのがカラオケボックスだったのだ。

「そういや姫柊と一緒にカラオケに行ったことってなかったよな。ていうか、そもそも姫柊はカラオケって知ってるのか？」

本気で質問してくる古城を睨んで、雪菜が唇を尖らせた。

「あの……もしかして馬鹿にされてますか？　わたしだって歌くらい歌いますよ」

「え？　そうなのか？」

古城が意外そうに訊き返し、雪菜はますます不機嫌な顔になる。

とはいえ、高神の杜で過酷な訓練を課せられてきた雪菜たちが、カラオケに興じる姿というのは、なかなか想像しがたい光景だった。楽器ケースに槍や剣を仕込んで普段持ち歩いている連中が、いったいどんな歌を歌うというのか。

「それはまあ流行りの音楽には詳しくないですけど……あ、でも藍羽先輩の曲は覚えました」

少し得意げに言い放った雪菜が、ハッと自らの失言に気づいてうなだれる。

ここ最近、街の至るところで流れている浅葱の歌は、人工島管理公社が作り上げた偽物だ。それを証明するために、古城たちは浅葱に会おうとしていたのだ。

「すみません、わたし……そういうつもりじゃ……」

「べつに謝ることはないだろ。曲そのものに罪があるわけじゃないんだし」
自分を気遣う雪菜の額を、古城は軽く指先で弾く。痛、と額を押さえる雪菜は、どこかホッとしているようにも見えた。
「じゃあ、カラオケには行くとして、その前にラーメンでも喰いにいかないか？　さすがに、ちょっと腹が減っちまった。だいぶ流血させられたしな」
「ラーメンですか？　そうですね、麺類ならわたしも食べられるかも」
「たしか、この近くに美味い店があるんだよ。浅葱に教えてもらったんだけど」
なんて店だったっけ、と古城は記憶を辿った。見かけによらず大喰いキャラの浅葱は、普段から絃神市内の有名店のチェックに余念がない。中でも彼女のお気に入りのラーメン屋には、古城も何度かつき合わされていた。そのうちの一軒が、この付近にあったのだ。
幸いなことに雨の勢いも、ちょうど衰えてきたところだった。
雪菜を連れて商店街のほうへと歩き出しながら、古城はそれを思い出す。
「そうか――〝麺屋いとがみ〟だ」

4

店内は、異様な雰囲気に包まれていた。

〝麺屋いとがみ〟の店舗があるのは、人工島西地区。駅近くの雑居ビルの一階だ。カウンター席が九つとテーブル席が四卓。屋台をイメージした店構えの、ごく一般的なラーメン店である。店内はほぼ満席で、店の外まで行列が伸びている。

その店内いちばん奥のテーブル席には、二人連れの客が向かい合って座っていた。

彼らが、店内に流れる異様な雰囲気の元凶だ。

二人はどちらも外国人。ともに十代前半とおぼしき少年少女だった。

少年は絢爛豪華な白装束をまとっており、その何気ない所作の端々から、隠しきれない威厳と高貴さが滲み出している。彼のあふれ出すカリスマ性が、庶民的なラーメン店の空気を侵蝕し、店内を妙に居心地の悪い空間へと変えていた。

そして少年の前に座っているのは、燃えるような赤毛の小柄な少女だ。

彼女が着ているのは、幼い体型にぴったりとフィットするスクール水着のような衣装。その犯罪臭の漂う外見が、店内の客たちの注目を否応なく集めている。

そんな少女が、突然、勢いよく立ち上がり、券売機の前にいる古城を呼んだ。

「彼氏殿！　彼氏殿ではござらぬか！　女帝殿の彼氏でござろう!?」

「え？　なんだ？」

食券を取り出して顔を上げた古城は、いきなり店中の注目を一身に浴びて動揺した。

店内にいる客たちが、少女と古城を見比べて、ざわつき始める。

そんな尋常ならざる人々の反応に、古城は隣にいる雪菜と顔を見合わせた。なにが起きているのかさっぱりわからない。できれば今すぐにでも逃げ出したい気分だったが、すでに食券を買ってしまった以上、勿体なくて立ち去るという決断も下せない。

呆然と立ち尽くす古城たちの前に、赤毛の少女が行列をかきわけて近づいてくる。

そして彼女は、ずいっ、と胸のゼッケンを古城の前に突きつけた。

「拙者、リディアーヌ・ディディエでござる！　覚えておられぬか？」

「あ……！　おまえ、浅葱の友達の……！」

ようやく相手の正体に気づいて古城が叫ぶ。浅葱が〝戦車乗り〟と呼んでいた、真紅の有脚戦車の操縦者だ。思い出すのに時間がかかってしまったのは、戦車に乗っていない状態の彼女を、これまで見たことがなかったせいだ。

女帝、そして浅葱というキーワードが古城たちの口から出たことで、店内のざわめきが勢いを増していた。〝電子の女帝〟―藍羽浅葱の名前を知らぬ者は、今や絃神島にはほとんどいないのだ。そんな彼女の彼氏だの友達だのと呼び合う連中が現れたら、注目されて当然だった。

じわり、と古城の背中に冷や汗が浮き、再び逃げ出したい衝動に襲われる。

そんな古城の心情を知ってか知らずか、リディアーヌは、パイロットスーツの腹部の隙間をガバッとまくり上げ、

「無念でござる、彼氏殿。拙者の力が足りぬばかりに女帝殿が……かくなる上は、この腹かっ

さばいて責任を――」

「待て待て！　こんなところで腹を出して、いったいなにをする気だ!?」

割り箸を腹に突き立てようとするリディアーヌを、古城が羽交い締めにして制止する。

もはや注目を集めているという生易しいレベルではなく、店中の客たちが古城たちを露骨に睨みつけていた。ほとんど犯罪者を見る目つきである。ラーメン店の店内でスク水姿の少女を羽交い締めにしている高校生がいたら、古城だって同じ目つきをしただろう。

〝麺屋いとがみ〟の店主とおぼしき人物が、古城たちのほうへと近づいてくる。これは間違いなく店を追い出されるな、と古城が覚悟を決めたとき――

威厳のこもった張りのある声が、店内の空気を震わせた。

「騒々しいぞ、貴様ら。ここな店主に不敬であろう？」

その声の響きに打たれたように、店内に静寂が訪れた。ざわついていた客たちが息を呑み、口を開きかけていた店主が動きを止める。声の主は白装束の少年だ。金色に輝く彼の瞳が、古城を正面から見据えている。

「あ、ああ。そうだな、すまん」

騒いでいたのは、おまえの連れじゃねーか、と言ってやりたい気持ちをグッとこらえて、古城は彼に頭を下げた。その短いやりとりで、店内の雰囲気は一変する。

今や白装束の少年は、この場を完全に掌握していた。店長や常連客ですら、彼の支配に逆

らえない空気が生まれていた。生まれながらの王族のような威厳が、無意識に人々を従属させたのだ。呆れるほどのカリスマ性だった。

古城と雪菜はリディアーヌに手を引かれて、少年と同じテーブルに座る羽目になる。

順番待ちの列を無視する形になったわけだが、もちろん文句を言う客はいなかった。触らぬ神に祟り無し――ということで、人々は古城たちの存在を黙殺することにしたらしい。

少年が注文していたラーメンが運ばれてきたのは、その直後のことだった。

手慣れた仕草で割り箸を割り、少年は最初にスープをひと口すする。そしておもむろに麺を口の中にかきこんだ。なかなか堂に入った食べっぷりである。

「なるほどな。この土地ならではの新鮮な魚介、それに豚骨と野菜を使ったスープか。タレは醤油と酒……それに鶏皮と唐辛子か。麺は太めの自家製麺。具材にもこだわりが感じられる。ふむ、アサギが薦めるだけはあるようだな」

「お、おう……って、おまえ、何者だ？　浅葱のグルメ仲間なのか？」

やたら細やかな感想を口にする少年を、古城は薄気味悪げに見つめて訊いた。下手なラーメン評論家も真っ青の分析力である。口振りから察するに浅葱の知り合いらしいが、彼女とこの異邦人の少年との接点は、美食に対する異常な執着以外には思いつかない。二人がグルメ仲間という推理は、いい線いってるのではないかと心の中で自賛する古城だが、

「先輩、言葉に気をつけてください。この方は、もしかしたら――」

それまで沈黙を続けていた雪菜が、古城を咎めるように囁いた。古城は訝しげに目を眇め、

「こいつを知ってるのか、姫柊？」

「いえ」と雪菜は首を振る。「ですが、この方の力……アルデアル公と同等以上の……なのに、どこか異質な……」

「ほう」

少年が箸を動かす手を止めて、面白そうに雪菜を見た。彼の金色の瞳の奥で、一瞬だけ殺意に似た光がよぎる。そこでようやく古城も少年の正体に気づいた。

彼は魔族。吸血鬼だ。それも桁外れに強大な力を持つ〝旧き世代〟の――

「気配は隠しておいたつもりだったが、さすがは獅子王機関の剣巫。いい目をしているな」

「やはり、あなたは……」

「控えろ、剣巫。俺は〝滅びの王朝〟の王子として、第四真祖と話している。監視者ごときの出る幕ではないぞ」

優雅にラーメンを味わいつつ、少年は冷ややかに言い放つ。

彼の無造作な呟きに、古城は表情を凍らせた。魔族の事情に疎い古城でも、当然、〝滅びの王朝〟の名前は知っている。第二真祖〝滅びの瞳〟に統治された、禍々しき中東の夜の帝国。その王子ということは、すなわち第二真祖の息子ということだ。

「イブリスベール……アズィーズ殿下……」

雪菜が少年の名前を口にする。その呟きに畏怖の響きが混じっているのは、古城の気のせいではないだろう。なにしろ第二真祖直系の王子と第四真祖が、小さなテーブルを挟んで向かい合っているのだ。仮に二人の魔力が激突するようなことがあれば、絃神島そのものが消滅してもおかしくない。今やこの店は世界でもっとも危険な場所と化していた。炎に囲まれた火薬庫のほうが、まだしも安全かもしれない。

しかしそんな状況下でも、イブリスベールは平然と食事を続けている。

「店主、おかわりだ。焦がしネギ多めでな。味付け卵も頼む」

じゃらじゃらと小銭を取り出しながら、異国の王子が注文を伝える。店長はぎこちなくうなずいて、すぐさま調理に取りかかった。

そのやりとりを眺めながら、古城は、うーむ、と半眼になって、

「こいつ本当に王子なのか？　いくらなんでも庶民的過ぎないか？」

「は、はい。でも、この威圧感はたしかに王族級だと……」

どこか自信なさげな口調で雪菜が答えてくる。

「ていうか、なんで第二真祖の息子が、浅葱の友達と一緒にラーメン喰ってんだよ？」

「この俺としても不本意だが、その娘が殺されかけている現場に居合わせてしまったのでな。成り行きで保護することにした。まあ、気まぐれだ」

どんぶりに残ったスープを最後まで飲み干しながら、返答したのはイブリスベールだった。

「殺されかけた？」

物騒な王子の発言に、古城が目つきを険しくする。

然様、とリディアーヌが声を震わせる。彼女の瞳からこぼれ落ちたのは、透明な涙だった。

「人工島管理公社でござる。彼奴らが女帝殿をキーストーンゲートに幽閉しておるゆえ、拙者はどうにか連絡を取ろうと防壁内への侵入を試みたのでござるが……」

悔しさを必死にこらえるように、リディアーヌは両手を握り締めている。

そんな彼女の小さな拳を、古城の掌がそっと包んだ。驚いたように顔を上げるリディアーヌ。いつになく真剣な瞳で幼い少女を見つめて、古城は彼女に頼みこむ。

「――その話、詳しく聞かせてくれ」

5

四十分後――

古城たちは、絃神島の中心部にほど近い地下通路の入り口に立っていた。通路を降りた先は、長いトンネルになっている。人工島の地下に流れこんだ雨水を、海に排出するための放水路だ。ただしそれは表向きの話であり、この地下トンネルの真の目的は別にある。

キーストーンゲート内に設置された機密区画――第零層への資材搬入路。それが、この寂

れたトンネルの本来の用途なのだった。

「キーストーンゲート第零層、か。そこに浅葱が閉じこめられてるんだな？」

明かりのない不気味な通路をのぞきつつ、古城がリディアーヌに確認する。

『然り。第零層に辿り着くまでの経路は、拙者から指示を出すでござる』

少女の声は、古城のスマホのスピーカーから流れてきた。リディアーヌ本人は、壊れかけた真紅の有脚戦車に乗っている。前脚の一本と武装のほとんどを失い、戦闘能力を喪失した〝膝丸〟だが、搭載された軍用コンピューターとネットワーク機能は健在だ。そしてリディアーヌ自身、浅葱にも匹敵する天才的なハッカーらしい。そんな彼女が、古城たちの侵入を支援してくれるというのは、それなりに心強い話だった。

「それは助かる……けど、おまえの戦車をここまで派手にぶっ壊すようなやつらが相手か……」

ボロボロになったリディアーヌの戦車を眺めて、古城はなんともいえない表情を浮かべる。いくら小型とはいえ、〝膝丸〟は立派な対魔族用戦車――それも最新鋭の試験機である。

それを破壊するということは、敵の戦力は戦車以上ということだ。キーストーンゲート第零層は、そんな連中に護られているのだ。

「俺たちの手助けをして、おまえは大丈夫なのか？　もしまた特区警備隊に襲われたら――」

古城は中破した有脚戦車を不安そうに見上げた。今の〝膝丸〟に戦う力はない。そして〝膝丸〟がなければ、リディアーヌはただの小学生である。特区警備隊が相手では、逃げるこ

ともままならないはずだ。

そんな危険に晒してまで、彼女に頼ってもいいものかどうか——葛藤する古城を少し呆れたように眺めて、冷たく言い放ったのはイブリスベールだった。

「案ずるな、暁古城。この騒動が収まるまでは、俺がこの娘の面倒を見ておいてやろう」

「え……？」

異国の王子からの思わぬ申し出に、古城がぽかんと目を丸くする。この傍若無人な吸血鬼が、古城に気を遣うようなことを言い出したのが意外だったのだ。

「任せていいのか？」

「ふん。ここで貴様に貸しを作っておくのも悪くはあるまい。俺の臣下も、間もなく紋神島に到着する頃合いだしな。それに人工島管理公社とやらの企てには、俺もいささか興味がある」

「そうか——」

イブリスベールの身勝手な物言いに、古城はむしろ安心する。

「いちおう礼は言っとくけど、あんまり派手な真似はしないでくれよ」

「貴様の言葉とも思えんが、まあいい。いちおう心に留めておこう」

「ああ、頼んだ」

異国の王子に〝戦車乗り〟を任せて、古城は暗い地下通路に向かって歩き出す。そのあとに、ぴったりとくっついてきたのは雪菜だった。

当然のような顔で同行してくる雪菜を、古城は半ばうんざりと見上げて、
「姫柊もここで待ってろよ。体調だって万全じゃないんだろ？」
「わたしの体調に問題はありません」
雪菜が怒ったように古城を睨み、声を低くして言い返してくる。その迫力に、古城は一瞬、気圧されながら、
「いやでも」
「問題ないといったらないんです！　わたしは先輩の監視役なんですから、一緒に行くに決まってるじゃないですか。それとも藍羽先輩に会いに行くのに、わたしが一緒だとなにかまずいことでもあるんですか？」
「なんでそういう話になる⁉」と古城はうめいて、「人が心配してやってんのに――」
「心配？」雪菜がピクリとこめかみを引き攣らせた。「つまりわたしが足手まといだと？」
「あー……いや、だから、そういう意味じゃなくて……」
「わかりました。もういいです」
拗ねたように唇を曲げながら、雪菜が古城から目を逸らす。
わかってくれたか、と古城は胸を撫で下ろし、再び地下通路の中を歩き出した。
だが、その古城のすぐ背後を、ぺたぺたと追いかけてくる足音がある。
「――って、ついて来てるじゃねえか⁉」

「べつに先輩のあとをつけてるわけじゃないですし。先輩が、たまたまわたしの前を歩いてるだけですし」

「小学生かっ⁉」

いつになくムキになっている雪菜を眺めて、古城は諦念の息を吐く。おそらくこれ以上は、言い争っても無駄だろう。古城になにを言われても、雪菜には監視をやめる気はないらしい。

「わかった。もういいよ……姫柊さんも一緒に来てくださいお願いします」

「最初からそう言ってくれればいいんです」

機械的に頭を下げる古城を見て、雪菜が満足そうに顎を逸らした。古城は、自嘲するように弱々しく笑って首を振り、

「へいへい。じゃあ、行きますか」

「はい」

雪菜が背中のギターケースを揺らして、弾むような足取りでついてくる。

延々と続く地下への階段を下りると、その先には長大なトンネルが伸びていた。トンネルの直径は四、五メートルほど。床には物資輸送用の線路が敷設され、壁や天上には、送電線や光ファイバーなどのケーブルが、のたうつ血管のように這い回っている。その光景は排水施設というよりは、巨大な生物の内臓を連想させた。

「なあ、姫柊……さっきのリディアーヌの話、どう思った？」

そう言って古城は、雪菜の前に手を差し出す。放水路という建前のせいか、トンネル内には照明装置がない。霊視能力を持つ雪菜は人間としては夜目が利くが、それでも吸血鬼の古城ほどではないはずだ。いちおうそのことを自覚しているのか、雪菜は文句を言わずに古城の手を握り返してくる。雪菜の頬がかすかに赤らんでいるような気もしたが、さすがの吸血鬼の視力をもってしても、この暗闇の中でそれを確認することはできない。

「絃神島が咎神カインを降臨させるための祭壇、というお話ですか」

雪菜が真面目な口調で答えてくる。

浅葱が、第零層に幽閉された理由として、リディアーヌは咎神カインの存在を口にした。曰く、絃神島とはカイン復活の儀式のために設計された巨大な魔術装置であり、浅葱は、その儀式に不可欠な〝寄坐〟なのだと――

「にわかには信じられませんけど、ただ、いくつか思い当たることが……」

「ああ……浅葱のことを〝カインの巫女〟って呼んでたヤツがいたんだっけか」

「絃神冥駕、ですね。監獄結界からの脱走者の……」

古城の手を握る雪菜の指先に、無意識に強い力がこもる。

南宮那月の能力によって異世界の監獄に幽閉されていた、知的な風貌の魔導犯罪者。古城が第三真祖ジャーダ・ククルカンと戦っている間に、雪菜はその男と遭遇したらしい。どうにか撃退には成功したものの、かなりの苦戦を強いられたと聞いている。

「俺はそいつのことをよく知らないんだが、何者なんだ？」

どこか迷いを抱えたような表情の雪菜に、古城が訊いた。

雪菜は小さく首を振り、

「わかりません。ただ、彼は〝雪霞狼〟によく似た黒い槍を持っていました。その槍は、魔力と霊力を消滅させる獅子王機関の廃棄兵器、だと」

「魔力と霊力を消滅させる黒い槍？　待てよ。まさか、その武器って――」

古城が驚いて足を止める。すべての異能の力を打ち消す武器。それに似た魔具を使う集団を、古城はよく知っていた。自らを〝聖殲派〟と名乗っていた彼らも、咎神カインの復活を願っていたのではなかったか――

『彼氏殿！』

動揺する古城の胸元で、リディアーヌの声がした。スマートフォンの画面に映っているのは、地下トンネルの地図である。その地図のあちこちに、赤い光点が浮かび上がっている。

「リディアーヌ、どうした？　この点滅はなんだ？」

『警戒めされよ。防衛機構の作動を確認したでござる』

「防衛機構だあ……!?　どうなってんだ？　監視カメラや警報装置は、そっちでどうにかしてくれるんじゃなかったのか？」

「おそらく、地下トンネルの内部で完結している、自律制御のシステムでござる。遺憾ながら

拙者には手が出せぬ――」

「そういうことか……！」

古城は無意識に奥歯を鳴らした。リディアーヌのハッキングが期待できないとなると、古城たちに残された選択肢は、強行突破だけである。

地下トンネルに敷設された線路を使って、なにかが滑るように古城たちへと近づいてくる。ゴミバケツをひっくり返したような形の、金属製の円筒だ。

思ったよりもサイズが小さい。直径はせいぜい八十センチ。高さは百二十センチ程度だろう。目玉状のレンズ部分をクルクルと回しているその姿は、どこかユーモラスで愛嬌がある。

しかしそのゴミバケツの胴体部分には、まったく可愛げのない装備が取りつけられていた。対人用のマシンガンである。

そして古城たちの姿を確認するや否や、ゴミバケツの群れは無警告でマシンガンを発砲する。

「先輩！」

雪菜が古城の背中を引いた。どわっ、と仰け反った古城の鼻先を、銃弾が次々にかすめていく。古城と雪菜はもつれ合うようにして柱の陰へと身を隠した。コンクリート製の柱の表面に、弾丸が次々と撃ちこまれて火花を散らす。

「いきなり発砲してきやがったぞ!?　防衛機構っつうより、殺人トラップじゃねーか！」

古城が、握り締めていたスマートフォンに向かって喚き散らした。リディアーヌに責任がな

いのはわかっているが、そうでもしなければ精神の安定が保てない。

『MAR製の警備ポッドでござるな。武装は対魔族用の小口径機関砲と催涙ガス弾。本来は、軍用品でござる。彼氏殿、どうかご武運を』

「ご武運を、じゃねえ！」

リディアーヌの無責任な物言いに、古城はたまらず怒鳴り返す。

もちろん古城が第四真祖の眷獣を召喚すれば、警備ポッドなど物の数ではない。あの程度の兵器が何百台押し寄せてこようが、一瞬で蹴散らすことができるだろう。

だが、こんな狭い場所に眷獣を喚び出したら、確実にこの地下トンネルを破壊してしまう。下手すれば、古城たちも巻きこまれて生き埋め――それどころか、最悪、キーストーンゲートそのものを消滅させる危険すらあった。強力すぎる第四真祖の眷獣は、実際には役に立たない場面のほうが多いのだ。

「おい……いちおう確認しておくが、こいつの中には人間は乗ってないんだよな？」

『それは確実でござるが……彼氏殿？』

本能的になにかを察したのか、リディアーヌが不安げな声を出す。雪菜が、ハッと闇の中で古城を睨みつけ、

「先輩、待ってください。いったいなにを――」

「悪い、姫柊。こいつを持っててくれ」

古城は通信中のスマートフォンを雪菜の前に放った。そして、銃撃を続ける警備ポッドを柱の隙間から睨みつける。そんな古城の全身から洩れ出したのは、異様な密度の魔力だった。それは霧のように古城の全身を押し包み、やがて青白い雷光へと変わる。

「先輩……!?」

雪菜の瞳が驚愕に見開かれた。

古城は眷獣を召喚することなく、眷獣の魔力だけを引き出している。自らの意思で第四真祖の力を制御しているのだ。眷獣に対する古城の支配権が、強化されたからこそ可能な芸当だ。

だがそれは、古城の肉体が、少しずつ完全な吸血鬼に近づいているという証でもある。

「どらあぁぁぁぁ――っ！」

古城は咆吼とともに魔力を解放した。純白の閃光が、地下トンネルを、真昼のように眩く照らし出す。無差別に撒き散らされた稲妻は衝撃波と化して、警備ポッドの群れを薙ぎ払った。

すべては一瞬の出来事だった。

十数台の軍用警備ポッドは跡形もなく吹き飛んで、あとには再び闇と静寂だけが残される。

雪菜は、言葉もなくそれを見つめていた。

「ぶっつけだけど、なんとか上手くいったな……」

衝撃で砕けたコンクリートの上に膝を突き、古城が荒い息を吐く。でたらめな魔力の使い方をしたせいか、全身の骨と筋肉が苦痛を訴えていた。小さく咳きこむだけで、身体中に電流の

ような痛みが走る。あまりのつらさに声も出せない。
そして身動きできない古城を見下ろし、肩を震わせているのは雪菜だった。
彼女の瞳に浮かんでいるのは、まぎれもなく怒りの色である。
「どうして、あなたはいつもいつも……そういう無茶なことばかり……」
「ま、待て、姫柊……落ち着け！　今殴られたら俺は泣くぞ！　本当に泣くからな！」
「……はあ」
涙目になっている古城を眺めて、雪菜は脱力したように溜息をついた。無言でその場に屈みこみ、弱った子犬をあやすように古城の背中を優しく撫でてくる。
しかし安心したのも束の間のこと、うなだれる古城の耳元に、追い打ちをかけるように聞こえてきたのはリディアーヌの声だ。
『彼氏殿……大変言いにくいのでござるが、修繕費は大丈夫でござるか？　あの警備ポッドは、安く見積もっても一台二千万円はくだらないのではないかと』
「ちょっと待て、壊した俺が悪いのか!?　今のは正当防衛だろ!?」
思わず全身の痛みを忘れて、古城が怒鳴った。問答無用で射殺されそうになった挙げ句に、修理代まで負担させられたのではたまらない。
『然れど、こちらは無断侵入でござるゆえ』
思いがけず冷静なリディアーヌの指摘に、古城は、ぐ、と言葉に詰まる。

「くっそ……なにがなんでも浅葱が監禁されてる証拠をつかまないと、こっちが犯罪者か！」

『急いだほうがいいでござろう。今ので侵入に気づかれた可能性があり申す』

「わかってるよ！」

古城は雪菜に肩を借りて、よろめきながらも立ち上がる。やけに心地好い雪菜の髪の匂いが、古城の鼻腔をくすぐるが、それを気にしていられる状況でもなかった。スマートフォンの地図表示によれば、目的地の第零層はすぐ近くだ。今の古城の体力でも、問題なく辿り着ける距離である。

幸いにも警備ポッド以外の侵入者対策は、すべてリディアーヌが解除してくれていたらしい。古城たちは五分も経たないうちに、地下トンネルの終点へと到着する。

「これが第零層……なのか？」

目の前に現れた景色を見回して、古城は困惑に足を止めた。

そこにあったのは、ただのだだっ広い空間だ。

地下トンネルの終点にはなにもなかった。正確には、空洞だけがあったというべきか。

直径はおよそ十メートル。深さ十五メートルほどの円筒形の空間――

それが第零層と呼ばれていた場所の正体だった。

目の前にそびえ立つ垂直の壁は、頑丈な金属で造られている。外壁に扉や継ぎ目はなく、よじのぼるための足場すらない。塵ひとつない殺風景な空間だ。

せいぜい貯水槽として使う以外に、なんの役にも立ちそうにない場所である。
その巨大な穴ぼこの底に、古城たちは辿り着いたのだ。
ただ、そこが古城たちの目的の場所であることだけは、疑いようのない事実だった。
なぜなら、そこには先客がいたからだ。黒い道士服を着た青年が、巨大な空洞の中心で、古城たちの到着を待っている。
青年が握っているのは漆黒の槍。両先端に穂先を持つ、いびつな形の長槍だ。
「やはり来ましたか、第四真祖」
ゆっくりと古城に視線を向けて、青年は穏やかに語りかけてくる。
その青年の名を古城は知っていた。一度だけ、監獄結界が破られた波朧院フェスタの日に、彼の姿を見ているのだ。監獄結界から脱走した七人の魔導犯罪者の最後の一人。
そして獅子王機関の〝廃棄兵器〟を持つ男――
「紘神……冥駕！」
青年の名を呼ぶ古城の声が、巨大な空洞の中で幾度も反響する。
紘神冥駕は不機嫌そうに顔をしかめて、その響きを聞いていた。

6

「再びお目にかかれて光栄ですよ、第四真祖。本当はもっと早く会えることを期待していたのですが……まあいいでしょう。おかげで私の傷も癒えた」
古城との間合いを詰めながら、冥駕が慇懃な口調で言う。
ちっ、と古城は舌打ちしながら、雪菜と離れて、重心を低くした。焼けつくような痛みはまだ残っていたが、今はそれを気にしている場合ではない。
「おまえが待ち構えてたってことは、やっぱここに浅葱がいるんだな？」
古城が探るように問いかける。しかし冥駕はうっすらと微笑んで、
「〝カインの巫女〟はここにはいない、と私が言えば、信じてもらえますか？」
「んなわけあるか！　脱獄囚の言うことを、ホイホイ信用できるわけねーだろ！」
古城は即座に怒鳴り返した。魔導犯罪者の冥駕が現れた時点で、ここがまともな場所ではないと証明されたも同然なのだ。浅葱の居場所を確かめずに帰れるはずもない。
冥駕は、ふむ、と心外そうに呟いて、
「たしかに私は犯罪者ですが、どちらかといえばあなたも私に近い側なのでは？」
「うっせーよ！」

破壊したばかりの警備ポッドのことを思い出し、古城は思わず歯を剝いた。
「浅葱はどこだ、絃神冥駕？　力ずくでも答えてもらうぞ！」
殺気のこもった眼差しで、古城が冥駕を睨みつける。冥駕は、ふ、と失笑したようだった。
「第四真祖、あなたは少し勘違いをしている」
「勘違い……？」
古城が眉間にしわを刻んだ。冥駕はにこやかに微笑んで古城を見つめる。
「私は、あなたに対していかなる興味も抱いていない。脅威に感じていない、ということです。今すぐにここから立ち去るなら、特別に見逃して差し上げましょう」
「そいつはご親切にどうも」
古城が皮肉混じりに溜息をついた。安い挑発に乗る気はないが、彼が浅葱を利用する側の人間ならば、どのみちいずれは戦わなければならない相手だ。
「その言葉、そっくり返してやるよ。今すぐ浅葱を解放すれば、おまえがここにいたことを、那月ちゃんには黙っておいてやる」
南宮那月の名前を聞いた一瞬だけ、冥駕の口元から笑みが消えた。彼が構えた漆黒の槍が、瘴気に似た異様な気配を放つ。
「残念です。あなたには少しだけ親近感を抱いていたのですが……同情しますよ、かつての私と同じ、獅子王機関に騙された哀れな少年よ――」

「先輩、ここはわたしが――！」
雪菜が銀色の槍を引き抜いて叫ぶ。
だが、その前に古城は跳んでいた。吸血鬼の筋力を限界まで引き出した強引な跳躍だ。古城の疲労を知る雪菜はもちろん、身構えていたはずの冥駕すら、その速度には反応できなかった。
「行くぜ、脱獄囚！」
古城が拳を突き出した。真っ直ぐに相手に近づいて殴る。思いつく限りのもっともシンプルな攻撃だ。古城は生粋の吸血鬼ではない。吸血鬼の能力に対するプライドはない。冥駕の槍が、魔力を無効化するというのなら、魔力を使わずに殴ればいいと考えたのだ。
結果的に、その判断が冥駕の意表を衝いた。古城の渾身の一撃を顎先に喰らい、冥駕はもんどり打って吹っ飛んでいく。
「え!?」
壁際まで吹き飛ばされて倒れた冥駕を、雪菜は呆然と突っ立ったまま見つめた。
古城は拳を振り下ろしたままの姿勢で、その場に片膝を突き、全身の痛みに顔をしかめる。
冥駕はうつ伏せに倒れたまま動かない。強靭な肉体を持つ魔族ならまだしも、普通の人間が耐えられるような衝撃ではなかった。少なくとも冥駕の下顎は、完全に粉砕されたはずである。
「痛てて……やべえな、ちょっとやりすぎた……か？」
まさか死んでないだろうな、と古城が不安な表情で冥駕を見る。

倒れたままの冥駕の喉が、くくっ、と鳴ったのは、その直後だ。漆黒の槍の先端を、金属製の床板に突き立て、冥駕がゆらりと立ち上がる。

「なるほど。この零式突撃降魔双槍が魔力を無効化することを知って、殴りに来るとは……さすがに少し驚きました。あなたを少し侮っていたようです、暁古城」

砕けたはずの顎を動かして、冥駕は平然と笑いかけてくる。傷ついていないわけではないのだろう。なのに、彼が痛みを感じている様子はない。

「ですが、惜しかったですね。不死身は、あなた方、吸血鬼だけの特権ではない」

冥駕の裂けた唇から流れ落ちたのは、腐敗した血液のようなドス黒い液体だ。彼はそれを拭いもせずに、古城のほうへと歩き出す。

その凄絶な光景に、古城は思わず気圧された。

「なんだ、こいつ……!?」

「動死体!? いえ、まさか……僵屍……！」

かすれた声で雪菜が呟く。奇妙に禍々しいその響きに、古城は理由もなく嫌悪感を覚えた。

「僵屍？」

「人間の死体を使って生み出された魔族……人工の吸血鬼です」

「正確には吸血鬼のなり損ない、ですよ」

くくっ、と冥駕は自嘲するように笑って、雪菜の説明を訂正した。

「生きることも死ぬこともできない、不完全な傍観者。だがそれゆえに私には、この廃棄兵器を従えることができる――！」

冥駕が自分の足元を目がけて、漆黒の槍を振り下ろす。

次の瞬間、無防備に立ち尽くす古城の肉体を、無数の刃が貫いていた。

古城自身の影の中から飛び出したのは、厚みを持たない闇色の刃。世界そのものを侵蝕する闇の薄膜だ。

「くそ……この感覚！　異境の侵蝕かっ！」

魔力を無効化する闇色の刃が、古城の吸血鬼の力を奪っていく。その効果は、〝聖殲派〟の騎士たちが使っていた〝聖殲〟の遺産と同じものだった。冥駕の零式突撃降魔双槍は、異境の侵蝕を操る武器なのだ。

「〝雪霞狼〟――！」

銀色の槍を旋回させて、雪菜が冥駕を強襲した。ありとあらゆる結界を斬り裂く七式突撃降魔機槍は、異境の侵蝕にも対抗できる唯一の武器である。実際、神縄湖畔での戦いでは、雪菜はその力で古城を何度も救っていた。が、

「無駄ですよ。我が零式突撃降魔双槍は、魔力も霊力も等しく無効化する。お忘れですか？」

冥駕が悠然と笑って槍を振るう。二人の槍使いが正面から激突し、吹き飛ばされたのは雪菜のほうだった。常人ではあり得ない凄まじい速度で、冥駕が続けざまに斬撃を放つ。大きく体

勢を崩した雪菜へと漆黒の閃光が降りそそぐ。

「そして霊力を封じられてしまえば、ただの人間に過ぎないあなたが、死を知らぬ私に敵う道理もない！」

「う……ぐっ……！」

冥駕の斬撃を受け止めるたびに、雪菜の姿勢が大きく揺らぐ。零式突撃降魔双槍による霊力無効化の影響だ。今の雪菜は霊視による未来予測も、呪術による筋力の増幅も使えない。見た目どおりの非力な少女なのである。

それでも雪菜の反撃は、確実に冥駕に届いていた。冥駕の手脚には裂傷が刻まれ、左の肋骨は何本か折れている。常人ならとっくに戦闘不能になっているはずだ。

だが、僵尸鬼である冥駕の動きに変化はない。そして雪菜は完全に体力の限界を迎えていた。冥駕の斬撃を受け止めきれずに、雪菜が背中から倒れこむ。息を詰まらせて動きを止めた彼女を、冥駕は無感動な瞳で見下ろした。

「かつて冬佳が救ったあなたを、私が殺す――これも私に相応しい運命の皮肉か」

ぼそり、と冥駕が誰にともなく静かに呟く。雪菜はその言葉に息を呑み、

「冬佳……様？　あの人の名前を、あなたが、どうして……!?」

「さようなら、神狼の巫女――」

冥駕が漆黒の槍を無造作に構えた。その切っ先が、雪菜の胸元に吸いこまれる――刹那、

「姫柊、逃げろ！」

「――先輩!?」

古城の背後からのタックルが、冥駕の痩身を吹き飛ばしていた。攻撃を中断させられた冥駕が、傷ついた古城を鬱陶しげに睨む。

全身を貫く闇色の刃を、無理やり引き抜いてきたのだろう。古城の全身はズタズタだ。買い換えた直後のパーカーは深紅に染まり、左腕は力無くだらりと垂れている。

それでも雪菜を庇うように、古城は冥駕の前に立ちはだかっていた。

そんな古城を冷ややかに見据えて、冥駕がゆるりと槍を構えた。獅子王機関の攻魔師だけが知るはずの構え――

「駄目です、先輩！　逃げて――」

雪菜が声を振り絞る前に、冥駕が音もなく槍を振る。現実感の乏しい、ぬるりとした動き。

古城も、そして雪菜ですら、反応することができなかった。

「〝冥餓狼〟――」

一瞬遅れて、冥駕の声が聞こえる。漆黒の槍は古城の心臓を刺し貫き、彼の背中まで深々と突き立っている。激しく飛び散った古城の鮮血が、雪菜の頬を赤く濡らした。

雪菜の喉が、引き攣るように震える。

「先……輩……」

古城の身体が、金属の床の上に転がる。雪菜の口から絶叫がこぼれ出す。立ち上がろうとした雪菜の手が、床に転がっていた銀色の槍に触れた。闇に包まれていた空間を、眩い純白の閃光が染めた。

「う……あ……あああああああああああああああぁぁ――っ！」

雪菜の背中からあふれ出した輝きが、巨大な紋様を空中に描き出す。その紋様を目にした冥駕が、初めて表情を強張らせた。

黒槍が撒き散らす異境の侵蝕が、薄いガラス板のように粉々に砕けて消滅していく。雪菜の圧倒的な霊力を、零式突撃降魔双槍が無効化しきれないのだ。

「馬鹿な……まさか、この力……!?」

冥駕の唇が驚愕に歪んでいた。不死身のはずの彼の肉体が、白煙を噴き上げて焼け焦げていく。視界を埋め尽くす閃光に目を細めながら、冥駕は槍を雪菜に向けた。

「やってくれたな、獅子王機関！　これがおまえらの本当の目的か……！」

傷ついた身体を引きずるようにして、黒衣の青年が雪菜に近づいていく。

雪菜はすでに意識をなくしている。限界を超えた霊力の放出に、肉体が耐えきれなかったのだ。霊力の光は彼女を包みこんでいるが、今なら冥駕にも彼女を殺せる――否、殺さなければならないのだ。

だが、黒槍を構える冥駕の耳に届いたのは、絶命したはずの少年の声だった。

「〝焔光の夜伯〟の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ……」

「なに!?」

冥駕の瞳が憎悪に揺れた。

心臓を貫かれて死んだはずの古城が、右手を掲げて獰猛に笑っていた。

雪菜が放った純白の閃光が原因だ。あの輝きが異境の侵蝕を破壊し、失われていた古城の不死性と力を復活させたのだ。世界最強の吸血鬼の力――すなわち第四真祖の能力を。

「疾く在れ、五番目の眷獣〝獅子の黄金〟――!」

古城が召喚した雷光の獅子が、第零層と呼ばれていた空間を、凄まじい閃光と衝撃波で薙ぎ払う。人工島の大地すら揺るがす圧倒的な魔力。その黄金の輝きが古城の視界を、そして第零層の空洞を呑みこんでいく――

天使ノ槍ノ
Spear And The Angel

1

魔族は闇の住人だ。彼らの多くは夜を好み、彼らが暮らすこの人工の都市もまた、深夜まで華やかな喧噪に包まれている。絃神島――人工島西地区の路上には、午前零時を過ぎても、行き交う大勢の人々の姿があった。

そんな中、一人の女が足を止める。酔いで頬を赤く染めた有翼種の女性だ。彼女が見上げたビルの壁面には、整った顔立ちの少女の姿が映し出されている。

「あ、浅葱ちゃんだ」

周囲にいたほかの通行人も、一斉にビルのスクリーンに視線を向けた。映像の中の少女に見惚れたように、誰かが、おお、と溜息を洩らす。

「誰だっけ。女優？」

「違う違う。ローカルアイドルだってば。絃神島在住の一般人」

「あたし、あの子、見たことあるよ。テティスモールでワッフル買ってた」

「可愛かった？」

「ちょー可愛かったー」

たわいない会話を続けながら、彼らは少女の映像を見つめている。同じようにスクリーンを

眺める人々の姿は、街の至るところで確認できた。
そんな彼らの表情が、突然、困惑したように一斉に曇る。スクリーンの中の少女の映像が、不意に激しく乱れたからだ。いつしか、彼女の歌も途切れていた。ノイズに包まれたモノクロの画面の中で、少女の唇が震えるように言葉を紡ぐ。

『……ス……テ……』

スピーカーから流れ出したのは、機械で合成されたような単調な声音。その声は島内に存在する無数の電子機器を経由して、絃神島全土に静かに伝播していく。
プロモーションビデオの演出にしても、ひどく不自然な映像だ。
人々は戸惑いの表情を浮かべて、ただ呆然と少女の言葉を聞いていた。

『タスケテ……コジョウ……』

そしてスクリーンが唐突に暗くなる。焦った何者かの手によって、通信が切断されたのだ。
あとには夜の暗闇と、人々のざわめきだけが残される。

2

ぼやけた視界に最初に映ったのは、心配そうに自分を見下ろしている瞳だった。清浄な氷河を連想させる、深く澄んだ碧い目だ。

病室によく似た殺風景な白い部屋。人工的な白い光の下で、美しい銀髪が揺れている。

「お兄さん、お目覚めでしたか？」

横たわる古城の耳元で、聞こえてきたのは柔らかな声だった。見覚えのある少女の姿に気づいて、古城はハッと上体を起こす。

「……叶瀬？」

「大丈夫でしたか？　痛いところはありませんか？」

なぜか白衣を着た叶瀬夏音が、古城を見つめたまま訊いてきた。夢の続きを見ているのかと、見まがうばかりの光景だ。

古城が寝ていたベッドは、病院の診察室に置かれているような小さなものだった。どことなく解剖台を連想させるベッドである。部屋の壁に窓はなく、周囲には見慣れない医療器具がいくつも置かれている。

古城は、自分の全身に巻かれた包帯に気づいて、

「ああ、なんとかな。もしかして、俺の手当てをしてくれたのも叶瀬なのか？」
「だ、大丈夫でした」
夏音が頬を赤らめながら、めずらしく早口でそう言った。不自然に逸らされた彼女の視線を、古城は無意識に目で追って、
「え？　なにが？」
「猫のお世話で慣れてましたから。去勢手術に連れて行ったこともありました」
「お、おう……」
自分が服を着ていなかったことに、古城はそこでようやく気づく。古城が身に着けていたのは、全身に巻きつけられた包帯と薄っぺらい毛布だけ。あとは全裸。素っ裸だ。
古城がもともと着ていた服は、冥駕に負わされた傷のせいで血まみれだったし、治療の際に脱がされてしまうのは仕方のないことだった。いかに吸血鬼の真祖の肉体とはいえ、心臓を完全に潰されてしまえば、回復にはそれなりの時間が必要なのだ。猫と比較されるのは不本意だったが、そんな姿を夏音に見せてしまったことに、むしろ申し訳ない気分になる。
「ここは？　叶瀬がいるってことは那月ちゃん家か？　那月ちゃんが、俺たちを第零層から連れ出してくれたのか？」
話題を変えるために、古城が訊いた。夏音は静かに首を振り、
「いえ、お兄さんと雪菜ちゃんは、お二人で海辺に倒れていたそうです。人工島北地区の連絡

橋のたもとあたりでした」

「俺たちが使ったトンネルのちょうど反対側じゃねーか……」

怪訝な表情で、古城が呟く。

人工島北地区ということは、最低でもキーストーンゲート第零層から二キロメートルは離れていることになる。

もちろん傷ついた古城と雪菜に、移動する体力は残されていなかった。方角的にリディアーヌたちが助けてくれたとも思えない。意識をなくした古城たちを、第零層から連れ出した誰かがいるのだ。そして、その誰かは、古城たちを捕らえることもなく、そのまま放置して立ち去った——ということになる。

「倒れていたお二人のことは、お姉さんが見つけてくれました」

「お姉さん？」説明を続ける夏音を見上げて、古城は眉間のしわを深くした。「誰だ？」

「知らない人でした。でも、そう呼ぶようにと言われました。綺麗な方でした」

「……なんだ、そいつ？」

怪しいヤツだな、と古城は呆れる。しかもかなり厚かましい。初対面の女子中学生に、お姉さん呼ばわりを強要する図々しい人物となると、古城の知り合いにもそう多くない。

いったい誰だ、と古城が考えこんだその直後——

夏音の背後のドアが、前触れもなく乱暴に蹴破られる。

「暁古城おおおお……っ！」

銀色の長剣を振りかざしながら、奇声とともに飛びこんできたのは、すらりとした長身の少女だった。淡い栗色のポニーテールが、怒りで天を衝くように荒ぶっている。

「な、なんだ……!?　煌坂!?」

猛り狂っている紗矢華の姿を、古城はギョッとして見返した。夏音はあまりの驚きで、声も出せずに硬直している。

白衣姿の夏音には目もくれずに、紗矢華は、ベッドの上の古城だけを睨みつけ、

「ここにいたのね、暁古城！　あなた、私の大切な雪菜になんてことしてくれたのよ――！」

「え……!?」

なんのことだ、と古城が訊き返す前に、銀色の閃光が大気を切り裂いた。ベッドに横たわる古城を目がけて、紗矢華が長剣を突き放ち、

「殺す！」

「どわっ!?」

ギリギリで攻撃を回避した古城が、壁際に張りついて悲鳴を上げた。紗矢華が握った長剣の刃は、直前まで古城が寝ていた場所に深々と突き刺さっている。

紗矢華はベッドを両断しながら、長剣を再び構え直して、

「逃げるな、この馬鹿！　最低男！」

「待て、落ち着け！　俺がいったいなにをした――あ!?」
「はうっ……!?」
飛びずさる古城の身体から、はらりと毛布が落下した。古城の裸身が紗矢華たちの眼前に、余すところなくさらけ出され、それを間近で目撃した夏音が、凍りついたように固まった。
紗矢華も剣を振りかざしたまま、目を見開いて動きを止めていたが、
「な……!?　な、なんてものを見せるのよ、変態真祖っ！」
「おまえがいきなり斬りかかってきたせいだろうがっ！」
「うるさい、黙れ！　灰になれっ！」
顔面を紅潮させながら、紗矢華が剣を振り回す。もはや構えも型もあったものではなかった。無差別に振り回される長剣から、夏音を庇いつつ古城は後退する。
やがてゼエゼエと息を切らせた紗矢華は、その場にふらふらと座りこみ、
「あ、あなたがそういう男だから、雪菜が……雪菜の人生がめちゃめちゃに……！」
剣の柄を握り締めたまま、子どものように声を上げて泣き出した。
紗矢華の頬をボロボロと涙の粒が流れ落ち、古城はそれを呆然と眺める。錯乱したとしか思えない彼女の奇行に、古城は半ばドン引き状態であった。
「き、煌坂……？」
顔をクシャクシャにして泣き続ける紗矢華に、古城が怖ず怖ずと呼びかける。

「姫柊になにかあったのか？　あいつ、どこにいるんだ？」
「雪菜ちゃんは、隣の部屋でした。でも、お兄さん、その前にお洋服を――」
泣き続ける紗矢華に代わって答えてきたのは、ようやく動揺から立ち直った夏音だった。その言葉で古城は、自分がいまだに素っ裸だったことを思い出す。
「あ、ああ。そうだな。悪い」
引っ張り上げた毛布で身体を隠しながら、古城は差し出された服を受け取った。用意された下着はコンビニで売られているボクサーパンツ。ズボンとシャツも、ビニールに包まれたままの新品だ。
「うちの学校の制服？　叶瀬が用意してくれたのか？」
「すみません。お兄さんの服はボロボロでしたから」
勝手に用意してごめんなさいでした、と夏音が、悪くもないのに頭を下げてくる。とんでもない、と古城は慌てて首を振り、
「いや、助かった。絃神冥駕の野郎にこっぴどくやられたからな……」
「絃神冥駕……監獄結界からの脱獄囚ね……」
目元に涙を溜めたままの紗矢華が、地の底から響いてくるような低い声で呟いた。焦点のうつろな眼差しで、古城を恨みがましく睨めつけてくる。
「そう……あいつが、雪菜を傷つけたのね……で、あいつの首は獲ったのよね、暁古城？」

「首なんか獲らねえよ。戦国時代かよ……」

古城が顔をしかめて言った。

そう。キーストーンゲート第零層で、あれだけの犠牲を払いながら、古城は冥駕を倒すことができなかった。朦朧とした意識の中で放った古城の眷獣は、冥駕を焼き尽くす直前に何者かに止められたのだ。

古城の眷獣にも匹敵する、巨大な魔力の塊だった。それが雷光の獅子の動きを封じた一瞬の隙に、冥駕の姿は消えていた。第四真祖の眷獣と同等の魔力を操る存在――その存在が古城の攻撃を妨害し、冥駕の命を救ったのだ。古城と雪菜を第零層から連れ出し、海辺に放置したのもそいつの仕業なのだろう。

「それよりも、姫柊は無事なのか？」

大きく首を振りながら、着替えを終えた古城が夏音に向き直る。妨害者の正体も気になるが、今、考えるべきことはそれではない。

「雪菜ちゃんは無事でした。ただ――」

夏音が古城を見つめたまま、言いかけた言葉を呑みこんだ。

蹴破られた扉の残骸を無造作に乗り越えて、誰かが部屋に入ってきたのはその直後だ。

萌葱色の髪の、美しい長命種だった。白いマントの下に彼女が着ていたのは、ノースリーブにアレンジされた巫女装束風の白い衣装である。その肩に乗っているのは、金色の瞳の美し

い黒猫だ。

驚く古城を見返して、彼女は悪戯っぽく目を細める。

「ふふん。気がついたようだね、暁古城。身体の調子はどうだい？」

「あんた……ニャンコ先生!?　そうか、あんたが俺たちを見つけてくれたのか……」

夏音から聞いていた自称〝お姉さん〟の正体に気づいて、古城は小さく溜息を洩らした。

獅子王機関の縁堂縁――雪菜を追跡していた彼女が、倒れていた古城たちを最初に見つけたのは、考えてみれば当然のことだった。自らを〝お姉さん〟と称する厚かましさにも納得だ。

「おおよその事情は、雪菜に聞いてるよ。不肖の弟子たちがずいぶん迷惑をかけてしまったね」

破壊されたベッドや、泣き崩れている紗矢華を呆れ顔で眺め、縁が頭を下げてくる。

思いがけず殊勝な彼女の振る舞いに、古城は肩透かしを喰らったような気分で唇を歪め、

「あ、いや……迷惑ってわけじゃないんだが……ていうか、なんなんだ、この状況？　ここはいったいどこなんだ？」

「私の研究室だよ、第四真祖」

そう言って縁の背後から現れたのは、陰気な顔立ちの中年男性だった。いちおう顔見知りと言えなくもないが、縁以上に意外な相手だ。

「あんた、叶瀬の親父さん……？」

古城が間の抜けた表情で言う。ふと見れば、夏音は頬を赤らめて、少し困ったように目を伏

せていた。この陰気な男、叶瀬賢生は、元アルディギア王国宮廷魔導技師であり、そして夏音の養父なのである。

「ちょっとしたコネを使ってね。この男に雪菜の検査を依頼したのさ。おかげでアルディギアのお姫様には作りたくもない借りを作ってしまったよ」

混乱する古城を見かねたように、縁がぞんざいに説明してくる。

「姫柊の検査？」

古城は目つきを険しくして縁を見返した。縁が誰に借りを作ろうと、古城の知ったことではないが、彼女がそこまでして叶瀬賢生にこだわった理由は気になった。

そうさ、と縁は意味ありげにうなずき、

「今のところ、世界中でもっとも模造天使に詳しい人間だからね、この男は」

「模造天使……だと？」

縁が口にした意外な単語に、古城はますます戸惑った。

模造天使とは、魔導先進国であるアルディギア王国が伝承してきた儀式魔術だ。人間を霊的に進化させ、人工的に天使を造り出すという禁断の秘呪である。叶瀬賢生は、かつて娘である夏音にその儀式を施し、彼女を人工の天使へと変貌させたことがあるのだった。

「待てよ……検査……って、模造天使と姫柊になんの関係が……!?」

「心当たりがあるようだね、第四真祖」

唇を震わせる古城を眺めて、縁が冷ややかに指摘する。

古城は無言で目を逸らし、汗に濡れた掌を握り締めた。紘神冥駕との戦いの最中、雪菜が放った純白の閃光を思い出す。空中に刻まれた奇怪な紋様と、人間の限界を超えた膨大な霊力――それはかつて模造天使と化した夏音が、操っていた力によく似ていた。神気と呼ばれる破魔の光に。

「姫柊が……紘神冥駕の異境の侵蝕を破ったのは……あれは模造天使の力だったのか？」

「異境の侵蝕……か。あの男、零式突撃降魔双槍をそこまで使いこなしていたのかい」

ふん、と縁が感心したように息を吐く。そんな縁を、古城は咎めるように睨みつけ、

「あいつは、自分の槍を獅子王機関の廃棄兵器だって言ってたぞ」

「そう。零式突撃降魔双槍は獅子王機関が開発した武神具だよ。七式突撃降魔機槍とは兄弟みたいなものさ。ただし黒いほうは失敗作だがね」

「なんでそんなものを紘神冥駕が持ってるんだよ？」

他人事のように告げてくる縁に、古城が不満もあらわに訊き返す。零式突撃降魔双槍の威力を見せつけられた身としては、あれが失敗作と言われても納得できない。

しかし縁は、古城を試すように不敵に微笑み、

「その答えは、おまえさんにも薄々わかってるんじゃないか？」

「……紘神冥駕は、獅子王機関の関係者だったんだな」

古城が吐き捨てるように言い切った。縁が静かに首肯する。
「正解だよ。奴さんは獅子王機関に雇われた攻魔師くずれの研究者――新型武神具の開発者だった。ただし、それはやつが普通の人間だったころの話さ」
「あいつが僵尸鬼になる前ってことか」
壊れたベッドに身体を預けて、古城はむっつりと腕を組んだ。
紘神冥駕という男には、繊細で知的な印象があった。彼の正体が研究者というのは、古城としても納得できる話だ。冥駕の武術の腕前も、雪菜のような本職の攻魔師に比べれば、護身術の域を出ていない。彼の真の恐ろしさは、僵尸鬼の肉体が持つ不死身性と、零式突撃降魔双槍の能力によるものだった。
「あたしも詳しい事情までは知らない。ただ、零式突撃降魔双槍の実験中の事故で、あの男は一度死んだのさ。それから何年か経って、再び獅子王機関に戻って来たとき、やつはあの身体になっていた。誰の仕業か、まあ、薄々見当はつくけどね」
縁が苛立たしげに鼻を鳴らす。
「誰だ？」と古城は思わず訊き返し、
「紘神千羅――冥駕の祖父さんさ」
縁の口から出てきた名前に、古城は小さく息を呑んだ。
紘神千羅――この島の住人ならば、誰もが当然のように知っている名前だ。世界的に有名な

魔導建築の権威。そして絃神島の設計者でもある。たしかに彼ならば、孫である冥駕の遺体を回収し、僵屍鬼として復活させることもできるだろう。

「戻ってきた冥駕の扱いについては、ずいぶん揉めたと聞いてるよ。だが、結果的に獅子王機関は、絃神冥駕の復帰を認めた。僵屍鬼になったからといって、生前の記憶をなくしたわけじゃなかったし、武神具開発における奴さんの才能はずば抜けていたからね」

「死んだはずの人間を研究者として雇ったのか？」

「魔族を雇わないというのなら、あたしも獅子王機関にはいられないね」

咎めるような古城の言葉を、長命種である縁が平然と笑い飛ばす。

優れた能力の持ち主であれば、縁のような魔族や、雪菜たちのような未成年をも利用する。それが獅子王機関のやり方なのだろう。政府の特務機関といえども、そこまでしなければ大規模魔導災害には対抗できない、ということだ。

「もちろん人間だったころと同じ条件で雇ったわけじゃない。冥駕には定期的な検診とカウンセリングが義務づけられたし、監視役もつけた」

「監視役……？」

古城は、無意識に動揺して訊き返す。かつての冥駕の境遇が、今の自分の状況と重なるように思えたのだ。

縁が、吐息のような短い沈黙を挟んで答えてくる。

「獅子王機関の剣巫、藤阪冬佳――かつて〝雪霞狼〟の銘で呼ばれていた古い武神具の使い手さ」

「初代の……〝雪霞狼〟ということか……？」

古城が唖然として呟いた。床にぺたりと座りこんだままの紗矢華も、涙に濡れた目を驚いたように見開いている。雪菜の七式突撃降魔機槍以前にも、〝雪霞狼〟と呼ばれていた武器がある――それは紗矢華も初めて知る情報なのだろう。

「冬佳さん、か……その人は、どうなったんだ？」

「彼女はもういない。剣巫として緊急の任務に駆り出されて、それきり戻らなかったのさ。絃神冥駕が魔導犯罪者に堕ちたのは、その直後だよ。南宮那月に捕まって、監獄結界にぶち込まれるまでに、奴さんは獅子王機関の攻魔師を十三人も殺してるんだ」

「冬佳さんって人が死んだから、か」

古城が重苦しい息を吐く。縁は投げやりに首を振り、

「そんな単純な話ではないんだが、表向きはそういうことになっている。藤阪冬佳は、たった一人で呪術師の集団と戦って死んだ、とね」

「表向き――ってことは、裏があるわけか」

怪訝顔の古城を見返して、縁が薄く微笑んだ。

「そう。真実は少しだけ違う。冬佳が殉職したからといって、冥駕が獅子王機関を憎む理由は

ないだろ？」

「ああ……」

そうだな、と古城は同意した。

藤阪冬佳が魔導犯罪者に殺されたのなら、冥駕の怒りの矛先は、犯人に向けられるのが道理だった。自らが犯罪者と化して、獅子王機関の同僚を殺すのは、理屈に合わない。

ただしそれは、獅子王機関が真実を語っているならば、だ。

「冬佳は死んだんじゃない——進化したのさ」

「進化した……？」

前後の脈絡を無視した縁の言葉が、古城に漠然とした不安を抱かせた。

「〝雪霞狼〟の副作用だよ。人工的な霊的進化による高次元存在への転移。すなわち天使化さ」

声をなくしている古城たちの表情を見回して、縁が殊更に素っ気なく告げてくる。

「冬佳は模造天使になったんだよ。今の雪菜と同じようにね」

3

紘神冥駕は、湿った土の上で目を覚ました。魔術的な加工を施した、通称〝墓場の土〟だ。呪われた土が吸血鬼に力を与える——というのは迷信だが、四大元素のひとつである大地の

欠片が、呪術の触媒として有用なのは事実だった。おかげで暁古城との戦いで負った冥駕の傷も、すでに大部分が回復している。だが、その〝土〟は、冥駕が用意したものではなかった。

冥駕はゆっくりと上体を起こし、無言で周囲を見回した。

巨大なクルーズ船の甲板上だ。

本来なら乗客用のプールがあるはずの場所に、呪術触媒としての〝土〟が敷き詰められているのだ。プールの周囲には簡易な結界までもが展開されている。不死者の肉体の再生速度を底上げするための結界だった。この〝土〟のプールの持ち主は、不死者の性質をよく知っている魔族らしい。プールの横には冥駕の黒槍が、無造作に放置されている。

「ご機嫌よう、紘神冥駕。目覚めの気分はどうだい――？」

立ち上がる冥駕の頭上から聞こえてきたのは、笑いを含んだ美しい声だった。

上部甲板の先端に、一人の青年が佇んでいる。

その青年は降りそそぐ月光の下で、優美な金髪を揺らしていた。純白のスリーピース・スーツに身を包んだ吸血鬼だ。グラスに注がれた深紅の液体が、彼の手の中で揺れている。

「なるほど。キーストーンゲート第零層で、第四真祖の眷獣を迎撃したのは、貴方でしたか、アルデアル公――ディミトリエ・ヴァトラー」

全身の土を払い落として、冥駕は溜息混じりに苦笑した。

冥駕の道士服のあちこちは焼け焦げ、愛用の眼鏡は失われている。だが、第四真祖の眷獣に

襲われて、その程度のダメージで済んだことが、すでに奇跡に近い。

零式突撃降魔機槍が無効化された一瞬の隙を衝き、暁古城が召喚した雷光の獅子――その攻撃から冥駕を救ったのは、全身を鋼の刃で覆った巨大な蛇の眷獣だった。

真祖にもっとも近い吸血鬼と呼ばれるディミトリエ・ヴァトラーの眷獣なら、第四真祖の眷獣に対抗できても不思議はない。そしてヴァトラーは、行動不能に陥った冥駕を、第零層から連れ出したのだった。

「すまないが、第四真祖に破壊されたきみの右腕は、こちらで用意した死体で、勝手に修理させてもらったヨ。僵尸鬼の再生能力では、修復できないと判断したのでね」

ヴァトラーが、そう言って屈託なく笑いかけてくる。

「いえ……お心遣い感謝します」

冥駕は慇懃に頭を下げた。しょせんまがい物に過ぎない僵尸鬼には、〝旧き世代〟の吸血鬼ほどの再生能力はない。いかに不死身と呼ばれていても、肉体が破壊されてしまえばそれで終わりだ。失われた四肢を再生するには、ほかの死体から奪った部品を継ぎ合わせるしかないのだった。ヴァトラーの処置は的確だ。

「ですが、なぜ私を助けたのか、願わくばお聞かせいただきたい。第零層の存在をご存じだったということは、私たちの真の目的にもお気づきなのでしょう？」

「〝聖殲〟の再現、か。愉しみだね」

猜疑に満ちた冥駕の問いかけに、ヴァトラーは朗らかに答えてくる。
冥駕はかすかに苛立ったように目を細めた。
「もしもこの計画に成功すれば、人類は世界からすべての魔族を駆逐する手段を得ることになります――たとえ、あなた方、吸血鬼の真祖であっても、滅びから免れることはできない」
「ならば尚更、〝聖殲〟の復活を見てみたいな」
ヴァトラーが美しく微笑んだ。冥駕は皮肉っぽく唇を吊り上げる。
「その気まぐれが、すべての魔族を滅ぼすことになっても？」
もちろん、とヴァトラーが獰猛に牙を剝く。その美しい瞳の奥には、暗い闇が揺れていた。
「知らなかったのかい？　〝旧き世代の吸血鬼〟という連中はね、皆、飽き飽きしてるのサ。永劫の生というやつにね」
グラスを静かに傾けて、ヴァトラーが深紅の液体を喉に流しこむ。彼の全身から立ち上る鬼気に、体温を持たないはずの冥駕が寒気を覚えたように背筋を震わせた。
「世界の終焉に立ち会えるというのは、そんなボクたちに残された最高の娯楽じゃないか――そうは思わないか、紘神冥駕？」
「では、閣下のご期待に添えるように努力しますよ。このまやかしの命を救っていただいた、せめてもの返礼として」
足元の黒槍を拾い上げ、冥駕が深々と一礼する。

ヴァトラーが、おや、と片眉を上げた。冥駕との対話が終わってしまうことを、どこか惜しむような表情だ。

「もう行くのかい？」

「ええ。あなた方の敵となる前に、やり残したことがありますので――」

空間転移用の魔法陣を虚空に描きながら、冥駕が答える。

ヴァトラーは、冥駕を止めようとはしなかった。虚空に溶けこむように消え去る黒衣の青年を見送って、彼を哀れむように大げさに首を振る。

「獅子王機関に対する復讐か……虚しいことだね。戦闘とは、もっと純粋に戦闘そのものが目的であるべきだ。そうは思わないか、トビアス、キラ」

独り言のように呟くヴァトラーの背後に、ゆらゆらと銀色の霧が立ちこめる。その霧はやがて濃さを増し、二人の少年の姿へと変わった。トビアス・ジャガンとキラ・レーベデフ――それぞれが欧州〝戦王領域〟の貴族にして、ヴァトラーの腹心でもある武闘派の吸血鬼だ。

しかし盟主たるヴァトラーを見つめる彼らの瞳には、隠しきれない不安の色が滲んでいた。

「――本当にあの男を行かせてよろしかったのですか、閣下」

冷たい刃物を連想させる鋭利な美貌の少年――トビアスが、月光に照らし出された紘神島を苦々しげに睨んで訊いてくる。ヴァトラーは意外にも冷静な表情で彼らを見返して、

「もちろんさ。死してなお、紘神千羅の思惑に操られている哀れな人形――クズ鉄と魔術で造

られたこのガラクタの島には、相応しい役者だヨ。それに真祖をも滅ぼし得るという〝聖殲〟の力というのは、なかなか興味深い演目だろう？　もしそんなものが本当にあるのなら、ぜひ手に入れてみたいものだね」

「……それでこそ我らが盟主ですよ」

真祖への反逆とも受け取れるヴァトラーの言葉を聞いて、トビアスが諦めたように苦笑した。キラも右手を自分の胸に当て、恭しく目を伏せる。

「闘争の中でしか生を感じられないのは、僕らも同じ。たとえ世界の半分を灰燼に変えることになろうとも、閣下の戯れに最後まで付き従わせていただきます」

「そんなご大層な話じゃないサ。これはただの〝宴〟の余興だヨ」

深紅の液体を満たしたグラスを、月光にかざしてヴァトラーが酷薄に笑う。

「さあ、我が愛しの第四真祖よ、時が満ちるまであと少し――それまでは、哀れな人形と戯れるがいいさ。このまがい物の大地で、まがい物の天使と共に」

4

古城が最初に感じたのは、驚きではなく、疑念だった。この場に集まっている全員が、寄ってたかって自分を騙そうとしているのではないか――そういう類の不信感だ。

半ば現実逃避が含まれた古城のその戸惑いは、やがて憤りへと変わる。

「姫柊が模造天使になったって……どういうことだよ!?」

古城は縁に詰め寄って、彼女の胸ぐらを乱暴につかんだ。それを見た紗矢華の表情が怯えたように強張るが、縁は特に抵抗もせずに、古城を冷ややかに見上げてくる。

「おまえさんも見たんじゃないのかい？　雪菜が、おまえさんを助けるために模造天使の力を使うところをさ」

「ぐ……」

「以前から徴候はあったはずだよ。攻魔師でもないおまえさんに、気づけと言うのも無理な相談だがね。限界を超えて霊力を引き出すたびに、あの子の天使化は進んでたはずだ」

縁は、感情を交えない淡々とした口調で説明を続けた。

古城は、ほとんど突き放すようにして、彼女の襟元から手を離し、

「儀式は、どうなってるんだ?」と訊き返す。

「儀式？」縁が訝るように眉を寄せた。

「模造天使を造り出すためには、候補者同士を殺し合わせるような、面倒な儀式が必要だったはずだぞ!?」

荒々しく問い詰める古城の声に、夏音がビクッと肩を震わせる。

叶瀬賢生が実行した模造天使量産計画では、何人もの少女たちが互いに殺し合い、絃神島

の市街地にも大きな被害を出した。その殺し合いに参加した候補者の中には、賢生の娘である夏音も含まれていたのだ。

「それは人体を強制的に天使化するために、高出力の霊的中枢が大量に必要だったからだ」

古城の疑問に答えたのは、賢生だった。自らの罪を懺悔することも誇ることもなく、粛々と事実だけを告げてくる。

「人体が耐えうる限界まで強化された霊的中枢回路を、七人分――それを一人の人間の体内に移植することで、ようやく完全な模造天使が生まれる」

「だったら姫柊はどうなるんだ!?　あいつが他人の霊的中枢を奪ったことなんて、これまでに一度もないはずだぞ!?」

古城の問いかけに無言でうなずき、そして賢生は反論を口にした。

「だが、彼女には七式突撃降魔機槍があった」

「姫柊の……槍……？」

「七式突撃降魔機槍が生成する神格振動波は、模造天使が操る神気と同一のものだ。彼女の霊力を吸い上げて神気へと変換する七式突撃降魔機槍は、疑似的な霊的中枢といえる。それも極めて高出力な霊力回路だよ。当然、それは彼女の肉体に影響を及ぼすことになるだろう」

「それが〝雪霞狼〟の副作用――か」

古城が表情を怒りに歪めて、再び縁を睨みつける。

そう――〝雪霞狼〟と模造天使は、それぞれ同種の力を操る。古城はそのことを知っていた。天使化した夏音の攻撃を、雪菜の槍が相殺するのを間近で何度も見ていたからだ。が、

「なんだよそれは!? ふざけてんのか!? あの槍は、おまえら獅子王機関が姫柊に使わせてたんだろうが――!」

「〝雪霞狼〟を使いこなせるのは、ごく限られた適合者だけでね。剣巫としては未熟な雪菜が、おまえさんの監視役に選ばれたのも、あの槍との極めて高い適性を持っていたからなのさ」

縁が、そう言って目を閉じた。少しだけつらそうに首を振る。

「だが、そのせいであの子の天使化は、獅子王機関の予想より遥かに速く進行しちまった。今回の件は、あたしたちにとっても想定外だったんだよ」

「……姫柊は、どうなるんだ?」

古城が圧し殺したような声で訊く。今さら縁たちを責めても意味がない。それは古城にもわかっていたが、だからといって割り切れるものでもなかった。

「槍を起動していない状態での、彼女の模造天使としての覚醒度は、第二段階から第三段階――日常生活を送るのに支障のないレベルだ」

縁に代わって賢生が説明する。古城は安堵の息を吐いた。段階と言われても古城には理解できないが、天使化する前の夏音と同じだと思えば、大きな問題はなさそうだ。

「姫柊が、いきなり消滅するようなことはないんだな?」

可能性は極めて低い、と賢生が魔導技師らしい口調で答えてくる。

「ただし七式突撃降魔機槍を使用した場合――覚醒度は第五段階を超える。きみたちと戦ったときの夏音と同等といえば、わかりやすいか。その状態で、霊力を大量に放出すれば、天使化は一気に進行するだろうな」

「な……」

古城の頬から血の気が引く。賢生の答えを予想していたのか、紗矢華は、無反応なまま古城たちの会話を聞いていた。

縁が、疲れたように笑って首を振る。

「あたしが使う霊弓術のような、霊力を増幅する系統の呪術からも遠ざけておいたほうがいいだろうね。ましてや六式重装降魔弓や乙型呪装双叉槍のような武神具を使わせるのは論外さ」

「待てよ……それじゃ姫柊は……」

「再起不能だよ。剣巫としてはね」

縁がきっぱりと言い切った。そうか、と古城は唇を噛む。ただ、妙に腑に落ちた気分だった。紗矢華があれほどまでに取り乱し、怒りをあらわにしていた理由もわかる。

雪菜は、幼いころから過酷な訓練に明け暮れ、剣巫になるためだけに育てられたのだ。

そんな彼女が、剣巫としての力を奪われる。それがどれだけ残酷なことか、古城にも薄々想像はできた。ましてや雪菜と一緒に育ってきた紗矢華にとっては、半身を引き裂かれるような

思いだろう。

「おまえさんが気に病むことじゃないよ、第四真祖。師匠であるあたしの責任さ」

縁が自嘲するように弱々しく笑って、抱き寄せた黒猫の背中を撫でた。

「今の話、姫柊には――」

古城はどうにかそれだけを口にする。縁は少し困ったように肩をすくめて、

「あの子が起きたら、あたしの口から伝えておくよ。そんなわけで、第四真祖――今日のところは、お引き取り願えるかい？　雪菜も、自分が落ちこんでる姿を、あんたに見られたくはないだろうからね」

「姫柊をほっといて帰れ、ってことか？」

「七式突撃降魔機槍は獅子王機関の秘奥兵器だからね。本来なら部外者に聞かせていい話じゃなかったんだ。それをあんたに伝えたのは、あたしなりの誠意のつもりだよ」

苛立つ古城を冷たく睨み返して、縁が言った。そして縁は、目を泣き腫らしたままの紗矢華を鬱陶しげに眺めて、

「後任の監視役が決まるまで、あんたには紗矢華をつけておく。ま、仲良くやっておくれ」

え、私、と驚いたように顔を上げる紗矢華を、マジか、と古城は見下ろした。なにしろ古城はついさっき、彼女に殺されかけたばかりなのである。

紗矢華と古城は、どちらからともなく顔を見合わせ、二人同時に溜息を洩らした。

勘弁してくれ、と落ちこむ古城たちの横顔を、夏音が心配そうに見守っている。

5

叶瀬賢生の研究室の所在地は、人工島北地区の地下最下層だった。外界から隔離された、収容所に近い場所である。模造天使事件の首謀者である彼は、魔導犯罪者として今も厳重な監視下に置かれているのだ。

研究所の入り口で、紗矢華が守衛に攻魔師免許を提示する。そんな紗矢華に引き連れられて、古城は隔離区域を出た。

そこから地上に戻るまで、古城たちはひと言も口を利こうとはしなかった。殺されかけたり、泣き顔を見られてしまったり——ということで、互いに気まずくて喋れなかったのだ。

「私ね……」

やがて地下道の外に出たところで、紗矢華がぽつりと呟いた。

いつの間にか夜が明けていたらしい。無駄に強烈な亜熱帯地域の太陽が、早朝のビル街を白く照らしている。

「私、雪菜と初めて会ったときからずっと、天使みたいな子だなって思ってたのよ。可愛くて真面目で優しくて綺麗で……それがまさか本当に天使になっちゃうなんてね」

あはは、と紗矢華が乾いた声で笑う。紗矢華なりに場を和ませようとしたのかも知れないが、正直、古城には笑えなかった。無理して強がっている紗矢華の様子が痛々しい。

「姫柊はべつに天使なんかじゃねーよ」

古城が、拗ねた子どものような口調で言い返す。この半年間、ほぼ毎日のように雪菜につきまとわれてきた古城だが、彼女を天使のようだと感じたことなど一度もなかった。

「すぐに拗ねるし、無茶ばっかするし、飛行機は恐がるし、やたらマヨネーズが好きだし、変なネコのマスコットに異様に執着するし――」

「そこが可愛いのよねー……やっぱり雪菜は天使じゃない」

淀みなく続く古城の愚痴をきっぱり無視して、紗矢華がうっとりと言い返す。相変わらずの溺愛ぶりである。そんな紗矢華の揺らがない愛情に、古城は本気で感心して、

「おまえ、本当にブレないな。ちょっと尊敬したわ」

「べ、べつにあなたに尊敬して欲しいわけじゃないんだけど――って、それよりも、暁古城、あなた、なんとも思わないの？　雪菜が剣巫じゃなくなったら、あなたとはもう会えないかもしれないのよ？」

「そのほうがおまえにとっては好都合じゃねーのかよ」

古城が面倒臭そうに指摘した。私の雪菜に近づくな――などと普段あれほど文句を言ってる紗矢華に、突然そんなふうに心配されても、反応に困る。

そんな矛盾を自覚したのか、紗矢華は、少し焦ったように声を高くして、
「え？　あ……まあ、それはそうなんだけど！　私の雪菜の純潔が、これ以上、あなたに汚されることもないわけだし！」
「汚してねえよ！　そういう誤解を招くようなことを大声で言ってんじゃねえ！」
周囲の視線を気にしながら、古城が絶叫する。早朝とはいえ、企業や大学の研究所が建ち並ぶ人工島北地区だ。通勤通学のために歩道を行き交う人々も皆無ではない。それでなくても高校の制服姿の古城と紗矢華は、この地区では目立つのだ。
「とにかく姫柊だって普通の人間なんだし、模造天使なんてわけのわかんないものになって消滅されるよりは、普通に暮らして幸せになってくれたほうがいいに決まってんだろ」
古城は、自分自身に言い聞かせるような口調でそう呟いた。雪菜が消滅せずに済むのなら、彼女に会えなくなるのも仕方ないと割り切れる。そもそも古城と雪菜は友人ではなく、しょせん監視対象の吸血鬼と、政府に派遣されてきたただの監視役なのだから。
そんなふうに現実を受け入れようとする古城を見つめて、紗矢華が、ぼそりと訊いてくる。
「普通の幸せって、なに？」
「え？」
「あたしたちは小さな子どものころから、攻魔師になるために育てられたのよ。今さら普通に幸せになれって言われても、そんなのどうすればいいのかわからないんだけど」

「剣巫を続けられなくなったって、獅子王機関から追い出されるわけじゃないんだろ？」

わけもなく動揺を覚えつつ、古城は紗矢華に訊き返す。雪菜は基本的に真面目で頭もいい。剣巫のような戦闘要員でなくても、いくらでも仕事はあるはずだ。模造天使になるほどの霊力の持ち主を、獅子王機関が手放すはずもない。

「それは、そうだけど……」

歯切れの悪い口調で紗矢華が言う。そして彼女は、真剣な表情になって古城に向き直り、

「雪菜の部屋に、簡易霊力検査キットがあったの」と告げてきた。

「霊力検査キット？」

「あの子は前から知ってたのよ。近いうちに自分が剣巫でいられなくなるって――」

紗矢華の静かな呟きに、古城は心臓が跳ねるのを自覚した。ここしばらくの間、雪菜の様子がおかしかったことには、古城も気づいていたのだ。なのに古城は、その理由を深く考えようとはしなかった。

「あいつ、なんで俺に黙ってたんだよ？　ニャンコ先生が自分に会いに来た理由も、本当はわかってたってことだよな？」

「わかってたから逃げたんでしょ。自分が高神の杜に連れ戻される前に、藍羽浅葱を助けたかったのよ」

「そのせいで自分が消滅するかもしれないのにか？　なんで、そんな……」

古城は、キーストーンゲート第零層に向かう途中の、雪菜とのやりとりを思い出す。自分の体調に問題はない――そんな、すぐにバレるような嘘をついてまで、雪菜は、古城と同行することにこだわった。その理由が古城にはわからない。消滅するほどの危険を冒してまで、浅葱を助ける理由は、雪菜にはないはずなのだ。

しかし紗矢華には、雪菜の気持ちがわかっていたらしい。彼女は少しだけ羨むような視線を古城に向けて、

「それは、あの子にとっての普通の幸せっていうのが――」

そう言いかけたところでハッと我に返った紗矢華が、呆然と立ち尽くしている古城の足を、八つ当たり気味に踏みつけてくる。

「なんでもないわよ！　死になさいよ、馬鹿！」

「なんでいきなりキレてんだよ、おまえは!?」

革靴の踵で足の甲を踏みにじられた古城が、涙目になって言い返す。

そんな古城の情けない姿を見て満足したのか、紗矢華が吹っ切れたように背筋を伸ばした。これ見よがしに胸を張り、恩着せがましく言ってくる。

「まあ、そんなわけだから、藍羽浅葱の救出には私も協力するわ」

「煌坂が……？」

驚く古城の顔を見て、紗矢華は慌てて目を逸らした。

「あ、あなたや藍羽浅葱じゃなくて、雪菜のためなんだからね！」

「いや、まあ、助かるけどさ……」

唐突に協力を申し出た紗矢華の真意を量りかね、古城は戸惑いながら息を吐く。と、そんな古城たちの方角に、駆け寄ってくる小さな影があった。

やけに立派な制服を着た小学生の女子である。特徴的な赤い髪に、愛らしいベレー帽を被っている。横断歩道を走って渡りながら、彼女は古城に向かって大きく手を振り、

「彼氏殿！　彼氏殿ではござらぬか！」

なぜか時代劇を思わせる大仰な口調でそう言った。

「誰？」と紗矢華が古城を睨む。小学生にまで手を出しているのか、という疑惑の眼差しだ。

「……誰だ、おまえ？」古城も同じく、警戒の表情で少女を見つめた。

「拙者、リディアーヌ・ディディエでござる！　彼氏殿、よもや記憶に障害でも？」

少女が、そう言って憤慨したように顔を上げてくる。

そこでようやく、古城の記憶と少女の顔が一致した。知り合ったときの恰好が恰好だけに、まともな服装をされると見分けられなくなってしまうのだ。

「ああ……おまえか。そうか、おまえって、いちおう学生だったんだな」

「然様。天奏学館の小等部にて候」

リディアーヌは少し得意げに、名門小学校の制服を見せつけてくる。

考えてみれば、彼女と話をするのは、キーストーンゲート第零層に侵入したとき以来だった。慌てて駆け寄ってきたところを見ると、冥駕との戦闘で連絡が途絶えた古城のことを、捜してくれていたのかもしれない。

「すまん。そういや、紘神冥駕の野郎にスマホをぶっ壊されちまったから、連絡できなかったんだ。心配かけたな」

「なんのなんの」

深々と頭を下げる古城に、リディアーヌは悠然と答えてくる。そして彼女は、古城の隣にいる紗矢華にふと目を留め、

「やや？　貴殿はいつぞやの舞威媛殿でござるな」

「知り合いだったのか？」と思わず紗矢華に確認する古城。

「前にちょっと……ね。戦車に乗ってないときに会うのは初めてだけど……ていうか、あなた、普段からその喋り方なわけ？」

「うむ。武士に二言はござらぬ」

呆れたように訊いてくる紗矢華に、リディアーヌは堂々と答えてくる。おまえは武士じゃねーし、言葉の使い方も間違ってるからな、と古城はやる気なくツッコミを入れた。

「イブリスベールは？」と気を取り直して古城が質問する。

「彼の若君とは、昨夜のうちに別れたでござる。拙者の安全も確保できたでござるゆえ」

リディアーヌはそう言って手首の腕時計に手を触れた。

その瞬間、彼女の背後に、ゆらり、と乗用車サイズの有脚戦車が現れる。呪術迷彩によって姿を消していたらしい。基本的なシルエットは同じだが、昨夜、破壊された機体とは、微妙に細部のデザインが違っていた。

「予備の戦車が届いたのか」

普段からそんなふうに戦車を連れ歩いてるのか、と古城は顔をしかめて嘆息した。リディアーヌが新たな戦車を手に入れたことで、これ以上の護衛は必要ないとイブリスベールは判断した、ということなのだろう。

「〝膝丸弐號〟にて候。近接戦闘に備えて装備されたドリルこそが、この機体の誉れでござる」

戦車の前脚に取りつけられたドリルを、リディアーヌが自慢げに指し示す。果たして実戦でどの程度の効果があるのか、正直微妙なデザインである。

「そ、そうか。俺は恰好いいと思うぞ、俺はな……って、それよりもリディアーヌ、あの第零層ってのはなんなんだ？　浅葱どころか、人っ子一人いなかったぞ？」

「拙者の調査不足でござった。面目ない」

無理やり話題を変えた古城に、リディアーヌはちょこんと頭を下げた。あの場所に浅葱が幽閉されている、という情報には、やはり不備があったのだ。

「然れど、第零層の謎、すでに解けており申す。第零層とは、単なるキーストーンゲートの一

階層に非ず。秘匿された潜水艇基地こそ、彼の場所の正体なりと」

「潜水艇基地……？」

古城が表情を消して立ち尽くす。

キーストーンゲート第零層。地上でも地下でもない空間。それは、この人工島において海抜ゼロメートル――ちょうど海面と同じ高さということを意味している。

その謎の空間を取り囲んでいたのは、水圧に耐えうる強固な壁だ。キーストーンゲート第零層は、潜水艇の整備や補給を行う、基地としての条件を満たしているのだ。

「じゃあ、藍羽浅葱の居場所って、もしかして――」

絶句している古城に代わって、紗矢華がリディアーヌに質問する。

リディアーヌは重々しくうなずくと、自らの足元へと視線を向ける。

「然様。女帝殿が幽閉されている〝C〟なる部屋の正体は、キーストーンゲート第零層に格納されていた潜水艇。すなわち女帝殿の現在地は、絃神島直下の海底――深度四百メートル地点にござる」

6

どんぶりに満たされた茶褐色のスープが、独特の香気を放っていた。そのスープをレンゲで

慎重にすくって、味見するようにそっと口に流しこむ。

「ん、美味しっ……！」

舌の上でスープを転がしながら、満足そうに呟いたのは藍羽浅葱だった。

可愛らしく着崩した制服に、気合いの入った華やかな髪型。ローカルアイドルの活動などとは無縁な、小洒落た女子高生風ファッションだ。

「やっぱり〝麺屋いとがみ〟の濃厚魚介スープは最高よね。生にんにくと辛味増量で、と」

ずるずるとラーメンをすすっていても下品な印象にならないのは、本人も無自覚な育ちのよさの賜物である。麺とトッピングを綺麗に平らげ、最後の一滴までスープを飲み干して、ご馳走様でした、と浅葱は手を合わせた。

その瞬間、きらきらと輝く粒子に変わって、浅葱の前からラーメンのどんぶりが消滅する。

代わりに彼女の手の中に現れたのは、最新号のファッション雑誌だった。愛用のソファとクッションをなにもない虚空から喚び出して、浅葱はだらしない姿勢で横たわる。

「ん、この〝ベストアンサーズ〟のスカート、可愛いかも。こっちのパンツも悪くないけど、問題は色よね。安定のモノトーンか、あえてのアニマルプリントって選択肢も……ねえ、モグワイ。あんたはどう思う？」

素足をぶらぶらと振りながら、浅葱が、相棒の人工知能に呼びかける。だが、普段ならすぐに聞こえてくるはずの皮肉っぽい声が、浅葱に応えてくることはなかった。

「……モグワイ？」

浅葱は不意に真顔になって、雑誌をめくっていた手を止めた。そしてゆっくりと起き上がる。その瞬間、浅葱の視界から、雑誌もソファもクッションも消えた。あとに残されたのは、どこまでも広がる永劫の暗闇と、星のように明滅する無数のバイナリデータだけだ。

この光と闇だけが存在する世界は、絃神島を制御する五基のスーパーコンピューターと、浅葱の意識が生み出した仮想現実——いわゆる電脳空間だった。

ただし通常の電脳空間と違うのは、この世界が魔術的な性質を帯びていることだ。

キーストーンゲート第零層、〝各神の棺桶〟に保管されていた〝情報〟を入力したことで、人工島内のコンピューターネットワークは、魔術結界としての機能を手に入れた。そしてその〝電脳結界〟は、今や管理者である浅葱の肉体をも取りこんで、結界内部に幽閉している。

自分の肉体そのものが、電脳結界を維持する部品として組みこまれているために、浅葱は結界から出られない。監獄結界に取りこまれた南宮那月と、原理的には同じ状態だ。いわばこの電脳結界は、浅葱の意識が生み出した夢なのだ。浅葱の肉体そのものを閉じこめ、現実世界にも影響を及ぼす危険な夢である。

那月は、魔術で生み出した自らの分身を遠隔操作することで、現実世界でも自由に動いている。しかし浅葱には彼女の真似は出来ない。出来るのは、せいぜい現実世界のネットワークに割りこんで、古城に助けを求めるくらいのものだった。

代わりに、この電脳結界の内側では、浅葱は神のように自由に振る舞うことができる。好みの食事や雑誌を取り寄せたり、愛用の家具を生み出すことも簡単だ。メイクや服装や髪型も、イメージするだけで自由に変えられる。だがそれは、しょせんそれだけの話である。

「あーあ。さすがに飽きちゃったわ。なんでも自分の思いどおりになるのって、案外、退屈なものよね——ね、あなたもそうだったんでしょう？」

浅葱は、そう言ってゆっくりと周囲を見回した。そして誰もいない暗闇の中へと呼びかける。戸惑うような一瞬の遅滞のあと、響いてきたのは若い女の声だった。古い録音を聞いているような、ノイズ混じりの掠れた声だ。

「かくも聡き〝電子の女帝〟よ——あなたは、すでに〝箱庭〟を使いこなしているのですね」

光の粒子が集まって、一人の少女が現れる。

見知らぬ美しい娘だった。艶やかな黒髪の持ち主ということ以外、人種も国籍もわからない。どの時代、どの国の人間にも見える——そんな不思議な姿の少女である。

「やめてよね。あんたまで、あたしをその恥ずかしいあだ名で呼ぶわけ？　えーと……」

旧知の友人に尋ねるような口調で、浅葱が訊く。少女は冷ややかに唇を震わせる。どうやら微笑ったつもりらしい。

「では、私のことは〝女教皇〟とお呼びください。それでおあいこということで」

「普通に本名で呼んでもらっても、あたしは構わないんだけど」

そう言って浅葱は唇を尖らせた。黒髪の少女の大きな瞳が、無表情に浅葱を見つめてくる。
「あなたはもう、すべて理解しているのですね、藍羽浅葱」
「〝棺桶〟の中身を、全部見せられちゃったからね」
浅葱は、気怠く微笑んで肩をすくめた。〝棺桶〟の中の〝情報〟とは、すなわち咎神カインの〝記憶〟だ。それゆえに浅葱は、黒髪の少女を恐れない。浅葱以外に誰も存在できないはずの電脳結界に、彼女が侵入できた理由――浅葱はそれを知っている。黒髪の少女の正体も。
「この世界の真実を知って、あなたは平気なのですか？」
平然と笑う浅葱を咎めるように、黒髪の少女が訊いてくる。浅葱はちらりと舌を出し、
「生まれたときからこの世界で暮らしてたわけだから、今さら悩めって言われても困るかな。あたしは〝魔族特区〟育ちだからね」
「その〝魔族特区〟を利用して、この世界を破壊しようとしている者がいても？」
「そうね」浅葱は一瞬だけ考えこむような仕草をした。「それはたしかにムカつくかもね」
「では、私と取り引きをしませんか」
唇の動きだけで、黒髪の少女がうっすらと笑う。
「取り引き？」
「私には、あなたをここから解き放つことができる。この永劫の孤独の世界から」
「あなた自身を、あたしの身代わりにすることでね」浅葱が不機嫌そうに息を吐く。「で？

それであなたはなにが望みなの、〝女教皇〟？」

「呪いを」

少女の返答は速かった。彼女の長い黒髪が、闇の中でゆらゆらと舞い上がる。

「咎神の力を振るうものに、永劫の呪いの烙印を――」

「なるほどねぇ……」

浅葱がやれやれと首を振る。

ある意味、予想どおりの答えではあった。そのことが浅葱を失望させている。

「残念だけど、取り引きは不成立よ、〝女教皇〟」

「なぜ？　外の世界に戻りたくはないのですか？」

「それはそれで魅力的な提案だけど、復讐は自分の手でやらなきゃ無意味でしょ？」

ちっちっ、と浅葱が、芝居がかった仕草で伸ばした人差し指を振る。

「それに、人を呪わば穴ふたつ――って、わかる？　くだらない呪いなんかにこだわってると、自分が不幸になるだけよ」

「不幸……ですか」

黒髪の少女はそう呟いて、静かに長い溜息をついた。

彼女が全身にまとっているのは、布を巻きつけたような粗末なローブだ。彼女はそれをそっと解いて、自らの足元へと投げ落とす。暗闇の中で露わになったのは、彼女の裸身だ。

「この私の姿以上の不幸が存在するとでも？」

「〝女教皇〟……あなたは……！」

黒髪の少女の裸身を見つめて、浅葱は驚きに声をなくした。

均整のとれた美しい肢体。だが、その全身に刻まれているのは、縫い目のような深い傷跡だ。まるで引き裂かれた肉体を、無理やりに継ぎ合わせたような無惨な姿だった。

「哀れ、忌まわしき咎神の巫女よ。汝の世界は、妾が永劫の悲嘆と怨嗟に染め上げてみせよう。我が血の呪い、思い知れ！」

黒髪の少女から洩れ出した闇が、電脳結界の内部を黒く染めていく。それは増殖したコンピューターウイルスが、ネットワークを汚染していく姿によく似ていた。

電脳結界を漂う浅葱の肉体も、その闇色の侵蝕に飲まれて消えていく。

あとに残されたのは笑い声。復讐に取り憑かれた少女の狂笑だけだった。

7

中に銀色の槍が入っていることを確認して、雪菜はギターケースのファスナーを締めた。

病室代わりに用意された、小さな実験室である。室内にいるのは雪菜一人だ。気分が悪いと嘘をつき、叶瀬賢生たちを追い払ったのだ。

患者衣姿の雪菜の髪には、銀色の蝶が止まっている。雪菜が呪術で造り出した式神の蝶だ。その蝶たちを利用して、雪菜はすべての会話を聞いていた。

紘神冥駕の過去のことも。そして自分が天使化しつつあることも――

「雪菜ちゃん」

人目を避けるように周囲を見回しながら、夏音が部屋に入ってくる。彼女が胸に抱いているのは、綺麗に折り畳まれた雪菜の制服だ。

「制服、洗っておきました。あと、これ――私のだけど、よかったら」

そう言って夏音が手渡してきたのは、新しい下着と靴下だった。多少気恥ずかしくはあるが、今の雪菜には、なによりもありがたい心遣いだ。昨日から何度も海風と雨に晒された上に、縁や冥駕との度重なる戦闘で、雪菜の下着はくたくたな状態だったからだ。

「ごめんね、いろいろ迷惑かけて」

さっそく渡された服に着替えながら、雪菜が夏音に礼を言う。

渋る夏音に強引に頼みこみ、〝雪霞狼〟と着替えを、こっそり運んできてもらったのは雪菜である。自分の我がままが彼女を苦しめることはわかっていたが、夏音が脱走を手伝ってくれると、雪菜は最初から確信していた。もしも夏音が雪菜の立場なら、きっと彼女も雪菜と同じことをする――それがわかっていたからだ。

自分の存在と引き換えにしてでも、古城を助ける。それが雪菜の決断なのだった。

「私のほうこそ、ごめんなさい――でした。私が模造天使になりかけたときには、雪菜ちゃんに助けてもらったのに」

胸の前で両手を握り合わせて、夏音は泣き出しそうな表情を浮かべている。

模造天使へと変わりつつある雪菜を、自分の力では救えない――夏音はそれを嘆いているのだ。

「夏音ちゃんが謝るようなことは、なにもないよ。それにあのとき夏音ちゃんを助けたのは暁先輩だから。ううん、あのときだけじゃなくて、いつも――」

雪菜は首を振って優しく苦笑した。

そう。雪菜が監視を始めてからの半年ほどの間、古城はいつも誰かを助けようとしていた。

紘神島の人々や、実の妹や、同級生の少女。夏音や、そしてときには雪菜のことも――

世界最強の吸血鬼の力を持ちながら、彼がそれを使うのは、常に誰か他人のためだ。

だから雪菜は、彼を助けなければならないのだ。

なぜ。その理由は考えるまでもなくわかっていた。雪菜が彼の監視者だからだ。

「ひとつだけお願いを聞いてください」

着替えを終え、ギグケースを背負う雪菜を見つめて夏音が言う。

「え？」

雪菜は驚いて彼女を見返した。こんなときに願い事を言い出すのは、夏音らしからぬ行動に

思えたからだ。夏音はそんな雪菜の手を取って、囁くように告げてくる。

「戻ってきて、雪菜ちゃん」

涙に揺れる夏音の瞳を、雪菜は無言で見返した。夏音に嘘はつけない。約束はできない。だから雪菜は、精いっぱいの思いをこめて、ひと言だけ伝える。

「ありがとう」

姫柊雪菜が研究所を出て行ったのは、それからすぐのことだった。

いかに叶瀬賢生の研究所が外界から隔離されているとはいえ、獅子王機関の剣巫を止められるような警備ではない。ましてや雪菜は、ありとあらゆる結界を斬り裂く七式突撃降魔機槍を持っているのだ。

あっさりと警備を無効化して脱走する雪菜を、縁堂縁は、どこかふて腐れたような表情で、頬杖を突きながらモニタ越しに見送っている。

「行かせてしまって、よかったのかね？」

陰気な表情でコーヒーをすすりながら、呼びかけてきたのは賢生だった。

「本人の決めたことだ。好きにすればいいさ」

萌葱色の瞳を半眼にしながら、縁が乱暴に言い放つ。しかし拗ねたような口調とは裏腹に、縁の口元に浮かんでいるのは柔らかな微笑みだ。

「あたしら長命種に寿命はないも同然だけど、心がとっくに死んでるのに、肉体だけが生き長らえている屍みたいなやつらは大勢いる。あの子の選んだ生き方と、どちらが幸せかなんて誰にもわかりゃしないよ——なにがおかしいのさ？」

苦笑いを浮かべている賢生に気づいて、縁が不機嫌そうに顔を上げた。

賢生は、元の陰気な表情に戻って、たいしたことじゃない、と前置きし、

「以前、第四真祖に言われたことを思い出したよ。娘の幸福の形を勝手に決めて、押しつけるな——とね」

「あの坊やも、好き勝手なことを言ってくれるね。年長者の苦労も知らずにさ」

ちっ、と縁が苦々しげに舌打ちした。彼女の膝の上では、使い魔の黒猫が、グルグルと笑うように喉を鳴らしている。第四真祖め、と縁は、腹立ちまぎれに呟いて、

「うちの愛弟子にもしものことがあったら、死んだほうがマシだって目に遭わせてやるよ」

「同感だ。あの男が、うちの娘を泣かせたときに備えて、対真祖用の凶悪な呪詛を完成させておいたのだが、興味はあるかね？」

賢生が、冗談とも本気とも判断がつかない、真面目な口調でそう言った。

縁は、クッと愉快そうに噴き出して、

「そいつは、ぜひ拝見したいね。あの手の不老不死って手合いを苦しめる方法なら、あたしも助言できると思うしね」

「なるほど。参考になりそうだ」と元アルディギア王国宮廷魔導技師が重々しくうなずく。
ハハッと縁はひとしきり笑ったあと、握り締めていた右手をゆっくりと開いた。その手の中に握られていたのは、小さな銀色の指輪である。
「できれば、こいつは使いたくなかったんだけどね――」
祈るように紡がれた縁の囁きが、人工島の地下の闇に静かに溶けていく。

8

豪奢なドレスをまとった魔女は、露骨に不機嫌な空気を撒き散らしていた。
童女のような幼い顔立ちの小柄な国家攻魔官。〝空隙の魔女〟南宮那月である。
「この私を、宅配ピザのごとく電話一本で呼びつけるとは、ずいぶん偉くなったものだな、え？　獅子王機関のポニテ。それに暁古城――」
「あ……う……そ、それは……ちょっ、やめ……」
後ろ髪をぐいぐいと引っ張られた紗矢華が、泣き出しそうな顔で必死に抵抗する。
キーストーンゲートの裏門に近いイベントスペースの前である。人払いの結界を紗矢華が展開しているので、周囲には通行人の姿はない。このイベントスペースのちょうど真下に、第零層と呼ばれる空間がある。リディアーヌの推測が確かなら、さらにその下の海底に、浅葱を幽

閉した潜水艇が沈んでいるはずだった。

「待ってくれ、那月ちゃん。お怒りはごもっともだが、これには事情が――痛っ!?」

紗矢華を庇って口を開きかけた古城が、突然、悲鳴を上げて仰け反った。手に持っていた扇子の先端で、那月が強烈なデコピンを喰らわせたのだ。

「担任教師をちゃん付けで呼ぶな。ただでさえ今の私は不機嫌なのだからな」

「この体罰に厳しいご時世に無茶苦茶しやがるな……くそ……」

傲然と見下ろしてくる那月を涙目で睨んで、古城が小さく首を振る。

那月は、ふん、と鼻を鳴らして、ようやく紗矢華を解放した。

「それで私を呼び出した用件というのは、例の芸能人気取りの小娘のことか？」

「ああ……芸能人気取りっていうか、あれは本当は浅葱じゃなくて……」

「CGで作られた偽物か。だろうな」

「気づいてたのかよ？」

平然と答えてくる那月を見上げて、古城は唖然と訊き返す。

「本物の藍羽のほうが、まだしも可愛げがあるからな」

ビルの壁面に貼られた浅葱のポスターを眺め、那月は冷たく言い放った。普段と同じ傍若無人な口調だが、どことなく自分の教え子に対する愛情が感じられる声だ。

「本物の女帝殿の居場所がわかったのでござる、先生殿」

有脚戦車（ロボットタンク）の操縦席から顔だけ出して、リディアーヌが那月に呼びかける。那月のことを先生と呼ぶあたり、何気に抜け目のない性格だ。デコピンされる古城の姿を見て、ちゃっかり学習していたらしい。

那月も悪い気がしないのか、心なしか優しい視線をリディアーヌに向けて、

「キーストーンゲート第零層（ゼロ）――〝咎神の棺桶（カインズ・コフィン）〟か」

「知ってたのか？」

「私はあいつの担任だぞ。当然だ」

驚く古城を睨めつけて、那月が得意げに顎（あご）を上げた。

「〝棺桶（かんおけ）〟の現在地は？」

「絃神島直下（いとがみじま）の海底――水深四百メートル地点でござる。もっと正確な位置は、現在、拙者（せっしゃ）の潜水ドローンが探査中でござるが……」

操縦席の計器を見下ろして、リディアーヌが答える。那月は、つまらなそうに唇（くちびる）を曲げて、

「それで？　私にあいつを連れ出せというのか？」

「ほかに頼める人間を思いつかなかったんだよ。生身（なま）で潜れる深さじゃねーし」

古城が悔しげに唇を尖（とが）らせた。うむ、とリディアーヌが首肯（しゅこう）して、

「彼氏殿は泳げないという話でござったしな」

「俺（おれ）じゃなくても、普通は四百メートルも潜れねーんだよ！」

思わずムキになって言い返す古城。

「最悪、俺の眷獣を使うって方法も考えたんだが、浅葱を無傷で連れて帰れる気がしなくてな。だけど那月ちゃんの空間跳躍なら――」

口々に説得を続ける古城たちを、那月は人形のような無感動な瞳で眺めている。

そして彼女は、本気で失望した、というふうに深々と嘆息した。

「やれやれ。獅子王機関の舞威媛というのは、呪詛と暗殺の専門家だと聞いていたが――とんだボンクラだったようだな」

「は、はい!?」

ピンポイントに名指しで誹謗されて、紗矢華が大きく目を剝いた。那月はそんな彼女を蔑むように見上げて、

「〝棺桶〟は咎神復活のキモになる装置だろうに、魔術よけの結界も張らずに、そんな重要なものを放置していると、貴様、本気で思っているのか？」

「そ、そうか……結界……！」

紗矢華がハッと口元を覆う。獅子王機関の舞威媛でありながら、そんな基本的なことを見落としていたのだ。那月に馬鹿にされるのも当然だった。

「潜水艇の中には空間跳躍できないってことか」

古城が、ぐ、と声を詰まらせる。那月は無造作にうなずいて、

「空間跳躍（テレポート）だけでなく、探知系の魔術も軒並み全滅だ。ただでさえ水には魔力を減衰（げんすい）させる性質があるからな。本当に藍羽が潜水艇の中にいるのかどうか、地上からでは確かめようがない」

「那月ちゃんが浅葱を放置してたのは、そのせいか。助けたくても助けられなかったんだな？」

古城は勝手に納得してそう呟（つぶや）いた。

おそらく那月も、教え子である浅葱を心配していたのだ。そして、どうにか助けたいと願っていた。しかし那月にも、海中に閉じこめられた浅葱を救い出すことはできなかった。那月は自分の無力さを恥じて、人知れず涙を流していたはず――そこまで想像して那月に同情する。

だが、那月は、古城のそんな無根拠な想像に、自尊心を傷つけられたらしい。なんだと、と攻撃的に古城を睨（にら）みつけ、

「誰（だれ）に向かって言っている？　私にその気があれば、藍羽のことはとっくに連れ出していた」

「いや、そんな見栄を張んなくても――」

「見栄ではない！」那月が忌々（いまいま）しげに反論する。「〝棺桶〟の結界くらい、たとえばアスタルテを海の中に放りこんでやれば、どうにでもなる！」

「鬼か、あんた……!?　そういうことをサラッと思いつく時点で恐（こえ）ェよ！」

特殊な人工生命体（ホムンクルス）であるアスタルテの眷獣は、物理攻撃を無効化し、魔術結界を破壊する能力を持っている。たしかに彼女なら、深度四百メートルの水圧にも耐えられるし、潜水艇の結界も破れるだろう。

とはいえ、非力な人工生命体の彼女を、生身で海底に放りこむという発想はどうなのか——あらためて那月の恐ろしさに戦慄を覚える古城である。

「それにな、わざわざそんな物騒な真似はせずとも、放っておけばいずれ〝棺桶〟はキーストーンゲートに戻ってくる。そのための第零層だろうが」

那月が、静かな口調に戻って言った。

第零層は潜水艇基地だ。分厚い金属製の床はおそらく開閉式。その下は、海へとつながっており、潜水艇を直接乗り入れることができる。人工島の住人は、誰一人として、その存在に気づかない。そして仮に絃神島が崩壊するような被害に遭ったとしても、海底に避難した潜水艇——〝咎神の棺桶〟は無事というわけだ。

それがキーストーンゲート第零層、そして〝咎神の棺桶〟の役割なのだ。

「潜水艇が戻ってくるのは、補給のため、ということか？」

古城が那月に訊き返す。どんな高性能な潜水艇でも、ずっと潜りっぱなしではいられない。燃料や食料、それに空気を定期的に補充する必要があるはずだ。

だが、那月は素っ気なく首を振る。

「違うな。準備が整ったからだよ」

「準備？」

なんのための、と古城は眉を寄せた。

那月は、ふふん、と冷淡に笑い、くるりと視線を背後に向ける。
「〝聖殲〟の準備だ。そうなのだろう――冥狼？」
「っ!?」
古城が驚いて身構えた。紗矢華も反射的に剣を抜く。リディアーヌが戦車のハッチを閉じて、臨戦態勢へと移行する。
紗矢華の人払いの結界を破って、姿を現したのは黒衣の青年だ。
彼の左手に握られているのは、両先端に穂先を持つ奇怪な黒い槍である。元獅子王機関の研究者にして、監獄結界からの脱獄囚。そして僵尸鬼――絃神冥駕だ。
「剣巫の少女はどこです、第四真祖？」
冥駕の口からこぼれだしたのは、どこか意外な言葉だった。彼が雪菜に興味を示したことなど、これまでほとんどなかったからだ。
「姫柊のことを言ってるのか……？」
どこか異様な冥駕の気配に、警戒しながら古城が訊き返す。昨夜、戦ったときと比べても、今の冥駕は明らかに様子が違っている。
戦闘で眼鏡を失ったせいで、僵尸鬼特有の虚ろな瞳が露わになっていた。古城の眷獣の攻撃を受けて、焼け焦げた黒衣もそのままだ。左手に握った槍からも、今は力を感じない。
だが、冥駕の異変はそれだけではなかった。古城には上手く言葉にできない。それでも冥駕

manga-zone.org

の内側で、なにかが決定的に変わったことだけはわかる。

「姫柊雪菜……そう、彼女です」

冥駕は、むしろ穏やかな表情で、雪菜の名前を口にした。

やはり彼は、雪菜に異様な執着を見せている。そのきっかけとなったのは、おそらく昨夜の戦闘だ。雪菜が見せた模造天使の力の片鱗――それが冥駕を苛立たせているのだ。

「あいつは、もう戦わない。おまえとは二度と会うことはねーよ」

古城が低い声で言い放つ。冥駕の目的がなんであれ、雪菜を彼と接触させるわけにはいかない。その前にここで冥駕を倒す――

紗矢華も同じことを考えたのだろう。銀色の長剣を洋弓へと変形させ、彼女はそこに呪矢をつがえた。獅子王機関の試作型制圧兵器――六式重装降魔弓の真の姿だ。自分が撃てる最大の攻撃を、いきなり冥駕に叩きこむつもりなのだろう。

「監獄結界からの脱獄囚――思い出したわ。この男をここで捕まえればいいのね」

紗矢華が呪矢で冥駕を狙った。六式重装降魔弓が生み出す巨大な衝撃波は、大規模呪術の触媒になるだけでなく、直接目標に叩きつけても圧倒的な威力を発揮する。冥駕の黒槍が、たとえ呪術を無効化しても、その衝撃波までは防げないはずだった。

「元獅子王機関だか僵屍鬼だかなんだか知らないけど、あたしの雪菜に指一本でも触れたら、呪殺して、斬殺して、射殺して、八つ裂きにして、灰にしてやるんだから！」

どこか狂気を感じさせる口調で、紗矢華がぶつぶつと呟いている。
そんな紗矢華を、冥駕が、瞳孔の開ききった瞳で見返した。
「逃げたのか……高次元存在に転移して消滅する前に……」
ギリ、と冥駕が奥歯を鳴らす。彼の全身に浮かび上がったのは、ぼんやりとした淡い輝きだ。
その輝きの正体は、冥駕の肌を埋め尽くす奇妙な紋様の羅列だった。
「そんなことが認められると思っているのかっ……！」
冥駕が感情を剝き出しにして咆吼する。その瞬間、紘神島が――否、世界そのものが大きく揺れた。冥駕の全身を包む輝きが明度を増し、人工島の大地へと広がっていく。
『ぬ!?』
予期せぬ現象に古城たちが戸惑う中、甲高く唸ったのはリディアーヌだった。有脚戦車の外部スピーカーをビリビリと震わせて、焦った声で警告してくる。
『彼氏殿、第零層の注水が始まったでござる！　それにネットワーク上に見慣れないデータが……なんと……この転送量は……!?』
「紘神冥駕、まさか、貴様――!?」
那月が手に持った扇子を一閃し、虚空から黄金の鎖を撃ち出した。
「疾く在れ、〝双角の深緋〟――！」
ほとんど同時に古城も動いていた。周囲に被害が及ぶことも忘れて、咄嗟に眷獣を召喚する。

「〝煌華麟〟！」

紗矢華が呪矢を放ったのは、その直後だ。

弾丸のように撃ち放たれた無数の鎖。呪矢が生み出す衝撃波。そして暴風をまとう双角獣の蹄が、それぞれ冥駕の立っていた場所を襲う。

大地をえぐり取るような、過剰な破壊力の集中砲火だ。僵屍鬼程度の肉体が、耐えられるような攻撃ではない。が、

「嘘……!?」

「冗談……だろ……!?」

紗矢華と古城が呆然と呟き、那月がチッと舌打ちした。

紘神冥駕は——いや、かつて冥駕だった存在は、無傷のままその場に立っている。

古城たちの攻撃は、彼の肉体に届いていない。防がれた、というよりは完全に無効化されたのだ。まるで彼への攻撃など、最初から存在しなかったというように。

紘神冥駕の存在は淡い光の粒子に包まれて、紘神島そのものを侵蝕し始めていた。

古城たちがこれまでに見たことのない種類の現象だ。攻撃魔術や呪術ではなく、もちろん通常の物理現象でもない。異境の侵蝕とも違っている。

ただ、その輝きに触れたものは、なにかが決定的に変わってしまうのだ。

同じ形でありながら、生者と死者が、異質な存在であるように——

「彼女が現れないというのなら、引きずり出して差し上げましょう――この世界そのものを変容させてでも！」

異質な存在と化した絃神冥駕が、狂気に満ちた声で宣言する。

それは、絶望の始まりを告げる言葉だった。

第四章 聖殲

The Sacred Genocide

1

キーストーンゲート外縁部に建つシティホテル――最高級スイートの応接室で、矢瀬顕重はその報告を聞いていた。

「〝棺桶〟が解放されただと……？」

『は、はい。五大主電脳一号機、二号機、四号機は設計最大稼働率を突破。三号機、五号機も稼働率上昇中。島内で大規模な〝聖殲〟反応を計測。発生源はキーストーンゲート第三階層、屋外イベントスペース――第零層の直上付近です！』

モニタ越しに叫ぶ研究員の顔には、隠しようもない恐怖の色が滲んでいる。人工島管理公社名誉理事――矢瀬顕重に長年仕え、絃神島の建造にも携わってきた彼らは、いわば顕重の忠臣とでも呼ぶべき腹心の部下たちだ。だからこそ彼らは怯えているのだ。〝棺桶〟が解放されたことの意味。それが絃神島にもたらす影響を誰よりも熟知しているがゆえに。

「絃神冥駕の仕業か。まさに飼い犬に手を噛まれた気分だな……冥狼め」

続々と送られてくる報告を眺めつつ、顕重は不機嫌に呟いた。〝棺桶〟の解放という言葉が意味するのは、キーストーンゲート第零層に到着した潜水艇〝咎神の棺桶〟が、絃神島島内のネットワークに接続されたということだ。

その結果として紘神島には、〝棺桶〟に封印されていた魔術プログラムが入力されることになる。かつて〝聖殲〟と呼ばれた魔術――各神カインによって創り出された神殺しの禁呪を、電子的に再現したプログラムが。

だが、顕重を不機嫌にしている問題は、〝棺桶〟の解放そのものではない。

たとえ〝棺桶〟が解放されても、それだけでは〝聖殲〟は発動しないからだ。

〝聖殲〟の発動に必要な条件はみっつ――ひとつは祭壇である紘神島の存在そのものであり、もうひとつは〝棺桶〟に封印されていた禁呪の解放だ。そして最後の鍵となるのは、〝聖殲〟発動の要であり制御ユニットでもある生贄、すなわち〝巫女〟の意志である。人間の限界を超えた天才的な電脳使い――〝カインの巫女〟を手懐けない限り、〝聖殲〟の起動はあり得ない。

そして、これまでに発見された唯一の〝カインの巫女〟の適格者――藍羽浅葱の両親は、すでに人質として顕重の監視下にある。藍羽浅葱を幽閉した〝棺桶〟との直通回線を使えるのも、顕重だけ。顕重以外の人間が、藍羽浅葱と交渉することはあり得ない。

なのに、紘神冥駕は〝聖殲〟を起動した。

それは冥駕が、なんらかの方法で、新たな〝巫女〟を手に入れたということでもある。

その事実が顕重を不機嫌にさせていた。決して起きてはならない事態なのだ。

「――お取りこみ中ですか、矢瀬会長。出直したほうがよろしいか？」

眉をひそめている顕重に呼びかけてきたのは、来客用のソファに座った異国人の男性だった。

年齢は四十代になるかならないかというあたり。人種的にはアジア系だが、白皙で、常に微笑んでいるような印象がある。

男の傍らに立っているのは、年齢不詳の童顔の女性だ。顔立ちはかわいらしいといえなくもないが、開ききらない瞼のせいで、どことなく眠そうな印象を受ける。やけにふわふわとした雰囲気の、とらえどころのない女だった。

「失礼した、レン総帥。お騒がせして恐縮だが、好機でもある。我らが再現した〝聖殲〟の力、ぜひその目でご覧いただきたい」

矢瀬顕重が椅子を回して、ソファに座る男に向き直った。壁面のモニターに表示されたのは、キーストーンゲート周囲の映像だ。その中の一部に、爆発らしきものが映っている。

「〝聖殲〟――咎神カインが、神々への叛逆と復讐のために引き起こした究極の秘呪ですね」

レンと呼ばれた男が、穏やかな口調で問い返した。

MAR総帥、シャフリヤル・レン――世界有数の多国籍魔導企業複合体マグナ・アタラクシア・リサーチ社の創設者にして筆頭株主だ。

「ですが、その力、いかにして証明するつもりです？」

シャフリヤル・レンの質問に、矢瀬顕重は、我が意を得たりとばかりに不敵に笑った。

「第四真祖が相手では不足かな？」

「焔光の夜伯……世界最強の吸血鬼、ですか」

レンが感心したように眉を上げる。矢瀬顕重は重々しく首肯して、
「然様。彼奴を監視するために、〝戦王領域〟からアルデアル公ディミトリエ・ヴァトラーが、〝滅びの王朝〟からは凶王子イブリスベール・アズィーズが派遣されている。彼らをまとめて殲滅してみせれば、我らが〝聖殲〟の正統性、信じざるを得ないのではないかね？」
「そうですね。仰るとおりです」
感情の読めない優しげな眼差しが、正面から顕重を見つめてくる。
「ですが、新たなる〝聖殲〟を引き起こして、あなたはなにを得るつもりです、矢瀬会長？」
ふ、と顕重は薄い唇を吊り上げ、
「欧州の〝戦王領域〟、中東の〝滅びの王朝〟、そして中米の〝混沌界域〟――これら夜の帝国に共通するものがなにか、貴殿にはおわかりだろう、レン総帥？」
「石油、天然ガス、稀少金属――豊富な地下資源、ということですか」
「ご明察だ」と顕重はうなずいた。「すべての魔族を滅ぼし、我らは夜の帝国に囚われた人々を解放する」
「そして、その土地の利権を手に入れる、と？」
揶揄するようなレンの言葉に、顕重は悪びれることなくうなずいてみせる。
「我が財団とあなた方ＭＡＲが手を組めば、実現の可能性は高いと思うが、どうかね？」
「興味深いお話ですね」

そう言ってレンは脚を組み替えた。そして顕重の背後へと視線を向ける。
「ですが、そのためには、〝聖殲〟があなたの制御下になければならないのでは？」
「どういう意味かね？」
「失礼。ですが、この島で起きている〝聖殲〟の担い手は、あなたの制御を離れているように思えたもので――」
涼しげに微笑みながらレンが指摘し、その直後、スイートの室内を奇怪な雑音が満たした。
眉を寄せて振り返ったのは、顕重だ。彼の背後の壁面モニターが、激しいノイズを映し出し、やがてそれは一人の少女の姿へと変わっていく。長い黒髪の美しい少女だ。
少女が身に着けているのは、古代の妖精を思わせる薄衣だけ。その袖や裾から伸びる彼女の四肢は、無惨な傷痕に覆われていた。ズタズタに引き裂かれた肉体を、無理やり継ぎ合わせたような壮絶な痕だ。
『ク……クク……ク……カ……ッ！』
その美しくも醜い少女が、モニターの中で荒々しく喘う。
その虚ろな瞳が見据えているのは、矢瀬顕重だ。
『愚か……愚かなり、欲深き簒奪者の末裔たちよ。そのような非道が叶うものか。〝聖殲〟の鍵はすでに我が手にあり。この忌まわしき島とともに沈むがいい！』
「報告にあった〝アベルの巫女〟……か」

顕重が、吐き捨てるように呟いた。ライティングデスク上の端末に向き直り、青ざめた顔の研究員を再び呼びつける。

「〝棺桶〟の状況はどうなっている？」

『通信、途絶しています。〝カインの巫女〟の反応、ありません。五大主電脳は依然、限界領域で稼働中――外部から乗っ取られた状態です』

悲鳴にも似た研究員の言葉に、顕重が眦をひくつかせる。

「貴様が〝聖殲〟を制御しているのか、死に損ないめ。絃神冥駕を唆したのも貴様だな」

『ク……カッ……正統なる支配地を奪われる屈辱、思い知れ――咎神の末裔よ！』

呪詛にも似た宣戦布告の言葉を残して、少女の姿は消滅した。

激しい雑音が次第に遠ざかり、モニターの映像が回復していく。亡霊め、と苛立たしげに頬を歪めて、顕重はモニターを睨めつけた。厳重に防護された極秘回線に割りこんで、〝アベルの巫女〟は、顕重に呪いの言葉を残して行ったのだ。

『会長、我々は、どうすれば……このままでは……』

「うろたえるな。都市管理室に演算ユニットの奪還を急がせろ。特区警備隊は全力で〝アベルの巫女〟の捜索にあたれ。それから魔導打撃群の司令に通達だ」

怯える研究員を一喝して、顕重はデスクの前に座り直した。シャフリヤル・レンの冷ややかな視線を感じながら、感情を殺した声を絞り出す。

「――絃神冥駕を、殺せ」

2

禍々しい深紅の輝きが、絃神冥駕の全身を覆っていた。

微細な光の粒子の内側で、明滅しているのは太古の魔法文字だ。その深紅の粒子の一粒一粒が、それぞれ強大な呪力を秘めた魔法陣なのだろう。いまだかつて古城が遭遇したことのない、圧倒的な魔術だった。しかも深紅の光の粒子は、時間とともに密度と輝きを増していく。

そしてなによりも恐ろしいのが、それほどの魔力を放っていながら、冥駕の周囲が静けさに満ちていることだった。魔力の波動も、熱も振動も、気配すらも感じない。ただ圧倒的な静寂だけが空間を満たしている。そのせいで冥駕の限界が見えない。底の見えない深い穴を、真上からのぞきこんでいるような不安がある。

「姫柊を引きずり出す……だと……そんなことさせるかよ……っ！」

カラカラに干涸らびた喉で、古城が叫んだ。

怒りよりも恐怖に衝き動かされて、古城は無制限に魔力を解放する。天使化が進行している雪菜を、今の冥駕と戦わせるわけにはいかない。絶対に。そう、絶対にだ。

冥駕が放つ深紅の輝きは、それほどまでに、どうしようもなく危険な存在なのだ。理屈でも

直感でもなく、第四真祖としての血の記憶が、それを古城に伝えてくる。

「待て、暁古城！　今のやつには――」

攻撃態勢に入った古城を見て、那月がハッと表情を硬くした。だが、古城はすでに己の眷獣へと攻撃の指示を終えている。緋色の双角獣が放ったのは、高密度に凝縮された荒れ狂う大気の弾丸だ。

「〝双角の深緋（アルナスル・ミニウム）〟ッ――！」

「――――」

ふ、と冥駕は無言で笑ったようだった。彼が頭上に掲げた黒槍が、深紅の粒子をまとって、古城の眷獣の攻撃を――暴風の弾丸を真正面から受け止める。

冥駕の眼前で陽炎のように大気が揺らぎ、そして、それが眷獣の攻撃が引き起こした変化のすべてだった。第四真祖の眷獣の攻撃は、冥駕の前髪一本動かすことすらできなかったのだ。

古城はその光景を呆然と見つめた。

動揺したというよりも、なにが起きたのか理解することが出来ずにいた。たとえ冥駕の黒槍が眷獣の魔力を無効化しても、すでに撃ち放たれた物理的な衝撃波までは、打ち消すことができないはずなのだ。

なのに光の粒子をまとったまま、冥駕は酷薄に笑っている。驚く古城たちを哀れむような、優しくも冷淡な笑顔だった。

「それで終わり、ですか。では、こちらから行きますよ――〝女教皇〟よ」

右手に槍を構えた冥駕が、空いた左手を無造作に掲げた。彼の手の中に握られていた紅い粒子が、弾丸ほどの大きさの正八面体――魔術的に風の属性を持つ塊へと変わる。

直後、その光り輝く塊が、古城に向かって音もなく飛んだ。

文字どおりの弾丸と化して、古城めがけて撃ち放たれたのだ。発射された弾丸の数は十数発。吸血鬼の反応速度をもってしても、回避できる速度と数ではない。

「くそっ……疾く在れ、〝神羊の金剛〟！」

古城はほとんど反射的に、新たな眷獣を喚び出していた。出現したのは、美しい金剛石の肉体を持つ巨大な大角羊だ。

眷獣がまとう無数の宝石の結晶が、古城の前面に集まり、強固な楯を形作る。

〝神羊の金剛〟の正体は、いかなる攻撃にも傷つけられることのない金剛石の神羊。自分を傷つけた者にその傷を返す。吸血鬼の不死の呪いを象徴する眷獣なのだ。が――

「なに――!?」

冥駕の深紅の弾丸に触れた瞬間、古城の絶対無謬の防御壁は、脆い砂糖細工のように、音もなく粉々に砕け散っていた。圧倒的な魔力で押し切られたわけでも、古城の魔力が無効化されたわけでもない。冥駕の深紅の弾丸は、まるで最初から存在しなかったかのように、宝石の壁を消し去ってしまったのだ。

そして無防備な姿で立ち尽くす古城へと、残った弾丸が殺到してくる。
その弾丸を防いだのは、斬撃の軌道が生み出す不可視の障壁だった。
「暁古城、下がりなさい！」
紗矢華の長剣が生み出した空間の断層が、深紅の弾丸を呑みこんで消滅させた。敵の攻撃に直接触れない〝煌華麟〟の空間断層は、あの弾丸の影響を受けないのだ。目標に接触することが、弾丸の能力の発動条件なのだろう。
「大丈夫なの、暁古城？」
剣を上段に構え直して、紗矢華が、古城を庇いながら訊いてくる。
「ああ、なんとかな。助かったぜ、煌坂。ありがとな」
古城は安堵の息をつきながら、感謝の言葉を口にした。素直に礼を言ってくるとは思っていなかったのか、紗矢華が、面喰らったように唇をもにょもにょとさせて頬を赤らめる。
だが実際、紗矢華に護ってもらわなければ、古城は確実に冥駕の攻撃を喰らっていたはずだ。いかに不死身の真祖といえども、あの弾丸を撃ちこまれて無事に済むかどうかはわからない。
「けど、なんなんだ、あいつの力……？　俺の眷獣の防御を一瞬で撃ち抜きやがったぞ？」
悠然と近づいてくる冥駕を睨んで、古城がうめく。敵の能力の正体がわからない以上、迂闊に攻撃を仕掛けることはできない。このままでは一方的に追い詰められていくだけだ。
「〝聖殲〟だ」

古城の疑問に答えてきたのは、那月だった。

立ち眩みに似た空間の揺らぎが古城たちを包みこみ、次の瞬間、古城たちは、冥駕から四、五十メートルほど離れたビルの屋上に移動していた。冥駕の攻撃から逃れるために、那月が、空間転移で距離を取ったのだ。

「〝聖殲〟……？」

突然の移動と、思いがけない那月の言葉に、古城と紗矢華が同時に振り返る。

もちろん古城たちも〝聖殲〟の名前は知っている。だが、それはもっと大規模な、歴史的な事件や、天災のようなものだと思っていたのだ。

紘神冥駕が操る深紅の輝きは、それに比べて、あまりにも静かだ。単なるめずらしい魔術としか思えない。

だがその静かで奇妙な能力が、第四真祖の眷獣の力を、完全に封じこめたのだ。

「咎神カインが創り出した、神を殺すための禁断の魔術……そして、その禁呪が引き起こした史上最悪の大虐殺――それが〝聖殲〟と呼ばれるものの正体だ。暁牙城の受け売りだがな」

恐怖を圧し殺したような静かな声で、那月が説明を続けてくる。

「暁古城のお義父さま……？」と小さく息を呑んで驚いたのは紗矢華だ。

なにを言ってるんだこいつは、と古城が顔をしかめる。古城の父親、暁牙城は、お義父さまなんて上等なものでは断じてない。クソ親父という表現で十分である。だがしかし、いちおう

考古学者を名乗る彼の専門分野こそ、〝聖殲〟にまつわる伝承の解明だった。

「暁古城、絃神冥駕には絶対に近づくな。おまえの力でもやつには勝てない。やつはおまえの攻撃を防いだわけじゃない。存在しないことにしたんだ」

「魔力を無効化したってことか？　仙都木阿夜の闇誓書みたいに……？」

いつになく真剣な那月の警告に、古城が困惑して訊き返す。

いや、と那月は首を振り、

「違う。阿夜は闇誓書の力を使って、〝聖殲〟の真似事をしていただけだ。あれは、最初から矛盾を抱えたあいつの自己満足だよ。この世界を魔力で上書きして、魔力の存在しない世界を一時的に創り出していたのだからな。絵画をインクで塗りつぶしても、その下の絵が消えてしまったわけではないだろう？」

「あ、ああ……」

古城は曖昧にうなずいた。たしかに闇誓書による世界の改変は、月齢や星座の配置に頼った一時的な現象でしかなかった。一度は消滅させられたはずの古城たちの魔力はすぐに復活し、その結果、仙都木阿夜は敗北している。

「だが、〝聖殲〟は世界そのものを変容する。喩えるなら絵画を切り刻んで焼き捨てることも、美術館ごと消し去ることすらできるというわけだ」

那月が無表情にそう言った。やけに淡々としたその言葉が、逆に真実味を感じさせる。

「まさか……俺がグレンダと見た異境の廃墟は……」

「そうやってカインに破壊され、死に絶えた世界のひとつかもしれんな」

古城の呟きに、那月がうなずく。破壊された無人の廃墟。そして世界を埋め尽くす虚無。古城が目にした異境の世界は、〝聖殲〟の残滓のようなものだったのかもしれない。無制限に暴走した〝聖殲〟の力は、世界そのものを消し去ることすらできるのだ。

「だけど、世界を変容させる魔術なんて、人間が扱い切れるものなのか？」

純粋に疑問を覚えて古城が訊き返す。世界そのものを変容させるという〝聖殲〟の能力は、明らかに個人が制御可能な情報容量を超えている。複雑な魔術儀式もなしに、そんな攻撃を乱発できるとは思えない。

那月は溜息混じりにうなずいて、

「もちろん扱い切れないさ。だからやつらは、この絃神島という祭壇と、〝カインの巫女〟を必要としたんだ。魔力の供給源と、魔術の演算装置としてな――」

彼女のその言葉が終わるより早く、絃神冥駕が新たな攻撃を発動していた。

深紅の光の粒子を操り、冥駕が空中に生み出したのは、バスケットボールほどの大きさの正六面体だった。魔術的な意味で土の属性を持つその立体を、冥駕は、古城たちがいるビルをめがけて、砲弾のほうに撃ちこんだのだ。

激突した砲弾は光の粒子を撒き散らし、ビル全体を深紅に染めていく。古城たちの足下が、

突然、ボロボロと崩壊を始めたのはその直後だ。
ビルの建物が一瞬のうちに、塩の塊へと変化させられたのだ。純白の塩の結晶を撒き散らしながら、ドウ、と巨大なビルが崩壊していく。
「それでも、この程度の力を引き出すのが限界のようだがな――」
再び地上へと空間転移しながら、那月が他人事のようにそう言った。
「ぐおっ!?」
「この程度って……!?　十分、危険すぎるんだけど……！」
古城は硬いコンクリートの地面に投げ出され、紗矢華が、そんな古城の上に、スカートの裾を押さえながら降ってくる。げほっ、と呼吸を詰まらせる古城を、那月が冷ややかに振り返り、
「気をつけろ。やつは、物理法則も魔術の原則も無視して攻撃してくるぞ」
「気をつけろって、そんなもん、どうやって警戒すれば――」
そう言って顔を上げた古城の目に、飛来する深紅の弾丸が映る。冥駕が放った無数の弾丸が、深紅の粒子を撒き散らしながら降ってきたのだ。
「くっ……〝煌華麟〟――！」
飛び出した紗矢華が長剣を一閃して、疑似空間断層の障壁を展開する。その不可視の障壁が、冥駕の弾丸すら防ぐことは証明済みだ。が、
「え!?」

紗矢華の行動を予期していたかのように、飛来する弾丸の軌道が変化した。深紅の弾丸は、それぞれが物理法則を無視した不自然なカーブを描き、背後から紗矢華を襲ってくる。

紗矢華の長剣が生み出す疑似空間断層は、強力だが、一方向にしか展開できないという欠点を抱えている。すでに前方に障壁を展開した紗矢華には、背後から飛来する弾丸は防げない。

「煌坂！」

動けない紗矢華の名を呼んだのは、遅れて立ち上がった古城だった。横っ飛びに突っこんで、突き飛ばすような形で紗矢華を庇う。そんな古城の全身を、深紅の弾丸は容赦なく襲った。右脚と脇腹、肩と背中――全身四カ所を撃ち抜かれて、古城は為すすべもなく転倒する。

「嘘!?　暁古城！」

古城に救われたことに気づいた紗矢華が、血まみれの古城に気づいて絶叫した。かろうじて動かせる左脚だけで、体重を支えて古城は立ち上がり、

「大丈夫。かすり傷だ……この程度なら……すぐに……」

「馬鹿！　あいつの攻撃があなたの眷獣を無効化するってことは、吸血鬼の治癒能力も無効化されるかもしれないのよ！」

「そう……みたいだな……」

大量にこぼれ落ちる血液とともに、己の体力が流れ出していくのを古城は自覚する。魔族特有の生命力や、回復力が発動する気配がない。深紅の弾丸で撃ち抜かれた部分から、ごっそり

と異能の力が奪われているのだ。
ビルの崩壊とともに舞い上がった塩の結晶が、砂塵のように古城たちの視界を覆っている。
そのザラザラとした霧の向こうから、深紅の輝きに包まれた冥駕が現れる。
「さて……そろそろ姫柊雪菜を呼び寄せる気になってくれましたか？」
深紅の弾丸を掌の上で弄びながら、冥駕が穏やかに訊いてくる。
その言葉に紗矢華が激昂した。雪菜に執着する冥駕の態度が、彼女の逆鱗に触れたのだ。
「そんなわけないでしょ！　あんたなんかが雪菜の名前を口にするのは十年早いわよ！」
「よせ、煌坂――！」
古城が彼女を制止する前に、紗矢華は長剣を翻して冥駕へと斬りかかっている。
冥駕が深紅の弾丸を撃ち出した。複雑な軌道を描きながら、高速で飛翔する正八面体の塊だ。
紗矢華はそれをギリギリまで引きつけて、〝煌華麟〟で撃ち落とす。神業とでもいうべきその超絶技巧に、冥駕が賛嘆の微笑を浮かべた。
「疑似空間断層ですか……さすがは舞威媛。いい腕だ。ですが、近づき過ぎです――」
「え……？」
冥駕に肉薄していた紗矢華の姿勢が、ぐらりと突然、大きく崩れた。全身の力を失って、その場にふらふらと倒れこむ。それでも必死に立ち上がろうとする紗矢華だが、ふらつくだけで真っ直ぐに立っていられない。三半規管が狂わされ、目の焦点も合っていなかった。

「まさか……空気に、毒を……」

紗矢華が苦しげなうめきを洩らす。冥駕を取り巻く深紅の粒子は、世界を自在に変容させる〝聖殲〟の輝きだ。巨大なビルすら塩の柱に変えるその力をもってすれば、大気を有毒ガスに変化させることも容易だろう。

「あなたの悲鳴を聞けば、姫柊雪菜も出てきますかね……？」

膝を突く紗矢華を見下ろして、冥駕が無造作に黒槍を突きつける。異形の槍が狙っていたのは、紗矢華の右肩だ。一息にとどめを刺すのではなく、四肢の自由を奪って、苦しみを長引かせるつもりなのだろう。

「っ！」

恐怖に表情を引きつらせながらも、気丈に冥駕を睨みつける紗矢華。

「絃神冥駕っ！　てめえ……！」

古城は、傷ついた身体を引きずって立ち上がり、冥駕に殴りかかろうとする。そんな古城のすぐ背後で、ジャゴッ、と重厚な装填音が鳴り響いた。

『彼氏殿、伏せるでござる！』

聞こえてきたのは、野太く変調されたリディアーヌの声だ。呪術迷彩を解除して姿を現した彼女の有脚戦車が、搭載された武装を一斉に開放する。

脚部の大口径対人機銃と背面からの小型ミサイル。音響手榴弾とワイヤレス電気銃。主砲か

ら撃ち出されたのは暴徒鎮圧用のゴム散弾だ。実体をともなうそれらの攻撃は、冥駕の黒槍でも防げない。

冥駕は深紅の粒子を操って、自らの周囲に障壁を展開した。正十二面体型のその障壁が、リディアーヌの砲撃を受け止める。

「対魔族用の有脚戦車……なるほど。魔力を伴わない物理攻撃なら、〝聖殲〟の世界変容に対抗できると思いましたか？　無駄なことを――」

冥駕が蔑むように呟いた。絶え間なく続くリディアーヌの砲撃は、しかし冥駕には届かない。真紅の障壁に阻まれて、ことごとく撥ね返されていく。

正十二面体型の障壁を展開したまま、冥駕は新たな弾丸を創り出す。手榴弾ほどの大きさの、正六面体の弾丸だ。ビルを塩の柱へと変えたその弾丸は、リディアーヌの戦車の装甲をも容易く無力化するだろう。だが、その弾丸が放たれる前に、ギンッと音を立てて大気が裂けた。

「いや。そうでもないさ――」

「なにっ!?」

轟音とともに冥駕の障壁に激突したのは、長さ数十メートルにも達する黄金の鎖だ。巨大な騎士の幻像が、那月の背後に出現して、黄金の鎖を鞭のように振るっている。那月が契約した悪魔の眷属――〝空隙の魔女〟の守護者である。

リディアーヌの一斉砲撃を受け止めていた冥駕には、その攻撃を避けられない。予期せぬ方

角からの衝撃を喰らって、冥駕が障壁ごと吹き飛ばされる。
「煌坂、無事か？」
その間に古城が、倒れている紗矢華を回収する。彼女の周囲に立ちこめているのは、ツンと鼻を衝く強烈な異臭だった。冥駕が創り出した有毒な大気が、まだ完全には消えていないのだ。
「リディアーヌ、煌坂を頼む！」
『承知！』
動けない紗矢華を副腕で抱き上げて、リディアーヌは戦車を後退させた。一斉砲撃を続けたせいで、有脚戦車はかなりの弾薬を消耗している。これ以上の戦闘継続は、困難だと判断したのだろう。
『彼氏殿は――？』
「俺はいい。那月ちゃんを援護する。おまえらは先に安全な場所まで下がってろ！」
リディアーヌにそう言い残し、古城はよろよろと歩き出す。
那月の攻撃は続いていたが、すでに攻守は逆転していた。彼女の魔具〝呪いの縛鎖〟の威力をもってしても、冥駕の障壁は破れない。逆に冥駕の放った真紅の弾丸を、那月は空間跳躍でかろうじてかわし続けているような有様だ。
それでも那月の表情には余裕があった。
「暁古城、下だ」

那月がなんらかの魔術を使って、古城の耳元に直接語りかけてくる。

「下……？」

古城は困惑して、自らの足下に視線を向けた。そこにあるのは、なんの変哲もないコンクリートの地面である。キーストーンゲートの第三階層の屋外広場。その下にあるのは、無人の駐車スペースと資材倉庫だ。そして――

「そうか！　疾く在れ、〝甲殻の銀霧〟！」

残された魔力をかき集め、古城が新たな眷獣を召喚する。銀色の濃霧に包まれた、幻影にも似た甲殻獣だ。その巨大な前肢が広場を殴りつけ、コンクリートの地面を霧へと変える。

文字どおりに地面が霧散したことで、古城の身体は地下へと転落した。その下に見えてきたのは、金属隔壁に覆われた地下空洞だ。キーストーンゲート第零層。海水をたたえたその空間に、以前には存在しなかった物体が浮かんでいる。

群青色の金属殻に覆われた流線型の艦船。〝咎神の棺桶〟と呼ばれる潜水艇だ。

「これが狙いですか、〝空隙の魔女〟……やはりあなたが最大の難敵か！」

真紅の輝きを撒き散らしながら、冥駕が古城を追って飛び降りてくる。

潜水艇に幽閉された浅葱を、古城たちが取り戻せば、冥駕は〝聖殲〟の力を失う。それを恐れての行動に違いなかった。やはり浅葱は〝棺桶〟の中に囚われているのだ。

「こいつが〝咎神の棺桶〟……入り口は――!?　そこか――！」

潜水艇の船体に跳び乗って、古城がハッチのほうへと走りこむ。それを見た那月が、ハッと表情を硬くして、

「待て、暁古城！　不用意に近づくな――！」

「え……？」

潜水艇のハッチに触れた古城の周囲が、突然、深紅の輝きに包まれた。全身を貫く激痛に、古城が声もなく絶叫する。古城の身体を取り囲んでいたのは、正四面体の檻だった。炎の属性を持つその立体が、灼熱の監獄と化して古城を苛んでくる。結神冥駕は古城の行動を見越して、事前に罠を仕掛けておいたのだ。

「くそ――！　疾く在れ、〝龍蛇の水銀〟！」

激痛に呼吸を見出しながらも、古城は眷獣を喚び出した。第四真祖の三番目の眷獣――水銀色の鱗を持つ双頭の龍は、空間そのものをえぐり取る能力を持っている。その能力を利用して、冥駕の罠を破壊しようとしたのだ。

だが、次元喰いの眷獣の顎をもってしても、正四面体の炎の檻は砕けない。逆流してきた深紅の粒子を浴びて、逆に古城の眷獣のほうがダメージを受けている。

「く……そ……！」

古城が力尽きたようにその場に倒れこむ。新たな眷獣を喚び出すには、魔力が足りない。冥駕の攻撃で受けたダメージが大きすぎる。

「まずは一人――」

動きを封じられた古城をめがけて、冥駕が新たな弾丸を撃ちこんでくる。炎の属性を持つ正四面体の弾丸。それらが同時に二十発近く。炎の檻ごと古城を撃ち抜こうと射出され――

「――〝雪霞狼〟！」

それらを叩き落としたのは、上空から舞い降りてきた小柄な少女。

そして彼女が振り抜いた、眩い銀光の一閃だった。

3

ありとあらゆる結界を斬り裂く破魔の槍が、古城を捕らえていた炎の檻を粉砕する。そして彼女は、銀色の槍を構えたまま、古城の傍らへと音もなく着地した。

冥駕が撃ち出した真紅の弾丸は、銀色の槍に阻まれて古城の身体には届いていない。世界を変容する〝聖殲〟の力を、神格振動波の輝きが相殺しているのだ。

「無事ですか、先輩」

心配そうにのぞきこんでくる雪菜を、古城は絶句して見つめていた。驚きと混乱で言葉が出ない。何度も激しく咳きこんで、ようやくかすれた声を出す。

「姫柊!?　おまえ、なんで――!?」

このまま〝雪霞狼〟を使い続ければ、自分が消滅することを知っているのか。

縁堂縁は、どうして止めなかったのか――

古城が抱いたそれらの疑問は、突然の荒々しい哄笑にかき消される。

「ハハッ……ハハハハハハッ！　あなたのほうから出てきてくれるとは……礼を言いますよ、姫柊雪菜。おかげでずいぶん手間が省けました……クク！」

普段の冷静な彼とは別人のような、狂気の笑みを浮かべて、冥駕が叫ぶ。その殺気に満ちた視線に逆らうように、雪菜が銀色の槍を向けた。

「姫柊、気をつけろ。こいつの攻撃は、世界の法則そのものを書き換える。おまえの槍でも防げないかもしれない……！」

「……はい。わかっています」

苦しげに警告する古城の言葉に、雪菜がゆっくりとうなずいた。彼女は一瞬だけ古城を振り返って微笑み、そしてなにかを吹っ切ったように目を閉じる。

「それでも――！」

雪菜の全身を、青白い輝きが染めた。虚空に描き出されたのは、雪霞狼の表面に浮き上がるものと同じ、複雑な魔術の紋様だった。それはあたかも翼のような姿となって、雪菜の背中から広がっていく。

「姫柊……！」

雪菜が撒き散らす膨大な霊力が、古城の肌をジリジリと焼く。その感覚を古城は知っていた。かつて模造天使と化した叶瀬夏音との戦いで浴びた、高密度の神気によるダメージだ。

「この神気……やはり、そういうことか……！」

笑い続ける冥駕の瞳に、暗い憎悪の光が宿る。彼が周囲に生み出したのは、数え切れないほどの深紅の弾丸だ。それらが一斉に撃ち放たれて、四方から雪菜へと殺到する。

「認めない……あなたが冬佳の領域に踏みこむことなど、あってはならないことだ……新たな〝雪霞狼〟の継承者のために、冬佳は使い捨てにされた――そんなことが認められるかッ！」

「くっ……!?」

押し寄せる真紅の弾丸が、雪菜の翼を侵蝕していく。冥駕が操る〝聖殲〟は、神を殺すために生み出された禁呪だ。たとえ完全な模造天使であっても、その攻撃は防げない。雪菜がかろうじてそれに耐えていられるのは、冥駕の力も、いまだ完全ではないからだ。

「南宮先生！　今のうちに藍羽先輩の救助を――！」

冥駕の攻撃を懸命に凌ぎながら、雪菜が那月に向かって叫ぶ。

「私に指図をするな、剣巫」

どいつもこいつも、と不機嫌そうにうなりながら、那月が古城の隣に着地する。

潜水艇のハッチに仕掛けられていた冥駕の罠は、雪菜によってすでに解除されていた。〝棺桶〟内部の結界は生きているから、空間転移での侵入はできないが、ハッチを開けて中に入る

ことは可能なはずだ。

だが那月は、かすかに眉をひそめたきり、畳んだ扇子を握り締めて動きを止める。

彼女が見つめる闇の中に浮かび上がったのは、うっすらと輝く奇妙な影だ。〝聖殲〟の光の粒子が集まって、やがてそれは少女の姿へと変わった。全身に引き裂かれたような傷痕を持つ、醜くも美しい少女だった。

『やらせぬ……！』

半透明に輝く亡霊めいた少女が、那月に向けて弾丸の雨を放った。冥駕が操っているのと同じ、〝聖殲〟の輝きで作られた弾丸だ。

「なに……こいつは……!?」

至近距離から放たれた少女の攻撃を、那月は回避しきれない。無数の弾丸を間近で浴びて、那月の小柄な身体が吹き飛んだ。砕け散った扇子の破片がバラバラと落下し、豪奢なドレスの切れ端が宙に舞う。

「那月ちゃん――!?」

撃ち倒された那月を凝視して、古城が絶叫した。

ハハッ、と歓喜の声を上げたのは絃神冥駕だ。

「感謝しますよ、〝女教皇〟――」

亡霊めいた少女を礼賛しながら、冥駕が黒槍を一閃した。その穂先から撒き散らされたのは、

霊力を無効化する零式突撃降魔双槍の闇色の薄膜だ。

「あっ――」

闇色の薄膜に斬り裂かれて、雪菜の翼が消滅する。そこに降りそそいだのは、深紅の弾丸の雨だった。雪菜は〝雪霞狼〟で迎撃するが、弾丸の数が多すぎた。神気の加護を失った彼女は、冥駕の手数に押し負けて劣勢になっていく。

「くそ！　疾く在れ、水精の――」

焦燥に衝き動かされた古城が、新たな眷獣を召喚しようとする。それに素早く反応したのは、冥駕だった。

「邪魔だ！」

召喚直前の無防備な古城を狙って、冥駕が深紅の弾丸を放つ。異能の力を奪う正八面体の弾丸は、古城の左肩と腹部を正確に貫いた。

「先輩――!?」

血飛沫を散らして倒れる古城の姿に、一瞬、雪菜の意識が逸れる。それは致命的な隙だった。雪菜が放つ神気を、闇色の薄膜で斬り裂きながら、冥駕が黒槍を叩きつけてくる。

「終わりです、姫柊雪菜！」

霊力を打ち消された雪菜では、僵尸鬼である冥駕の腕力に対抗できない。冥駕の黒槍に〝雪霞狼〟が弾かれ、防御が崩れた雪菜のガラ空きの喉元へと、黒槍のもう片方の穂先が迫っ

ていく。そして、

「いいえ、まだです――」

その瞬間、世界から音が消えた。時間が静止したかのような、一瞬の静寂。

激しい雑音とともに、真っ白な静寂は撃ち破られ、次の瞬間、冥駕の身体は弾かれるように後方へと舞っていた。未来視の能力を持つ雪菜ですら認識できない一瞬の出来事だ。雪菜を攻撃していたはずの冥駕の全身に、いつの間にか九発もの銃弾が叩きこまれている。

「絶対先制攻撃の権利……だと!?」

常人ならば即死するほどのダメージを負いながら、冥駕がゆっくりと立ち上がる。その唇からこぼれだしたのは、どろりと濁った鮮血と、低く響く呪詛の言葉だった。

「生きていたのか、〝静寂破り〟ッ……！」

冥駕の全身から深紅の粒子が噴き出した。これまでとは比較にならないほどの、膨大な数の光の弾丸を、怒りにまかせて周囲一面に撒き散らす。姿の見えない〝静寂破り〟を、無差別攻撃で燻り出そうとしたのだ。

炎の嵐が、第零層の潜水艇基地を満たし、砕け散った金属隔壁の破片が、刃となって吹き荒れた。しかし敵を倒したという手応えは伝わってこない。

「逃げられましたか」

爆煙が収まるのを待って、冥駕が静かに嘆息する。

重傷を負った暁古城や、姫柊雪菜の姿も消えていた。そちらはおそらく南宮那月の仕業だろう。冥駕が〝静寂破り〟に気を取られている間に、空間転移で逃げたのだ。

「面倒ですが、まあいいでしょう。滅ぼすべき相手は、もう一人いる――」

そう言って冥駕は頭上へと目を向けた。いまだ消え残る爆煙を透かして、屹立する巨大な建物の姿が浮かんでいる。

冥駕の背後に浮かび上がっていた傷だらけの少女が、クカッと笑った。

それは復讐に取り憑かれた者だけが浮かべる、暗く歪んだ笑みだった。

4

硬い地面の上に乱暴に投げ出されて、古城は短く悲鳴を上げた。

運河沿いの小さな公園だ。対岸には、黒煙を噴き上げているキーストーンゲートが見える。周囲の景色を見るに、おそらく人工島北地区の南岸だろう。キーストーンゲートからは直線距離で約二キロといったところだ。

「どうにか生きているようだな、暁古城」

仰向けに倒れている古城を見下ろし、那月が傲然と訊いてくる。冥駕が無差別攻撃を始める直前、古城を連れ出してくれたのは、やはり彼女だったのだ。

「ああ、なんとかな」

古城は弱々しく呟いて、血まみれの身体をゆっくりと起こした。冥駕の弾丸に撃ち抜かれた傷は、想像していたよりもずっと深い。おまけに吸血鬼の治癒力をもってしても、異様に回復が遅かった。やはり〝聖殲〟の力によって、吸血鬼の能力が阻害されているのだ。

今はまだ第四真祖としての圧倒的な魔力で、無理やり〝聖殲〟の効果に抗っているが、これ以上あの弾丸を喰らったら、どこまで保つかわからなかった。神をも殺す禁断の魔術という触れこみも、あながち誇張ではないらしい。

「姫柊も無事か？」

古城は視線を巡らせて、自分を支えてくれている雪菜を見上げた。見たところ雪菜に外傷はないが、傍目にもはっきりわかるほど彼女は消耗している。冥駕との戦闘の中で、神気を使った影響なのは間違いなかった。しかし雪菜は、それを隠すように強気に微笑んで、

「はい。わたしは大丈夫です。でも、最後にわたしを助けてくれたのは――」

「〝静寂破り〟……だろうな。あの女なら、自力で脱出したと思いたいところだが……」

古城の代わりに那月が答える。その声は、心なしか普段よりも頼りなく聞こえた。まるで、自分には彼女を助ける余裕がなかった、と告白しているようにも感じられた。

そのときになって古城はようやく、彼女が負傷していたことを思い出す。
「那月ちゃん……その傷は……」
「問題ない。この身体はしょせん仮初めの器だ」
そう言って那月は、ゆるゆると首を振る。彼女の負傷は、ある意味では、古城以上に酷いものだった。目立つ出血こそないものの、ドレスの裂け目からのぞく肌には深い亀裂がいくつも穿たれ、左腕はだらりと力無くぶら下がっている。亡霊めいた傷だらけの少女に撃たれた傷だ。
「だが、さすがにこれでは全力は出せんな。〝アベルの巫女〟め。やってくれる」
那月は不機嫌そうに唇を曲げ、ぎこちない動きで左腕を押さえた。
那月の本当の肉体は、監獄結界と呼ばれる彼女の夢の中の異世界で、今も眠り続けている。現実世界にある那月の身体は、彼女が魔力で操っている分身——人形だ。
魔力で創り出した分身とはいえ、それが破壊されてしまえば、那月は現実世界では動けない。分身体が受けたダメージによって、少なからず那月の戦闘能力は失われているのだ。さすがの彼女も、今の状態では、正面から冥駕たちと戦うのは困難だろう。
だからといって、那月を責めることはできない。
あの亡霊めいた少女の唐突な出現は、まったく予測不能な出来事だったからだ。
「アベルの……って、あの幽霊みたいな女のことか？」
戸惑いながら訊き返す古城に、ハッ、と那月は冷たく笑ってみせた。

「幽霊とは、言い得て妙だな。あの女は、かつての〝聖殲〟の生き残りだ。あの女の本体は、とっくの昔に死んでいるのだから、生き残りというのも妙な話だが」

「残留思念……ということですか？」

雪菜が驚いたように目を細める。那月は小さくうなずいて、

「正確には、残留思念の染みついた死体だな。絃神島に密輸入されたという報告があって、攻魔局で行方を追っていたんだが、絃神冥駕の背後にいる連中が押さえていたわけか」

「じゃあ、今、〝聖殲〟を制御しているのは――」

「ああ。藍羽浅葱ではなく、あの女だ。もしも正統な〝カインの巫女〟である藍羽が、演算を担当していたのなら、〝聖殲〟は、この程度の規模では済まないだろうからな」

傷ついた自らの肉体を見下ろし、那月は自嘲するように笑った。

「この程度の規模でも、十分厄介に思えるけどな」

古城は頬杖を突きながら溜息を洩らす。冥駕が操る〝聖殲〟の世界変容は、個人が操る力としては、馬鹿馬鹿しいほどの威力を持っていた。建物を塩の柱に変え、世界最強の吸血鬼の眷獣を無力化する――禁呪の名に相応しいデタラメな魔術だ。

しかし那月の言葉が真実ならば、本来の〝聖殲〟は、今よりも遥かに巨大な影響力をもっているということになる。だとすればそれは、この絃神島を――あるいは世界をも滅ぼしかねない恐るべき能力だった。あの古代兵器や〝賢者の霊血〟ですら、〝聖殲〟の前にはちゃちな

子どもだましに思えてくる。

「過去に一度、〝聖殲〟に巻きこまれて命を落としたあの女は、世界の変容に対して強い抵抗力を持っている。伝染病に対する、免疫のようなものだな。正統な〝カインの巫女〟ではないにもかかわらず、どうにか〝聖殲〟を制御できているのは、そのためだ」

「〝アベルの巫女〟……って呼ばれてるのは、そういう理由か」

淡々とした那月の説明に、古城が苛立った声を出す。

「結局、〝聖殲〟ってのは、いったいなんなんだ？　絃神千羅だかなんだか知らねーが、そいつは、なんでそんなものを再現しようとした？」

「〝聖殲〟について知りたいのなら、専門家に訊いてみたらどうだ？」

古城に睨めつけられた那月は、どこか意地悪く片目を眇めて笑った。

彼女がどこからともなく取り出したのは、攻魔局からの支給品とおぼしき無骨な携帯電話だ。連絡先のリストをスクロールさせて、呼び出した番号をコールする。

「専門家？」

誰だ、と古城が首を傾げて雪菜の顔を見た。雪菜も困ったように首を振る。

そうしている間に、那月の電話相手が応答したらしい。那月は殊更に無表情になって、

「私だ、盗掘屋」

無愛想な声でそういうと、那月は電話をスピーカー通話に切り替えた。

電話機から流れ出したのは、無駄によく通る男の声だ。古城の知っている声だった。

『ああん？　なんだ、先生ちゃんか。悪ィけど、今、凪沙が見舞いに来てくれてんだよ。嫁さん以外の女と仲良くしてたら、またしばらく口を利いてもらえなくなっちまうだろ。切るぞ』

古城の父親――暁牙城が、普段どおりの胡散臭い口調でまくし立ててくる。

どうして那月が牙城のことを知っているのか、と古城は本気で混乱した。思いがけず凪沙の無事が確認できたのは、唯一、収穫といえなくもない。キーストーンゲートで起きた騒ぎの情報も、今はまだ牙城たちには伝わってないらしい。

「私には貴様と仲良くするつもりなどまったくない。質問があって電話しただけだ」

戸惑う古城のことをきっぱり無視して、那月は牙城との会話を続ける。

『質問？』

不機嫌さを隠そうともせずに答えてくる牙城。〝空隙の魔女〟南宮那月を相手に、そんな不遜な態度をとって大丈夫なのかと、古城はめずらしく父親のことを本気で心配した。

「〝聖殲〟とはなんだ。なんの目的があって引き起こされた？」

ハラハラしている古城の前で、那月が高圧的に質問を繰り出した。

牙城は、はあ、と露骨な溜息をついて、

『なんだ、そんな話か。俺はてっきり好みの女のタイプでも訊かれるのかと思ったぜ』

「世迷い言はいい。さっさと答えろ」

那月に電話越しに凄まれて、牙城が肩をすくめる気配があった。
そして彼は、不意に口調を変える。古城が聞いたことのないような真面目な声だ。
『――伝承ってのは、絵空事のように見えて、案外、当時の歴史みたいなものを反映してたりするんだよ。たとえば、英雄が龍を退治したって伝説の裏側に、治水事業によって川の氾濫を防いだ王様がいたって史実が隠されてたり、聖剣を手に入れたって伝説が、製鉄技術の普及の暗喩だったりするわけだ』
「……」
那月はそんな牙城の説明を、ある程度は予期していたらしい。一度だけ無言でうなずいて、即座に訊き返す。
「ならば〝聖殲〟の――咎神カインの暗喩とはなんだ？」
『そんなもん、わかりきった話じゃねーか。人類による魔族の大虐殺だよ』
「人類が魔族を虐殺した、というのか？」
那月が静かな声で繰り返した。牙城は、ハッと投げやりに笑って、
『まあ、そうなるな。その当時は、連中は魔族という名前で呼ばれてはいなかったはずだがな』
「では、なんと呼ばれていた？」
『〝天部〟――または、古代超人類。あるいは――〝神〟だ』
「神……か」

那月が静かに呟いた。

古城と雪菜は、息を殺して那月たちの会話を聞いている。

古代超人類と呼ばれる一族の存在を、古城たちは知っている。ナラクヴェーラなどの数々の古代兵器を生み出し、十二番目の〝焔光の夜伯〟――アヴローラを遺跡に封印したのも彼らだ。

〝天部〟の末裔と名乗る魔導犯罪者と、実際に戦ったこともある。

だが、彼らが魔族と同一の存在――そんな話は初耳だ。にわかに信じられることではない。

「魔族の正体が実は神だった、と？」

那月が愉快そうに訊き返す。牙城はやる気なく鼻を鳴らし、

『戦争に勝った連中が、負けて征服された国の神々を、悪魔だ、怪物だのと呼んで貶めるのは、世界中のあちこちで行われてきた支配者側の常套手段じゃねーか』

「人類にとっては、歓迎できない話だな」

『そりゃそうだ。こんな学説が学会で認められるわけがねえ。だから今の話は全部、俺の妄想ってことで片付けてもらっても構わないぜ』

「構わん。続けろ」

那月が話を進めるように促した。先生ちゃんも物好きだな、と牙城が笑う。

『……カインと呼ばれた人物だか民族だかがいたとして、そいつもかつては神の一員だった。だが、なんらかの理由で、この世界から追放されたんだろうな』

俺の経験からいえば、金か女がらみのトラブルだろうな、と真面目な口調で牙城は言った。

『そしてカインは、追放された先の世界で人類と出会った。曲がりなりにも神の一員だ。無力な人類を手懐けるくらいは余裕だろう。人々の崇拝を集めることで、カインは本物の神になったんだ。そうやって異境の支配者となったカインが、次に望んだのは、なんだと思う？』

「この世界への帰還――そして、自分を追放した神々への復讐か」

那月が迷うことなく即答した。

『正解だ。しかしカインだけでは神々には勝てない。だからといって神々と戦うには、人類はあまりにも非力だった。そこでカインは、人類に、神々と戦うための知識と道具を与えた。ひとつは魔術。もうひとつは――』

「――〝聖殲〟の魔具か」

『さすがは先生ちゃん。話が早いな』

牙城が本気で感心したような声を出す。

『そんなわけで兵隊の数は揃ったわけだが、神々の力は圧倒的に強大だ。まともに戦えば人類に勝ち目はねえ。だからカインは、こう考えたのさ――人類には神を殺せない。それが、この世界の理ならば、その理を変えてしまえばいい、ってな』

「そのための〝聖殲〟というわけか」

ふん、と那月が鼻で笑う。どこか苛立ちのこもった冷笑だった。

『そうだ。カインは世界を変容させる究極の禁呪によって、神々の存在そのものを変質させた。神々を魔族に変えたんだ。人類には神は殺せない。だが、相手が魔族ならば話はべつだ』

「その結果、引き起こされたのが大虐殺か」

『言っただろ。全部、俺の妄想さ。人類こそが侵略者だった、なんて、誰も認めたくはないからな。それに神と呼ばれていた連中が、善なる存在だったって証拠もねえ。魔族の連中だって、自分たちが、かつての古代超人類の成れの果てだといわれても、納得できねーだろうよ』

牙城がおどけたような口調で告げてくる。那月は意外にも反論しなかった。

「今の話が真実ならば、たしかにカインは原初の罪人であり、魔族の祖でもあるわけだな」

哀れみと諦めの混じった複雑な表情を浮かべて、那月が静かに独りごちる。

そうだな、と素っ気なく答える牙城。

そんな大人たちの会話に、強引に割りこんだのは古城だった。那月が握っている携帯電話を、半ば奪い取るようにして喰ってかかる。

「待てよ。最初の〝聖殲〟が引き起こされた理由はわかった。だけど、なんで今になってそいつを復活させようとしてる連中がいるんだ？　虐殺なんて、もう必要ないだろうが！」

『あん？　なんだ？』

突然乱入してきた古城の質問に、牙城が迷惑そうな声を出す。

『なんでもいいけど、くだらねーこと訊くヤツだな。〝聖殲〟の力を手に入れたい連中なんか、

世界中にいくらでもいるだろうよ。魔族がいなくなれば夜の帝国の資源は取り放題だ。実際に戦争をしなくても、それだけ強力な武器を握ってるってだけで、交渉が有利に運ぶしな』

くっ、と古城が言葉を詰まらせた。悔しいが、牙城の言葉は真実だ。

「どうやれば〝聖殲〟を止められる？」

『はあ？』

「発動した〝聖殲〟を止める方法はあるんだろ。でなきゃ、理屈に合わない。魔族は絶滅したわけでも、人類に支配されたわけでもないんだからな。滅ぼされたのは、カインのほうだ！」

『どこの馬鹿だか知らねーが、輪をかけてくだらねー質問をしてきやがんな』

親の顔が見てみたいぜ、と牙城がぼやき、古城は激しく微妙な気分になる。

『カインが滅びた理由は、ぶっ殺されたからに決まってんだろ』

「殺された……？」

呆然と呟く古城に向かって、牙城は、なにもかも見透かした口調で愉快そうに言い放つ。

『唯一〝聖殲〟の影響を受けずに神として生き残ったカインを殺すために、かつて〝天部〟と呼ばれていた連中は、神を殺すための兵器を創り出したんだ。そいつがカインを滅ぼして〝聖殲〟を終わらせた。世界最強の〝人工〟の吸血鬼――第四真祖とかって呼ばれてる馬鹿がな』

5

那月の携帯電話を握り締めたまま、古城はしばらく無言で固まっていた。頭が真っ白になってなにも考えられない。牙城の言葉があまりにも突飛すぎて、上手く呑みこめないでいる。

そんな古城の耳に聞こえてきたのは、時代劇口調の騒々しい声だ。

「彼氏殿！　息災でござったか！」

公園の植えこみを力ずくでかき分けるようにして、赤い有脚戦車が近づいてくる。甲羅のようなコクピットハッチを開いて、顔を出しているのはリディアーヌだ。

「やや？　この雰囲気、如何したでござるか？」

放心状態の古城に気づいて、リディアーヌが怪訝そうに訊いてくる。

古城は、自分の頬を乱暴に引っぱたいて気を取り直し、

「いや……まあ、気にしないでくれ。それよりも、煌坂は無事なのか？」

「舞威媛殿でござるか……それが、その……はたして無事といえるかどうか……」

「え？」

不安そうに眉をひそめる古城の前で、停止した有脚戦車が地面にべったりと伏せた。その背中から、半ば転がり落ちるように降りてきたのは煌坂紗矢華だ。

彼女は、焦点の合わないうつろな瞳を古城に向けると、ふわりと無防備な笑みを浮かべて、

「あー……暁古城……！」

やけに色っぽい表情でそう言って、古城に抱きついてくる紗矢華。まったく予想しなかった彼女の行動に、古城は全身を硬直させた。

「き、煌坂……？」

「あたしを一人にしてどこに行ってたのよもう！　心配したんだから！　雪菜が消えちゃうかもしれないのに、あなたまでいなくなったら、私……私……うっ……グスッ……」

ぽかぽかと古城の胸を殴りながら、紗矢華は突然めそめそと泣き始める。そんな獅子王機関の舞威媛の姿を、那月が半眼で蔑むように眺め、雪菜はひたすら絶句している。

よく見れば紗矢華の頬は、ほんのりと赤く上気して、しがみついてくる彼女の全身は、妙にぐにゃぐにゃと柔らかい。紗矢華の全身から漂っているのは、熟れた果物のような甘い匂いだ。

その芳香の正体に気づいて、うっ、と古城は息を止め、

「……おまえ、酒臭いんだが……なんだこれ？」

「絃神冥駕の仕業でござる。あの男、どうやら大気を変容させて、エチルアルコールを創り出していたらしく――」

溜息混じりにそう言って、リディアーヌはゆっくりと首を振った。

「アルコール？　あれは毒じゃなかったのか……」

紗矢華を撃退した際の冥駕の行動を思い出し、古城はうんざりと目元を覆った。冷静に考えてみれば冥駕はあのとき、至近距離で紗矢華と斬り合っていたのだ。そんな状況で周囲の大気を、致死性の毒ガスに変えることなどできるはずもなかった。いくら不死身の僵屍鬼といえども、リスクが大きすぎるからだ。

「アルコールも大量に摂取すれば人を死に至らしめる毒にござる。ともあれ、舞威媛殿は先ほどから、ずっとこの有様で」

妙に分別臭い口調で、リディアーヌが疲れたように告げてくる。その間に紗矢華は、古城の隣にいた雪菜にしがみつき、彼女の胸に自分の頬をぐりぐりと押しつけた。

「雪菜ぁ……」

「さ、紗矢華さん？」

「やだぁ……雪菜、消えないで。私を置いていかないでよぅ……」

「さ、紗矢華さん、落ち着いてください……ちょっ、さ、紗矢華さん!?　どこを触って……」

さすがに突き放すわけにもいかずに、雪菜が困り果てたように紗矢華の背中をさする。その間も紗矢華は、ここぞとばかりに雪菜の胸を揉んだり腰を抱いたりとセクハラ三昧だ。

古城はその様子を呆れ顔で眺めて、

「那月ちゃん。これ、どうにかならないか？」

「放っておけ。魔術で無理やり正気に戻しても、どうせ二日酔いで戦力にはならん。それより

も〝戦車乗り〟――その戦車、まだ使えるな？」

「先生殿？　如何する気でござる？」

冷静に訊いてくる那月を見返して、リディアーヌがパチパチと目を瞬く。

「絃神島を制御しているスーパーコンピューターは全部で五台。もし、その一部をネットワークから切り離すことができれば、そのぶん絃神冥駕の力は削がれるはずだ。やつは〝聖殲〟を制御するために、絃神島そのものの力を借りているのだからな」

「ふむ……試す価値はあるやもでござるな。拙者一人では五大主電脳への侵入は困難でござるが、女帝殿の力を借りられれば、あるいは……然れど、そのためには〝棺桶〟の中にいる女帝殿と、コンタクトする経路が必要でござる」

リディアーヌが、年相応の無邪気な口調で言った。

絃神冥駕が操る深紅の弾丸は、その一発一発が独立した強力な魔法陣である。それほどの魔術を実行するには、人間の限界を超えた膨大な演算能力が必要だった。

冥駕は、それを五大主電脳と呼ばれる絃神島のメインコンピューターに代行させている。つまり五大主電脳の性能低下は、そのまま〝聖殲〟の弱体化につながる、ということだ。

「問題ない。絃神冥駕が〝聖殲〟を起動したのも、〝アベルの巫女〟の存在も、おそらく黒幕の本来の計画にはなかった状況のはずだ。そこにつけいる隙がある。もっとも、その程度のことは絃神冥駕もわかっているだろうがな」

「承知。拙者、微力ながらご助勢つかまつるでござる」
リディアーヌが力強く言い放ち、有脚戦車を再起動した。那月がその上にひらりとよじ登る。
「那月ちゃん、俺たちはどうすればいい？」
傷ついた脚を引きずりながら立ち上がって、古城が訊いた。那月はそんな古城を一瞥すると、長い黒髪を揺らしてくるりと反転。あざやかな回転蹴りを古城の顔面へと叩きこむ。
負傷した古城はその衝撃に耐えきれず、無様に吹き飛んで仰向けに転がった。
「ぐ……あ……!?　って、おい!?　あんた、いきなりなにを……!?」
「姫柊雪菜。貴様は、そこの死に損ないと酔っ払いを連れて島を出ろ。この時間なら、本土行きの高速船が使えるはずだ」
「……島を出る？　逃げろということですか？」
那月の一方的な命令に、雪菜が驚いて訊き返す。小柄な魔女は、無感情な眼差しで、倒れたままの古城を見下ろして、
「さっきの電話、聞いていたな？　もしも〝聖殲〟が完全な姿で発動したら、それを止められる可能性があるのは、この馬鹿だけだ。せいぜいこいつを護ってやれ」
「待てよ、那月ちゃん！　俺はまだ戦える――」
「行くぞ、〝戦車乗り〟」
「彼氏殿、ご武運を。さらばでござる！」

「那月ちゃん！　リディアーヌ……！」

必死に立ち上がろうとする古城を無視して、那月を乗せた戦車が走り出していく。完全に置き去りにされた古城は、遠ざかる彼女たちを膝立ちのまま見送って、

「なに泣いてるのよ、暁古城のくせに！」

そんな古城の背中を平手で叩いてきたのは、酔っぱらいモードの紗矢華だった。冥駕に撃たれた傷口の痛みに、古城はたまらず涙目になって、

「うっせーな、泣いてねえよ――って、なんだ、おまえ!?　その恰好!?」

「さ、紗矢華さん!?」

「え？」

古城と雪菜が慌てふためく中、紗矢華が可愛らしく小首を傾げる。いつの間にか制服のベストを脱ぎ去った紗矢華が、ブラウスの襟元を大きくはだけていた。

紗矢華がふらふらと身体を揺らすたびに、彼女の胸の谷間はもちろん、下着のフリルまでもが古城の視界に飛びこんでくる。酔いで淡いピンクに染まった彼女の肌が、しっとりと汗に濡れて異様にエロい。

「だって、この島、暑くない？」

「それはおまえが酔っ払ってるからだろうが！」

無邪気に問い返してくる紗矢華に、古城が怒鳴った。紗矢華は拗ねたように唇を尖らせて、

ヤケクソ気味に制服のボタンに手をかけて、
「暁古城になら見られてもいいもん。もう何回も見られたし。ブラだって脱がされたし――」
「先輩……」
「違う。あんとき脱がせたのは俺じゃねえ――！」
雪菜に冷ややかな視線を向けられて、古城は激しく首を振った。嫌がる紗矢華の服を無理やり脱がせたのは、仙都木優麻の仕業である。もっとも古城はその現場に、しっかり居合わせて一部始終を見ていたわけだが。
「そうよね……べつに私の胸なんて見ても嬉しくないわよね。私なんて雪菜みたいに可愛くないし、雪菜みたいに可愛い下着だって似合わないし――」
ブラウスの前ボタンを全開にした紗矢華が、突然いじけたように膝を抱えてうずくまる。泥酔者特有の気分の急激な変化である。
「そんなことないですよ。紗矢華さんは可愛いです！　ね、先輩？」
どんよりと落ちこむ紗矢華を見かねて、雪菜が懸命に励まそうとする。
「あー……俺も煌坂は可愛いと思うぞ。黙ってれば美人だし、胸もでかいし……」
今はそんな話をしてる場合じゃないんだが、と思いつつ、適当に話を合わせる古城。
紗矢華は涙で潤んだ瞳で古城を見上げて、
「本当に？　本当にそう思ってる？」

「ああ、まあ」
「じゃあ、私の血も吸える？」
「え……？」
あまりにも脈絡のない紗矢華の発言に、古城は反応できずに沈黙した。だって、と紗矢華が、しゃくり上げる。
「だって、その傷……私のことを庇って……そのせいで、あなたに死なれたりしたら、私、どうしたらいいのかわからないんだけど……」
「おまえ……もしかして、さっきからそのために……？」
倒れこんでくる紗矢華を抱き留めながら、古城は唖然として呟いた。
古城に馴れ馴れしく抱きついていたり、いきなり服を脱ぎ始めたり——いくら酔っぱらっているとはいえ、紗矢華らしからぬ行動だとずっと思っていたのだ。だが、それが、古城に血を吸わせるためだったと思えば納得できる。
強力な霊媒である紗矢華の血には、古城の吸血鬼としての能力を覚醒させる効果がある。しかし吸血衝動の引き金になるのは、いわゆる性的興奮だ。古城の吸血衝動を引き起こすために、紗矢華は古城を誘惑しているつもりだったのだ。普段の態度が態度だけに、そんな不器用な紗矢華の行動が、異様に可愛らしく思えてくる。
その紗矢華は、古城に体重を預けたまま、無抵抗に目を閉じている。

彼女の細い肩はゆっくりと上下して、聞こえてくるのは規則正しい寝息――

「――って、寝るのかよ!?」

紗矢華の細いうなじを見つめたまま、古城は思わず絶叫した。泥酔状態の上に泣き疲れて、紗矢華は完璧に寝入ってしまっている。

「もしも眠ってなかったら、紗矢華さんになにをするつもりだったんですか？」

がっくりとうなだれる古城を眺めて、雪菜が冷ややかに訊いている。

古城はビクリと肩を震わせて、怯えたように首を振り、

「い、いや……それは……」

「もう……先輩は本っ当にいやらしいヒトですね……」

雪菜が深々と息を吐く。だがそれは怒り呆れているというよりは、苦笑と信頼の入り混じった優しい溜息だ。そして彼女は、傍らに置いてあった銀色の槍に手を伸ばし、その穂先を自らの首筋へと向けた。

「姫柊!?　なっ!?　おまえまで、いきなりなにやってんだ――!?」

銀色の槍が撫でるように雪菜の首筋に触れ、彼女の白い肌に、ぽつぽつと血のしずくが浮き上がる。その姿に古城は目を奪われた。

「これは紗矢華さんのぶんですから」

雪菜が制服の胸元に手をかけた。リボンをするりと解いて、制服のボタンをぎこちなく外す。

細く浮き上がった鎖骨と、かすかな胸の膨らみ。そしてほっそりとした脾腹があらわになっていく。

「南宮先生と藍羽先輩を助けに行くんですよね。だったらせめて少しだけでも力を回復させておかないと」

「だけど、姫柊……おまえは……」

古城が声を絞り出す。今の雪菜は万全からは程遠い体調だ。急激に進行する天使化が、彼女の身体に大きな負担を強いている。こうして普通に話しているだけでも、相当な無理をしているのが感じられた。そんな彼女が、吸血行為の負担に耐えられるとは思えない。

「いいんです。わたしが先輩に血をあげられるのは、これで最後になるかもしれませんから」

しかし雪菜は、そう言って美しく微笑んだ。下着姿の胸元を両腕で隠しながら、細い首筋を差し出すその姿は、彼女を見慣れたはずの古城の目にも、どこか神々しく感じられた。

眩しすぎて直視できない。なのに目を逸らすことも不可能だ。

「あの……紗矢華さんに比べたら小さくて、あまり見られると恥ずかしいんですけど……」

息を殺して見つめている古城に、雪菜が目を伏せたまま頼りなく抗議する。

そんな雪菜の華奢な身体を、古城は強引に抱き寄せた。

「せ、先輩……？」

雪菜が一瞬だけ怯えたように瞳を揺らす。古城はそれでも彼女を離さない。

「駄目だ、姫柊」
「え？」
「消えるな！　自分が消滅してもいいなんて言うな……！　おまえがいなくなったら、煌坂も、叶瀬も、凪沙も、俺も悲しい、から……っ！　おまえを大切に思っているみんなのためにも、最後まで諦めるなよ……！」
　でも、と雪菜が、泣き出す直前のように声を震わせた。
「そうしたら、わたしは、先輩の傍にいられなくなってしまうんですよ……！　わたしが剣巫じゃなくなってしまったら……！」
「いればいいだろ！」
　雪菜の弱々しい反論を、古城が力強く否定する。
「獅子王機関の剣巫じゃなくても、監視役じゃなくても、この島にいたけりゃ、いていいんだ。おまえはここにいていいんだよ！」
「わたし……は……」
　古城の言葉をきっかけにして、雪菜の全身から力が抜けた。思いがけない強い力で、雪菜の両腕が古城を抱きしめてくる。
「わたしも……離れたくない……です！　この島に来てからの毎日は、わたしにとって黄金のような時間だったから……だから！」

秘めていた思いを吐き出して、雪菜は涙をこらえるように目を閉じた。
そのままゆっくりと呼吸を整え、そっと古城の身体を突き放す。雪菜の両手が、古城の頬に触れた。そして互いの息がかかるほどの距離から、雪菜は古城を見つめてくる。
「先輩」
雪菜が柔らかく微笑んだ。美しく澄んだ彼女の瞳から、迷いと怯えが消えている。あどけなさを残したその表情から、古城は目が離せない。甘い汗と血の匂いが鼻腔をくすぐり、古城は激しい喉の渇きを覚える。囁くような雪菜の声が、古城の鼓膜を震わせる。
「わたしの血を、吸ってください。わたしは先輩の監視役ですから……最後まで、ずっと」
「姫柊……」
吸血鬼の本能に命じられるままに、古城は、雪菜の首筋に牙を突き立てた。白く鋭い先端が、ゆっくりと雪菜の肌を破って食いこんでいく。
「っ……」
緊張と苦痛で雪菜が身体を硬くした。それに気づいた古城が動きを止める。
雪菜はそんな古城の背中に手を伸ばし、優しく囁きかけてくる。
「……大丈夫……平気ですから……もっと深くまで……離さないでください……」
ああ、と古城が雪菜を抱く腕に力をこめた。彼女の首筋に深々と牙を突き入れて、触れ合う肌と甘い血の感触に酔いしれる。

「先輩……暁先輩……」

苦しげな呼吸を続けながら、雪菜が古城の名前を呼ぶ。彼女の全身は汗に濡れ、白い肌が仄かに赤く染まっていた。小刻みに震えていた雪菜の身体が、何度か硬直するように引きつって、やがてぐったりと脱力する。

長い距離を走り終えた直後のように浅い呼吸を続ける雪菜が、再び目を開けるまで、古城は彼女をいつまでも抱きしめていた。

6

「き……傷の具合は、どうですか？」

古城の腕の中で目覚めた雪菜が、上擦った声で訊いてくる。

雪菜の制服はだけたままだし、彼女の細い首筋には、古城の牙が突き立った痕がキスマークのようにうっすらと残されている。おまけにしっかりと抱き合っていた余韻が、互いの両腕に今も残っていた。おかげで妙に気まずい気分だ。

「完全回復ってわけにはいかないみたいだな。だけど、さっきまでに比べたら全然マシだ」

居心地の悪さを隠すために、なるべく事務的な口調で古城が答える。そして古城は、乱れた制服を直す雪菜にちらりと目を向けて、

「それより、姫柊。その下着って――」
「はい。夏音ちゃんに貸してもらったんですけど……変、ですか……？」
雪菜が胸元を隠しながら、自信なさげな表情を浮かべた。
なんだかんだで雪菜の下着姿を目撃することの多い古城だが、普段の彼女が身に着けているブラは、どちらかといえば飾り気のないシンプルなものである。しかし今日に限っては、ふわふわしたレースに包まれた可愛らしいデザインのものを着用していた。
その意外性で余計に魅力的に感じられるのは事実だが、実際のところ、古城はそこまで下着のデザインになど興味はなかったりもする。
「いや、べつにいいと思うぞ。でも、そうか……それで叶瀬の匂いがしたんだな」
うんうん、と一人で納得してうなずく古城。雪菜を抱きしめていたときに、かすかに夏音の気配を感じたのは、古城の気のせいではなかったらしい。
しかし謎が解けてすっきりとした気分の古城とは裏腹に、雪菜はすべての表情を消して、
「……はい？」
その言葉が古城に届くよりも早く、彼女が放った裏拳が古城の脇腹に炸裂していた。古城は、おうっ、と声にならない悲鳴を洩らして、
「痛ってぇ!?　なにすんだ、いきなり……!?」
「もう知りません。先輩の馬鹿」

雪菜がぷんすかと怒りながら古城に背中を向ける。なんなんだいったい、と古城は、涙目のまま溜息をついた。そんな二人の足下から、疲れたような声が聞こえてきたのは、その直後だ。

『……やれやれ。ようやく見つけたと思ったら、こんな見晴らしのいい場所で白昼堂々なにをやってんだい、この子たちは』

「師家様……!?」

雪菜がハッと口元を押さえて息を呑む。

公園のベンチの上から、古城たちの姿を見上げていたのは、艶やかな毛並みの黒猫だ。縁堂縁の使い魔である。妙に人間臭い表情の黒猫を、古城は引きつった表情で見返し、

「あ、あんた、見てたのか!?」

『なにか見られて困るようなことでもしてたのかい？』

あ、いや、と曖昧に言葉を濁す古城。雪菜はその間に銀色の槍を拾い上げ、黒猫から距離を取って身構える。縁に無理やり連れ戻されることを警戒しているのだ。

「師家様、わたしは――」

『わかってる。もう止めやしないよ』

縁の使い魔である黒猫は、投げやりに前肢を振りながらそう言った。そして彼女の金色の瞳が、ジロリと古城を睨めつけて、

『その代わり、第四真祖。おまえさんにはきっちり責任をとってもらおうか』

「せ、責任？」

『こいつを雪菜の指に嵌めるんだ。おまえさんがね』

思わず及び腰になる古城に、黒猫が自らの首元を指し示してくる。

そこにあったのは、猫用の細い首輪だった。その首輪のちょうど喉のあたりに、薄紅色のリボンでなにかが結びつけられている。銀色に輝く小さな円環だ。

「……指輪？」

古城はするりとリボンを解いて、銀色の円環を手に取った。上下一組の円環を貼り合わせたような、シンプルなデザインの指輪だった。指輪のサイズはかなり小さい。古城の小指にも嵌まりそうにない。だが雪菜の細い指になら、かろうじて嵌まるかもしれなかった。

「〝雪霞狼〟と同じ材質で造られてるみたいですけど……」

古城の手元をのぞきこんで、雪菜が言う。言われてみればその指輪の色は、雪菜の槍の穂先によく似ていた。かなり軽量な金属だが、見た目よりも頑丈な材質なのは間違いないだろう。

『まあ、おまじないみたいなものさ。上手くいけば、こいつが雪菜の天使化を防いでくれる』

無責任な口調で、縁が言う。

「わかった」

と古城はうなずいた。縁の言葉を疑おうとは思わなかった。雪菜の消滅を防げるのならば、それが根拠のないまじないでも迷信でも構わない。

雪菜も同じ気持ちだったのか、彼女は、無言で自分の左手を古城の前に差し出してくる。かなり小さく思えた銀色の指輪だが、それは雪菜の薬指に、あつらえたようにぴったりと嵌まった。雪菜は手首をくるくると回して、指輪の具合を確認する。

「特に変わったようには見えないんだが……」

古城が失望したように呟いた。なにか劇的な変化が起きることを無意識に期待していたのだ。

『言っただろ。おまじないみたいなもんだって。せいぜい上手くいくように祈っておくよ』

縁の使い魔の黒猫が、意味ありげな表情でそう言った。しかし、しょせん猫だけに、その表情の意味までは古城にはわからない。

「先輩――」

左手の指輪をチラチラと眺めていた雪菜が、表情を硬くして古城を呼んだ。

古城の肌を刺すような、異様な魔力の波動が伝わってきたのは、その直後だ。運河の対岸――キーストーンゲートの上空に向かって、深紅の粒子が噴き上がっているのが見える。

建造物の外壁が、白い結晶に変化して崩れ落ちていく。〝聖殲〟の力で、外壁を塩に変えたのだ。おそらくは建物の内部に侵入するために。

「キーストーンゲート……絃神冥駕か！　ニャンコ先生、悪いけど、煌坂の世話を頼む！」

古城は黒猫を抱き上げて、酔い潰れて眠ったままの紗矢華の上に見張り役として置いておく。

黒猫は、やれやれ、というふうに小さく鳴いて、

「勝算はあるのかい、第四真祖の坊や？」
「どうかな。やつには俺の眷獣も通用しないしな」
古城が苦笑して首を振る。強がっているわけでも、自嘲しているつもりもなかった。だが、冥駕が雪菜を狙っている以上、どのみちいつかは戦わなければならない相手だ。
それに〝棺桶〟の中に囚われたままの浅葱のことも気にかかる。どのみち古城には、冥駕から逃げるという選択肢は残されていないのだった。たとえ勝算がなくても、だ。
「いえ。大丈夫です、先輩。勝てますよ――」
しかし、そんな古城の隣に立って、雪菜がきっぱりと告げてくる。
驚く古城を悪戯っぽく見上げて、銀色の槍を握る少女は力強くうなずいた。

7

『タスケテ……』
画面から、少女の声が聞こえる。
この都市で、アイドルと呼ばれていた少女の声だ。
街頭の広告スクリーンや家庭のテレビ、パソコンやタブレット、スマートフォン――ありとあらゆる画面から、彼女の声が流れ出してくる。華やかな衣装と端整な顔立ちはそのままに、

一切の表情を消した少女の声は、たった一人の少年に向けて、そのメッセージを伝えている。
壊れた再生装置のように。繰り返し、繰り返し。
『コ、シ、マヲ……タ、ス、ケテ……コ、ジョウ……』
人々には、彼女の言葉の意味はわからない。
それでも彼らは理解していた。この人工の島で、なにかが起ころうとしていることを。そして彼らの知らないところで、それに抗おうとしている者がいることを。
その現象が誰かの悪戯や、放送機材の故障という可能性を忘れたわけではない。
それでも人々は、心の中で密かなエールを送る。俺たちの島を、助けてくれ、と。
なぜなら彼らもまた、この島の住人だったからだ。
そう。ここは〝魔族特区〟なのだから――

8

キーストーンゲートは巨大な建造物だ。建物自体が、絃神島の要となる大規模浮体式構造物のひとつであり、一個の広大な街でもある。人工島管理公社だけでなく、絃神市の市庁舎や特区警備隊の本部、飲食店街やシティホテル、高級ファッションビルのテナントまで――それらが複雑なブロックのように組み合わされて、楔形の建造物を構成しているのだ。

そのキーストーンゲートの内部には、小さな博物館がある。

正式名称は魔族特区博物館。絃神島の設計者である絃神千羅の過去の業績や、〝魔族特区〟に関する歴史資料を集めた、観光客向けの施設である。

しかし今はその施設内に、観光客の姿はない。〝タルタロスの薔薇〟事件以後、この博物館は閉鎖されているのだ。災害復旧中の絃神島を、わざわざ訪れる物好きな観光客は少ないし、対外的には、この施設も、事件で被災したことになっている。

そんな博物館の従業員区画に、意外な集団の姿があった。

最新鋭の対魔族装甲服と銃器で武装した屈強な武装警備員――特区警備隊〝魔導打撃群SSG〟の隊員たちである。

そして彼らに護衛されているのは、眼光鋭い和服姿の男だった。人工島管理公社の名誉理事――矢瀬顕重だ。

関係者以外立入禁止、と書かれた扉を開けて、顕重たちは博物館の地下へと降りていく。

その先に広がっていたのは、空港の管制室を連想させる、機械に埋め尽くされた空間だった。

広さは、中規模の劇場やライブハウスほどだろうか。壁面を覆い尽くす無数のモニターと、階段状になったオペレーターブース。ブース内の制御パネルは、どれもが忙しなく点滅して、

それらが稼働中であることを示している。

しかしその席に座っているはずの、オペレーターたちの姿はどこにもなかった。

顕重の部下である彼らは、何者かによって眠らされ、そしてどこかへ連れ去られたのだ。まるで空間を跳び越えたかのように、なんの痕跡も残さずに。

そして消え去ったオペレーターたちの代わりに、そこには一人の小柄な影が立っていた。

長い黒髪の、童顔の魔女が。

「やはり、ここにいたか――矢瀬顕重」

管制室に入ってきた顕重を見上げて、南宮那月は冷たく微笑んだ。

「南宮那月……〝空隙の魔女〟か」

顕重は、表情も変えずに応じてくる。その間に武装警備員たちは素早く動き出し、那月を包囲するように部隊を展開していた。彼らは無警告のまま、那月へと銃口を向けている。

那月は、ふ、と息を吐き、悠然と周囲を見回した。

「ここが〝棺桶〟の管制室か……部下の裏切りに備えて、安全装置を用意しておく。狡猾な貴様らしいやり方だな」

「攻魔局の国家攻魔官ごときが、知った風な口を利く」

顕重が感情のない眼差しで那月を睥睨する。

「だが、許そう、〝空隙の魔女〟――たしかにおまえは有能だ。殺すには惜しい人材だな」

恫喝めいた顕重の言葉を、那月は表情を動かさずに聞いていた。

潜水艇〝咎神の棺桶〟の内側は、〝カインの巫女〟以外の侵入を許さない、外界から隔絶された領域だといわれている。

だが矢瀬顕重のような性格の男が、自らの支配が及ばない領域の存在を、本気で認めるとは思えない。ましてやそれが〝聖殲〟の鍵となる領域であれば尚更だ。

矢瀬顕重は、必ずどこかに〝咎神の棺桶〟を、外部から制御する方法を隠し持っている――それが那月の読みだった。その推論は、どうやら当たっていたらしい。

「いかに咎神の叡智を詰めこみ、神のごとき演算能力を誇ろうとも、〝棺桶〟自体は単なる潜水艇に過ぎない。絃神島から切り離してしまえば、海の底に沈むだけだ」

顕重が厳かに告げてくる。その言葉は那月への説明などではなく、部下である魔導打撃群（SSG）の隊員たちに対して、己の周到さを誇るためのものだった。

「中に取り残された藍羽浅葱はどうなる？」

那月が静かに問い返す。顕重はかすかに失笑したようだった。

「〝カインの巫女〟か。優れた生贄だったが、替えの効かない部品というわけでもない。また新たな候補者を探さねばな」

「〝棺桶〟には人工島を制御するネットワークの中枢が置かれているはずだ。それを失えば、絃神市内は大混乱に陥るぞ？」

「それがどうした？　この島の住人は、しょせん〝聖殲〟の威力を世に知らしめるために集められた人柱に過ぎぬ。祭壇たる人工島さえ無事であれば、その上で何人死のうが些末なことだ」

顕重が平然と言い切った。

紘神冥駕に奪われた〝聖殲〟の力を無効化するために、〝棺桶〟を切り捨てる――顕重は、そう主張しているのだ。その結果として失われる藍羽浅葱の命も、そして紘神島で起きる混乱も、彼にとってはどうでもいいことなのだろう。

「それとも、その身体で私を止めてみるかね、〝空隙の魔女〟？」

顕重の周囲で、大気がゆらりと揺れた。矢瀬一族は、代々続く過適応能力の家系だ。一族の当主である顕重も、当然その能力を持っている。

そして彼は、那月の肉体の損傷に気づいている。たとえ〝空隙の魔女〟が相手でも負けることはない――そう確信しているのだろう。

しかし那月は頭上を見上げて、嘲るようにニヤリと笑った。

「いや、やめておこう、矢瀬顕重。私があえて手を出すまでもなさそうだからな」

「なに……!?」

顕重が、那月につられて視線を頭上に向ける。

管制室の天井が崩落したのは、その直後だった。強固なシェルター状の外壁が、砂のように

砕けて崩れ落ちていく。否、それは砂ではなかった。半透明な白い粉末――塩だ。

建物の外壁を、一瞬で塩へと変えて打ち壊した者がいるのだ。

「紘神冥駕か！」

濃霧のように立ちこめる塩の煙を透かして、深紅の光の粒子が洩れる。黒槍を握った紘神冥駕が、管制室へと音もなく舞い降りてくる。

魔導打撃群（SG）の隊員たちが冥駕に銃口を向けようとするが、冥駕の攻撃のほうが速かった。深紅の弾丸に撃ち倒された隊員たちが、塩の柱と化して崩れ落ちていく。

続けて冥駕が放った弾丸は、無言で立ち尽くす顕重を襲った。

しかし顕重は指一本動かすこともなく、四方から飛来する十数発の弾丸を、すべて撃墜してみせる。彼が放った不可視の刃が、深紅の弾丸を相殺したのだ。

「〝聖殲〟の光を防ぎますか、顕重翁。さすがに各神の末裔を自称するだけのことはある」

冥駕が愉快そうに微笑んで言った。

対する顕重の表情には、隠しきれない焦りが浮かんでいた。裏切り者である冥駕に、この管制室の存在を知られたことは、顕重にとっても想定外だったのだ。

「使い走りの死人が、なんのつもりだ、冥狼――貴様の目的はなんだ」

「その名前で私を呼ばないでいただきたいのですが、まあいいでしょう」

憎々しげな顕重の呼びかけに、冥駕は涼やかな表情で答える。

「私の目的はただひとつ――完全なる咎神カインの復活です。〝聖殲〟など、そのための手段に過ぎない」

「カインの……完全復活だと……？」

顕重がこめかみを引きつらせてうめく。いかにも、と冥駕が大げさに両腕を広げた。

「我が祖父が死体から私を生き返らせたように、私は〝棺桶〟に残された咎神の〝記憶〟から、咎神カインを再生する。彼の精神と、意識を！　そのためならば、私のこの身を、彼のために差し出してもいい――！」

「血迷ったか、冥狼！」

顕重が荒々しく怒鳴る。その声に先刻までの余裕はない。彼が冥駕に向けて放った不可視の刃は、冥駕が張り巡らせた正十二面体型の障壁に阻まれる。

「貴様の祖父が欲したのは〝聖殲〟の禁呪だけだ。咎神カインの復活など望んではいない。そのようなことが実現すれば、世界が滅ぶぞ……！」

「まさにそれこそが我らの望みだと言っているのです」

冥駕の口調は穏やかだ。むしろ顕重の動揺を、愉しんでいるような気配すらある。

「紘神島と〝アベルの巫女〟の演算能力をもってしても、〝聖殲〟の効果が及ぶのはせいぜい半径十数キロ――ですが、本来の担い手である咎神カインの能力をもってすれば、〝聖殲〟は龍脈に乗って、この惑星すべてを覆い尽くすでしょう――」

「なるほどな……」

言葉をなくしている顕重に代わって、会話に割りこんだのは那月だった。

「それが〝アベルの巫女〟が貴様に協力した理由か、紘神冥駕。死者として甦ったおまえたち二人が、この世界を再び破壊する。目的は、復讐か……？」

「ええ。まさに仰るとおりです。私たちは、私たちを裏切ったこの世界を――我らから温もりを奪った人々を許さない。〝アベルの巫女〟も、この私も――」

「馬鹿な……」

矢瀬顕重が吐き捨てた。現世での利益に囚われた顕重にとって、冥駕の思考は理解の埒外にある狂気の産物だ。恐怖に歪む顕重の顔に、冥駕はうつろな視線を向けて、

「我々は、死者としての本分を果たしているだけですよ。崇高な理念も、心地好い正義も必要ない。一人でも多くの生者を道連れにして、地獄へと堕ちる。魔術とは、呪いとは、本来そういうものではありませんか――！　これこそが私たちの〝聖殲〟だ！」

微笑みながら宣言すると同時に、冥駕は深紅の弾丸を放っていた。

その数は十や二十ではない。百、あるいは二百個以上の正八面体の弾丸が、一斉に矢瀬顕重を襲ったのだ。顕重が放つ不可視の刃も、そのすべてを撃ち落とすことは不可能だった。

「ぬうっ――!?」

凄まじい爆発に包まれて、顕重の姿が見えなくなる。

わずかに生き残っていた魔導打撃群（SSG）の隊員たちも、その光景を目の当たりにした上で、戦意を保つことなど出来るはずもなかった。小隊長らしき男が、撤退だ、と叫び、それぞれの隊員が我先にと管制室から逃げ出していく。

冥駕は彼らを冷ややかに見送り、そして那月へと向き直った。

「――次はあなたですか、南宮那月？　それとも、いつものように空間を跳んで逃げますか？　もっとも逃げたところで、この世界が滅んでしまえば同じことですが」

超然と告げてくる冥駕の声に、那月に対する敵意はなかった。〝聖殲〟の力を操る今の冥駕は、もはや那月に脅威を感じていないのだ。

しかし那月は、それを理解した上で、ふふん、と冷笑し、

「逃げる？　いいや、違うな。逃げる必要があるのは、私ではなく貴様のほうだぞ、絃神冥駕」

「なに……？」

奇妙な余裕を漂わせた那月の姿に、冥駕が一瞬、眉を寄せる。

大地を震わすほどの高密度の魔力が、管制室を満たしたのはその直後だ。その魔力は眩い雷光となって渦を巻き、一体の巨大な召喚獣の姿へと変わった。吸血鬼の眷獣だ。

「〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟――ッ！」

少年の猛々しい雄叫びとともに、雷光の獅子が前肢を振るった。

冥駕は咄嗟に突き出した黒槍で、その一撃を受け止める。魔力を無効化する冥駕の黒槍だが、

爆発的な魔力が生み出す衝撃波までは消し去ることはできない。そのまま後方へと吹き飛ばされて、冥駕は管制室の壁に激突する。

それでも冥駕が無傷だったのは、彼の背後に現れた亡霊めいた少女の働きだった。〝アベルの巫女〟が生み出した深紅の障壁が、冥駕を包みこんで護ったのだ。

立ち上がった冥駕の額から、どろりとした鮮血が流れ落ちてくる。〝静寂破り〟に撃たれた傷痕が、今の衝撃で再び開いたのだ。

そのことが冥駕を、どうしようもなく苛立たせる。

そして、それ以上に彼を苛立たせていたのは、今の攻撃が、自分に向けて放たれたのではない——という事実だった。あの黄金の眷獣は、管制室の壁をぶち抜くためだけに召喚されたのだ。一瞬でも早くこの管制室に辿り着くために、邪魔な壁を破壊する。それがあの眷獣の召喚の目的だ。冥駕はそれに巻きこまれただけに過ぎないのだ。世界をも滅ぼす力を手に入れたはずの冥駕が、だ。

怒りに満ちた眼差しで、冥駕が闇の奥を睨めつけた。

そこに立っていたのは、気怠げな表情を浮かべた吸血鬼の少年だ。

「なんか、こういうことを言うと、あのクソ親父の言葉を信じたみたいで癪だけどな——」

足下の瓦礫を踏み越えながら、少年が言い訳がましく呟いている。銀色の槍を握った少女が、彼の隣でそれを聞いている。

やがて少年はゆっくりと顔を上げ、真紅に輝く目を細めた。
「〝聖殲〟を終わらせに来たぜ、絃神冥駕」
冥駕を無関心に見返して、第四真祖――暁古城が獰猛に笑っていた。

9

深紅の弾丸が、砂塵を貫いて飛来する。土の属性を備えた正六面体の弾丸。それは古城の足下に炸裂して、周囲の瓦礫を跡形もなく消し去った。
威嚇射撃。それ以上は近づくな、という冥駕からの警告だ。
「今さらなんの真似ですか、第四真祖？　あなたは私の脅威ではないと伝えたはずですが」
明らかな苛立ちを感じさせる口調で、冥駕が訊いた。
彼の周囲を覆っていた深紅の粒子が、小さな弾丸へと変わっていく。その数はすでに数百を超え、管制室一面へと広がりつつあった。そのすべてをまともに喰らったら、吸血鬼の肉体といえども完全に消滅するだろう。先程の瓦礫と同じように――
それほどの圧倒的な力を見せつけた上で、冥駕が告げる。
「矢瀬顕重は、あなたを滅ぼすことで、〝聖殲〟の威力を誇示するつもりだったようですが、私にとって、あなたはその価値すらもない。消えなさい」

「脅威じゃない、か。まあ、そうかもな……」

古城が無関心な口調で言った。覇気の感じられないその態度に、逆に冥駕が困惑の相を浮かべる。そんな冥駕を見返して、古城はかすかに唇を吊り上げ、

「だけど、俺はともかく、浅葱はどうだ？」

「なんのことです……？」

冥駕が、焦れたように眉を震わせた。古城は彼を挑発するように、あえてゆっくりと管制室を見回す。

「ここにあるのは〝棺桶〟を制御するための装置なんだろ？　おまえが本当に〝聖殲〟を掌握してるのなら、どうして今さらここに来たんだ？」

「なるほどな――」

沈黙する冥駕の横顔を見つめて、クッと那月が面白そうに喉を鳴らす。

「カインを復活させるためには、〝棺桶〟の中身を取り出さなければならない。その理屈は、まあ、わかる。〝棺桶〟はカインの〝記憶〟を保存するための装置だからな。だが、貴様たちが本当に〝棺桶〟を掌握しているのなら、直接、〝棺桶〟の中に入れば済むことだ」

「おまえはここに来なければ、〝棺桶〟の中身と交信できなかった。〝アベルの巫女〟が〝棺桶〟を乗っ取っているのに、そんなことがあり得るのか？」

那月の言葉を引き継いで、古城が言った。

「浅葱は、俺に〝この島を助けろ〟と言ってたぜ。自分じゃなくて、この島を救えってな。あいつは、その気になれば、いつでも〝棺桶〟を操って脱出できたんだ。なのにそれをしなかったのは、〝アベルの巫女〟を封じるためだったんじゃないのか？」

「黙れ、第四真祖――」

冥駕が低い声で唸るように呟いた。そんな彼の背後に、再び亡霊めいた少女の姿が浮かび上がる。〝アベルの巫女〟の端整な顔立ちは、はっきりと憎悪に歪んでいた。

それに構わず、古城は続ける。

「紘神冥駕、それに〝アベルの巫女〟――おまえたちは〝聖殲〟を掌握してなんかいない。おまえたちが操っているのは、〝聖殲〟の上っ面だけだ。なぜなら浅葱が〝棺桶〟の中身を――〝咎神〟の叡智を凍結し続けていたからだ。あいつは今の今まで、たった一人で、紘神島を護ってたんだよ。さすがは紘神島のアイドルってとこか」

そう告げる古城の口元には、誇らしげな微笑が浮かんでいた。

紘神冥駕が使う〝聖殲〟の力は強力だが、本来の威力にはほど遠い。せいぜい都市ひとつを壊滅させる程度のものだ。世界を滅ぼすには遠く及ばない。

その理由は、〝アベルの巫女〟が、無理やり〝聖殲〟を起動したせいだと思っていた。

だが違った。〝アベルの巫女〟が〝聖殲〟の能力を引き出せないのは、彼女に巫女としての正統性が欠けていたせいではない。〝聖殲〟の力を封じていたのは、浅葱だ。

浅葱は〝棺桶〟に閉じこめられていたわけではない。その逆だ。彼女は古城たちを護るために、〝棺桶〟の中に引き籠もっていたのだ。おそらく浅葱のことだから、〝アベルの巫女〟を適当にあしらいながら、一人で退屈を持てあましていたのだろう。

浅葱は、最後まで、古城に「助けに来い」とは言わなかった。彼女は「紘神島を助けろ」と言ったのだ。それはつまり、そういうことだ。古城たちは最初から彼女に助けられていたのだ。

「だから……なんだと言うのです!?」

冥駕のうつろな瞳が、怒りに染まった。彼の表層を覆い隠していた見せかけの余裕は、すでに引き剝がされている。今の彼に残されたのは、世界に対する怒りと憎悪だけだ。

「たとえ不完全でも、〝聖殲〟の力は、すでに我が手の中にある。〝カインの巫女〟の抵抗など、ここであなた方全員を消滅させて、それからゆっくりと片付ければ済むこと――！」

「いいや、紘神冥駕。おまえの復讐は、ここで終わりだよ。浅葱が俺たちに、おまえをぶっ倒す機会を与えてくれたからな――」

牙を剝いて笑う古城の全身から、抑えきれない魔力が噴き出した。魔力を無効化できるはずの冥駕が、その迫力に気圧されて、一歩だけ怯んだように後退する。

「さあ、始めようか、紘神冥駕――ここから先は、第四真祖の戦争だ！」

「黙れ――ッ！」

冥駕が、空中に漂わせていた数千発の弾丸すべてを発射した。世界を変容させ、吸血鬼の異

能の力を奪う深紅の弾丸だ。第四真祖の眷獣といえども、その攻撃は防げない。

そして、その弾丸すべてを受け止めたのは、眩く輝く神格振動波の結界だった。

「いいえ、先輩。わたしたちの聖戦、です――！」

銀色の槍を床に突き立てた雪菜が、力強い表情で微笑んでいる。彼女の全身から銀色の槍を経由して放たれているのは、人間の限界を超えた膨大な神気だ。

その力が深紅の粒子を押し返し、冥駕の弾丸を相殺する。

「なおも……なおも私の邪魔をする気ですか、姫柊雪菜――！」

絃神冥駕が、黒槍を構えた。雪菜の神気がどれだけ威力を増そうとも、霊力を無効化するその槍がある限り、決して冥駕を傷つけることはできない。

それを知りながら、雪菜は果敢に飛び出した。青白い光に包まれた銀色の槍が、大気を裂いて冥駕へと伸びる。

「〝雪霞狼〟！」

「七式突撃降魔機槍かっ！　そんなものが――」

冥駕の黒槍が、雪菜の銀槍を受け止める。どれだけ助走で勢いをつけても、体重の軽い雪菜では、僵尸鬼である冥駕の腕力を押し切れない。

それでも雪菜の瞳に浮かんでいるのは、絶望ではなく信頼の光だった。

「疾く在れ、〝牛頭王の琥珀〟――！」

「なにっ!?」

冥駕の足下の床を破って噴き出したのは、灼熱の熔岩の杭だった。第四真祖の二番目の眷獣、熔岩の肉体を持つ牛頭神の攻撃だ。

大地の力を操るその眷獣は、この海上に浮かぶ人工島では、ひどく限定的な力しか使えない。それでも数千度に達する熔岩の槍は、僵尸鬼の肉体など容易く焼き尽くす。

そして雪菜に気を取られていた冥駕には、その攻撃は防げない。

「くっ――〝女教皇〟！」

追い詰められた冥駕が、〝アベルの巫女〟を呼んだ。深紅の粒子で形作られた亡霊の少女が、冥駕の周囲に、障壁を展開。かろうじて古城の攻撃を凌いだ冥駕が後退する。

そんな彼の左肩から、どろりとした鮮血が噴き出した。

古城の眷獣を防いだ一瞬の間に、雪菜の槍が、彼の肉体を浅く斬り裂いていたのだ。

「やはり、そういうことだったんだな……絃神冥駕」

古城がつまらなそうに息を吐く。

雪菜が指摘した絃神冥駕に対する勝算。それを教えてくれたのは、〝静寂破り〟だった。

第零層での戦いで、〝静寂破り〟の能力は、絃神冥駕を傷つけたのだ。零式突撃降魔双槍を起動していたはずの彼を。

「あなたの零式突撃降魔双槍が、失敗作と呼ばれている理由――僵尸鬼のあなたでなければ、

使いこなせないせいだと思っていました。でも、そうではなかった」

後方に一回転して着地した雪菜が、再び油断なく銀槍を構える。

「零式突撃降魔双槍は、霊力と魔力の双方を無効化する恐ろしい武器です。ですが、一度に消滅させられるのは、どちらか片方だけ。霊力と魔力を同時に消滅させることはできない、という欠点を持っていた。だからこそ失敗作として廃棄されたんですね」

淡々と追い詰めてくるような雪菜の指摘を、冥鴉は黙って聞いていた。

七式突撃降魔機槍の神格振動波は、〝静寂破り〟の能力を阻害する。それはすなわち〝静寂破り〟が、霊力ではなく魔力によって駆動する能力だということを示している。

にもかかわらず、霊力と魔力を無効化するはずの零式突撃降魔双槍が、〝静寂破り〟の攻撃を防げなかった理由――

それは冥鴉があの瞬間、雪菜の霊力を無効化していたからだ。霊力を打ち消している間は、冥鴉は魔力による攻撃を防げない。逆に魔力を打ち消そうとすれば、霊力に対して無防備になる。古城の眷獣に襲われた瞬間、雪菜の槍が彼の身体に届いたように。

「そう――こんな不完全な武神具を、私は自分の作品として認めたくなかった。だからこその〝廃棄兵器〟です」

自らが構えた黒槍を、冥鴉が憎々しげに見下ろしていた。

「ですが、気づくのが遅すぎましたね。〝聖殲〟の世界変容の力と併用することで、

零式突撃降魔双槍の欠陥は補える。あなた方には最初から勝ち目などありはしないのですよ！」

冥駕が、再び空中に深紅の弾丸を創り出す。〝聖殲〟の力を支えているのは、絃神島の表面を流れる龍脈だ。この島の上にいる限り、冥駕はほぼ無尽蔵に魔力を使える。このまま戦いが長引けば、先に力尽きるのは古城たちのほうだ。

だがそれでも、古城の表情に動揺はない。

「そうでもないぜ！　疾く在れ、十番目の眷獣、〝麝羯の瞳晶〟――！」

「なに――！」

古城が召喚したのは、銀水晶の鱗を持つ美しい魚竜だった。前肢は半透明な翼であり、山羊に似た螺旋状の角もまた光り輝く水晶柱だ。

その水晶柱の輝きに魅入られたように、〝アベルの巫女〟が動きを止めた。冥駕の全身を覆い隠していた、深紅の弾丸も消滅する。

「第四真祖の眷獣――!?　魅了の力か！　まさか〝女教皇〟を操ったのか!?」

古城の眷獣が、思念体である〝アベルの巫女〟を支配した。そのことに気づいた冥駕が、零式突撃降魔双槍を一閃して、眷獣の魔力を断ち切ろうとする。

その間に古城は、小柄な担任教師を振り返って叫んでいた。

「那月ちゃん、頼む！」

「ふん」

一瞬で古城の意図を読み取った那月が、空間制御で門を開く。

空間を歪めての転移先は、キーストーンゲート第零層の上空だった。前回の戦闘で大きな被害を受けたこの区画に、一般人が立ち入ることはない。古城が少しばかり派手に力を使っても、市民を巻きこむ心配はなかった。

「行くぜ、絃神冥駕！　疾く在れ、〝水精の白鋼〟！　〝双角の深緋〟！　〝夜摩の黒剣〟！」

掌握している眷獣を、古城は片っ端から召喚していく。巨大な蛇の下半身を持つ水の精霊が、緋色の双角獣が、そして重力を操る巨大な剣が、冥駕を目がけて無制限に魔力を開放する。

「なんという……愚かな真似を……！」

深紅の障壁を展開しながら、冥駕がうめいた。

眷獣たちが放った魔力の余波で、キーストーンゲート周辺には破壊の嵐が吹き荒れていた。人工の大地が裂け、建物は崩れ、あちこちで浸水の被害が発生している。

冥駕を護る深紅の障壁が、不安定に揺らいで火花を散らした。龍脈から魔力を供給されている〝聖殲〟の力は無限だが、それを制御する〝アベルの巫女〟の演算能力には限界がある。

物質還元と暴風、重力――それぞれ属性の異なる魔力を無効化するために、彼女は凄まじい演算負荷に耐えているのだ。

だからといって、零式突撃降魔双槍の魔力無効化能力は使えない。膨大な神気をまとった雪

菜が、銀色の槍を構えているからだ。もしも冥駕が零式突撃降魔双槍で古城の魔力を無効化しようとすれば、その瞬間、彼女の銀槍が冥駕を襲ってくるだろう。

そして――

「まだだ！　疾く在れ、〝獅子の黄金〟！　〝甲殻の銀霧〟！　〝神羊の金剛〟！」

古城はさらに新たな眷獣たちを召喚した。新たな属性の魔力攻撃が、四方から一斉に冥駕を襲う。〝アベルの巫女〟にかかる負荷が飛躍的に増加して、障壁の揺らぎが頻度を増していく。

「そうか。第四真祖の眷獣が持つ多様な属性は、〝聖殲〟に対抗するための力ですか――」

深紅の粒子の逆流によって傷つきながら、冥駕が唇を歪めて笑った。

世界最強の人造の吸血鬼――第四真祖は、咎神カインを倒すための殺神兵器だ。そんな危険な存在に、十二体もの眷獣が、意味もなく与えられたはずもない。

「ですが、不完全なる第四真祖よ――それだけの眷獣の同時使用に、あなたの精神がいつまで耐えられますか？　やはりあなたは私の脅威ではない――！」

冥駕が勝ち誇ったように告げてくる。六体もの眷獣の同時攻撃でも、彼の障壁の防御は押し切れない。いずれ古城は力尽き、そうなれば〝聖殲〟を止められる者はもういない。

だがそれでも、古城は獰猛な笑みを浮かべて首を振り、

「そうだな。俺と姫柊だけが相手ならな――」

「なに……!?」

瞳孔の開ききった冥駕の目が、驚愕に大きく見開かれる。彼が見つめていたのは、〝カインズ・コフィン〟――巨大潜水艇の船上だ。その上に堂々と停まっているのは、赤い有脚戦車である。

その戦車の前肢に装着されたドリルが、潜水艇の船体をぶち破り、穿たれた大穴から一人の少女が姿を現していた。センスよく着崩した制服と、華やかな髪型。いかにも今ドキ風の女子高生である。彼女が小脇に抱えているのは、市販品のありふれたノートPCだ。

『お待たせしたでござるな、女帝殿――』

有脚戦車の操縦者が、大仰な口調で彼女に呼びかける。

潜水艇の中から這い出してきた少女は、目覚めた直後のように大きく背伸びして息を吐き、

「ほんと、待ちくたびれたわよ。こっちはもう暇で暇で大変だったんだから」

そう言って彼女はノートPCを無造作に開いた。ネイルでカラフルに彩った指先が、なめらかにキーボードに触れていく。

「ま、おかげで、仕返しの準備はきっちり整ってるわけだけど――行くわよ、モグワイ！」

『ククッ、了解だぜ、嬢ちゃん！』

やけに皮肉っぽい合成音声が、冥駕の頭上から響いてくる。

その声を発したのは、亡霊のように浮かぶ傷だらけの少女だ。彼女の身体を構成する深紅の粒子が、さらさらと崩れて形を変えていく。美しくも醜い少女の姿から、少し不細工なぬいぐ

るみ型のアバターへと。

「なっ!?」

冥駕の周囲を覆っていた、深紅の粒子が消失した。〝アベルの巫女〟が消滅し、〝聖殲〟の制御を乗っ取られたのだ。

だが、〝聖殲〟の力が完全に消滅したわけではない。モグワイと呼ばれたアバターから、深紅の弾丸がいくつも放たれて、破壊されたキーストーンゲートへと降りそそぐ。

キーストーンゲートの建物に、異変が起きたのはその直後のことだ。

塩の柱となって崩れ落ちたビルが、壊れたはずの外壁が、第四真祖の眷獣が残した破壊の爪痕が――深紅の輝きに包まれて一瞬のうちに修復されていく。〝聖殲〟が引き起こす世界の変容を逆流させて、破壊された街を再生したのだ。おそらくは冥駕に殺された魔導打撃群（SG）の隊員たちも。

「藍羽浅葱……これが本物の〝カインの巫女〟の力……か」

地上に取り残された絃神冥駕が、愕然と声を震わせた。

彼の背後に〝アベルの巫女〟はもういない。浅葱が絃神島のメインコンピューター――五大主電脳（ファイブエレメンツ）を乗っ取り返したことで、〝アベルの巫女〟は消滅したのだ。

「そうか……第四真祖の攻撃は、最初から〝女教皇〟の演算能力を奪うためのものだったのか。〝女教皇〟の演算能力が低下すれば、藍羽浅葱が五大主電脳を奪い返すと確信して――」

冥駕が、ふらつきながら立ち上がって黒槍を構えた。彼のうつろな瞳が見つめているのは、雪菜だった。カインの完全復活という彼の望みが絶たれたとしても、模造天使へと近づきつつある雪菜への憎悪だけは消えていないのだ。

そして冥駕の手の中には、いまだ零式突撃降魔双槍が残されている。霊力を無効化するその槍は、模造天使をも斃し得る呪いの槍なのだ。

そんな冥駕の前に、立ちはだかったのは古城だった。

「――終わりだ、紘神冥駕」

古城が静かに言い放つ。掲げた古城の右腕から洩れ出したのは、鮮血にも似た魔力の霧だ。

「オオオオオオオオオオオオ――ッ！」

紘神冥駕が絶叫する。黒槍の刃に複雑な魔術紋様が浮き上がり、魔力を無効化する眩い輝きに包まれる。

そのとき静かに響き渡ったのは、少女の口から紡がれる荘厳な祝詞だった。

銀色の槍を掲げた雪菜が舞っている。神に勝利を祈願する剣士のように。あるいは勝利の予言を授ける巫女のように。

「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」

「焔光の夜伯の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ――」

神気の輝きをまといながら、雪菜が疾った。

同時に古城が魔力を開放していた。荒れ狂う魔力の塊が、実体を持つ幻獣の姿へと変わる。それは水銀色の鱗に包まれた巨大な双頭の龍だった。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

「疾く在れ、〝龍蛇の水銀〟――！」

世界最強の吸血鬼の少年と、その監視者の少女の声が同時に響いた。

魔力と神気の同時攻撃。そして冥駕の黒槍は、その両方を同時には無効化できない。

「なぜだ……おまえたちも獅子王機関に利用された犠牲者……なのに……どうして……」

冥駕の黒槍が、双頭龍の顎に喰われて半ばから砕け散る。

そして〝雪霞狼〟の神気をまともに浴びた冥駕の痩身が、ぐらりと揺れた。見えない光をつかもうとするように、彼は虚空に手を伸ばし、やがてその場に膝から倒れこむ。

「冬佳……」

冥駕の唇が、かすかに震えた。砕けた黒槍の破片が、コンクリートの地面に落ちて、カツン、と硬い音を立てた。

あとに残されたのは、穏やかな静寂――

それは〝聖殲〟の終結を告げる静寂だった。

10

「終わった、のか……？」

動かなくなった冥駕を見下ろして、古城が不安そうに呟いた。

銀色の槍をそっと下ろした雪菜が、ゆっくりと古城に向き直る。彼女が浮かべていたのは、ひどく儚げな微笑みだ。今にも消えてしまいそうなその弱々しい表情に、古城の心臓が、ドクン、と激しく脈打った。

「姫柊！」

呆然と見つめる古城の前で、雪菜の身体が、ふらりと揺れた。咄嗟に駆け寄った古城の腕の中に、彼女はゆっくりと倒れこんでくる。異様なほどの雪菜の軽さに、古城の背筋が総毛立つ。

「ごめん……なさい……先輩」

囁くような小さな声で雪菜が言う。古城はそんな彼女を必死で抱き寄せ、絶叫する。

「しっかりしろ、姫柊！　おまえは、これからもずっと俺を監視するんじゃなかったのかよ!?」

「すみません……でも……」

雪菜が顔を上げて弱々しく首を振る。彼女が浮かべているのは、羞恥の表情だ。ひどく言いづらそうに逡巡して、雪菜はぽつりと言葉を続ける。

「お腹が、空いてしまって……」
「は？」
その瞬間の古城はおそらく、どうしようもなく間抜けな顔をしていたことだろう。
沈黙を続ける古城の耳に、くるくるという可愛らしい音が聞こえてくる。雪菜の腹が鳴った音だった。
「いや……天使化はどうなったんだ？　体調は？」
ようやく気を取り直して、古城が訊いた。あれだけ思わせぶりに倒れておいて、その理由が、腹が減って目を回しただけ、といわれても今さら納得できない。
それについては雪菜も申し訳なく思っているのか、困ったように目を伏せて、
「あの……大丈夫、みたいです。霊力の暴走も起きてませんし」
「あんだけ派手に〝雪霞狼〟を使ったのに？」
「それはたぶん……指輪……が……」
そう言って雪菜が、左手をかざした。彼女の細い薬指に嵌まっているのは、縁に渡された銀色の指輪だ。指輪の中心に走っている細いスリットが、気のせいかほのかに赤く輝いている。
どういうことだ、と首を傾げながら、古城たちは顔を見合わせた。
その疑問に答えてきたのは、古城たちの足下に現れた一匹の黒猫だった。
『どうやら上手くいったみたいだね』

「ニャンコ先生……！」

古城は驚いて黒猫に手を伸ばす。縁堂稼の使い魔は、そんな古城の腕を伝って、雪菜の肩によじ登った。雪菜の指輪の状態を一瞥し、満足そうに喉を鳴らす。

「師家様……この指輪はいったい……」

自分の肩に座る黒猫に、雪菜が訊いた。黒猫はその質問に答える代わりに、古城を見つめてニヤリと笑う。

「第四真祖の坊や……これで雪菜は、おまえさんの〝血の従者〟になったわけだ」

「血の……従者……？」

古城が困惑したように唇を曲げた。黒猫は深々とうなずいて、

「〝血の伴侶〟あるいは〝花嫁〟とも言うね。主である吸血鬼から不死の力を分け与えられた疑似吸血鬼さ」

「は、花嫁!?」

黒猫の言葉を聞いた雪菜が、小さく声を上擦らせる。

吸血鬼に血を吸われたものは吸血鬼になる——それはありがちな迷信だが、まるっきりのデタラメというわけでもない。吸血鬼の肉体の一部を体内に受け入れた人間は、主人である吸血鬼と同じ、不死の肉体を手に入れるのだ。それが〝血の従者〟と呼ばれる疑似吸血鬼である。

「……って、あんた、姫柊を疑似吸血鬼にしたってことか!?」

古城は激昂して黒猫を睨みつけた。

疑似吸血鬼は必然的に、主人である吸血鬼とともに永遠の歳月を生きることになる。それが必ずしも幸せなこととは限らない。それなのに縁堂縁は、雪菜を古城の〝従者〟にしたというのだろうか。当事者である古城と雪菜の気持ちを無視してまで。

「まあ、正確にいえば今の雪菜は、本物の〝花嫁〟じゃない。その指輪を呪術の触媒にして、霊的経路をつないだだけだよ。いうなれば、ただの〝婚約者〟ってとこか。完全な〝血の従者〟になってしまったら、霊力まで使えなくなってしまうからね」

「だからって……」

そんな勝手なことが許されるのか、と古城は顔をしかめて唸る。一方の雪菜は、耳まで顔を真っ赤に染めて、「こ、婚約者……」などと身悶えしていた。

黒猫は、呆れたように溜息をついて、

「第四真祖の坊や。おまえさんの中には、模造天使の神気を喰らって、どことも知れない異空間に吹っ飛ばしちまう眷獣がいたはずだね」

「あ、ああ」

古城はぎこちなくうなずいた。叶瀬夏音との戦いの中で、神気を浴びて死にかけた古城は、その〝次元喰い〟の眷獣のおかげで、どうにか生き延びたのだった。そのとき古城に血を与え、眷獣を覚醒させてくれたのはほかならぬ雪菜である。

「その指輪には、おまえさんの眷獣の力を借りて、〝雪霞狼〟が生み出す余剰な神気を消滅させる効果があるのさ。まあ、実際に上手くいくかどうかは、試してみるまでわからなかったんだが――」

「こいつをつけてれば、姫柊は今までどおりの生活が送れるってことか？」

「おまえさんが雪菜の近くにいる限りはね。まあ、この島の中くらいなら、離れても問題はないはずだが」

黒猫が何気ない口調で言う。それを聞いた雪菜は、ハッと驚いたように顔を上げ、

「じゃあ、わたしの任務は……」

「ま、当分は第四真祖の監視役を続けてもらうさ。獅子王機関には、無駄飯喰らいを養うような余裕はないからね」

黒猫が、素っ気なく呟いて鼻を鳴らした。

「師家様……」

雪菜の表情が明るくなる。悲壮感を漂わせていたさっきまでの彼女とは別人のような、幼く柔らかな表情だ。

しかし古城は、今イチ釈然としない、というふうに目を眇め、

「霊的経路をつなぐ指輪か……どういう原理で出来てるんだ？」

「なんだ、知らないのかい？　〝血の従者〟を創り出すためには、主人である吸血鬼が肉体の

一部を相手に与える必要があるのさ。その指輪の中には、あんたの肋骨の欠片が入ってる」

「俺の肋骨の欠片？　そんなものいつの間に……あ……!?」

古城は、縁堂縁の本体と最初に顔を合わせたときのことを思い出す。あのとき彼女は、特に理由もなく古城を襲って、古城の胸をぶった斬ったのだ。

もしもあの攻撃が、古城の肋骨を手に入れるためのものだったとしたら――縁は最初から、雪菜を救うつもりでこの絃神島に来たことになる。

だったら最初からそう言えよ、と古城は、思わずふて腐れたように黒猫を睨み、

「ていうか、他人の肋骨が入ってる指輪なんて、気持ち悪くないか？」

「唾液だの髪の毛だのよりはマシだろ。ちゃんと消毒して焼き固めてあるから、汚くはないはずだよ――それにまあ、気持ち悪いかどうかは相手にもよるさ」

そう言って黒猫は、雪菜の横顔とちらりと一瞥した。

雪菜は自分の左手を何度も閉じたり開いたりして、薬指の指輪を満足そうに眺めている。彼女がどういう気持ちでそれを見ているのか、古城にはさっぱりわからない。

だが、そんな雪菜の姿を見ているうちに、ふと古城の脳裏をある考えがよぎった。

「なあ、絃神冥駕のやつ……なんで、あの黒い槍を失敗作と呼んでたんだろうな」

唐突な古城の問いかけに、ん、と黒猫がヒゲを震わせる。

魔力だけではなく、霊力をも打ち消す武神具。本来なら、獅子王機関の技術者である冥駕が、

そんなものを必要とするとは思えない。雪菜が零式突撃降魔双槍に苦戦したように、霊力を無効化する武器は、剣巫の戦闘力をも奪ってしまうからだ。

だがそれが、霊力の暴走によって、天使化しつつある恋人を救うための道具だとしたら――

「もしかしてあいつはあの槍を、冬佳さんって人のために造ろうとしてたんじゃないのか？あの槍はあいつにとって、姫柊の指輪と同じものだったんじゃ……」

「かも知れないね。本人は絶対に認めようとはしないだろうけどね」

黒猫が、どことなく寂しげな口調で呟いた。

雪菜は無言で唇を噛みながら、倒れたままの冥駕へと視線を向ける。

「え……!?」

その雪菜の表情が強張った。古城もつられて振り返り、そして呆然と目を見張る。

力尽きて倒れたはずの冥駕の姿が見当たらない。残っているのは、砕けた黒槍の破片だけだ。

「紘神冥駕が、消えた……!?」

為すすべもなく立ち尽くして、古城が呟く。

膨大な神気を浴びた冥駕は、動けるような状態ではなかった。それどころか肉体を維持することすら困難だったはずなのだ。しかし実際に冥駕の姿は消えている。

「あいつ……どこに……？」

古城が誰にともなく問いかける。

その問いかけに答える者はなく、ただ眩い陽射しだけが、午後の絃神島を静かに染めている。

11

その少女は、キーストーンゲート最深部の通路で彼を待っていた。

野暮ったい眼鏡をかけた地味な風貌の少女だ。小脇には分厚い本を抱えてる。

人工島管理公社の上級理事だけに通行を許された極秘の隠し通路だが、彼女がそこに現れたことに、矢瀬顕重は特に驚きもしなかった。

「獅子王機関三聖――閑古詠か。絃神冥駕に手酷くやられたと聞いていたが、もう出歩いていいのかね？」

顕重が冷ややかに問いかける。だが、彼女を気遣う顕重の状態も、決して万全とは言い難い。全身の肉はごっそりとえぐられ、仕立てのいい和服は鮮血を吸ってドス黒く染まっている。絃神冥駕の深紅の弾丸で撃ち抜かれた傷である。

そんな顕重の姿をじっと見つめて、少女は恭しく頭を下げる。

「おかげさまで」

そして彼女の視線が外れた一瞬の隙を衝いて、顕重は過適応能力を発動していた。念動力によって生み出される不可視の刃。視界に映るものすべてを斬り裂くことが可能な能力だ。

魔術による攻撃ではないために、いかなる結界でも防げない。剣巫の未来視をもってしても、不可視の刃を見切ることは不可能だ。獅子王機関の三聖が相手でも、確実に斃す攻撃――ただし本当に攻撃することができれば、だが。

「ぐお……っ！」

一瞬の静寂が訪れて、それが破れた――それを感じたときには、顕重の身体は、通路の壁に叩きつけられていた。顕重の両腕には、破れた本のページが深々と突き刺さり、彼の身体を、縫い止めている。そして顕重の能力は発動していない。

顕重の能力が発動する寸前に、少女の攻撃は終わっていたのだった。

「無駄ですよ、矢瀬顕重。あなたの能力は私には効きません」

本の表紙を閉じながら、少女が静かに語りかけてくる。

フッ、と顕重は自虐的に微笑んで、

「〝静寂破り〟……絶対先制攻撃の権利か。忌々しいものだな。貴様の一族も、我らと同じ咎神の末裔だろうに」

「ええ。あなた方と同じ、呪われた一族です」

勝ち誇ることもなくうなずいて、少女は一通の書類を取り出した。

裁判所発行の公式文書――逮捕状だ。

「矢瀬顕重……獅子王機関の名において、あなたの身柄を拘束します。容疑は大規模魔導テロ

の実行及び幇助。また特区治安条例に対する重大な違反が多数報告されています」
「獅子王機関の権利で私を拘束か……そんなことができると思っているのかね？」
激痛に頬を歪めながらも、顕重が冷静に訊き返す。己の権力を使えば、獅子王機関ごとき、どうにでもできる――そんな自信に裏打ちされた傲慢な口調だ。だが、
「――あなたが矢瀬財閥の会長である間は無理だったでしょうね」
顕重の質問に答えたのは古詠ではなく、通路の奥から現れた若い男だった。
男の姿に気づいた顕重が、かすかに瞼をひくつかせる。
「そうか、幾磨……貴様の手引きか……」
顕重が平坦な声を出す。内心の動揺を押し隠し、どうにか威厳を保とうとしている――そんな顕重の反応が、逆に彼の驚きの大きさを表していた。実の息子たちを使い捨ての道具のように扱ってきた男が、今、初めて、切り捨てられる側へと追いやられたのだ。
矢瀬幾磨は、そんな父親の動揺に構わず、普段どおりの事務的な口調で言った。
「先程の長老会議で、死亡した先代会長、矢瀬顕重に代わる新しい長が選出されました。新総帥は基樹です」
「なに……？」
「驚くことはないでしょう。やつも禁忌四字の正統な末裔だ。さらには獅子王機関三聖の長や、〝カインの巫女〟――そして第四真祖の盟友でもある。MARのシャフリヤル・レン総帥の支

持も取りつけました。今回の〝聖殲〟が成功していれば、状況は変わっていたのでしょうが」

馬鹿な、と顕重が声もなく呟く。どこで読みを誤ったのか、顕重にはそれがわからない。取るに足らないと切り捨てきた者たちが、いつの間にか力を手に入れ、顕重の地位を脅かそうとしている。紘神冥鴛の裏切りや、〝聖殲〟の失敗だけが原因ではない――まるでこの〝魔族特区〟そのものが意思を持ち、顕重を排除しようとしているかのようだった。

「貴様らごとき小物に、この〝魔族特区〟を仕切れると本気で思っているのか？　紘神島が抱える闇は、人類の闇と同義だぞ？」

生の感情を剝き出しにして、顕重が吼えた。

幾磨は無感情に溜息をつき、どこか寂しげな微笑を浮かべる。〝静寂破り〟と呼ばれた少女も、同じような表情を浮かべていた。

そんなことはとっくに知っている、と言いたげな表情だ。

「覚えておきますよ、父上」

傷ついた父親に言い残し、そして幾磨は暗い通路の奥へと消えていく。

紘神島の、闇の奥へと――

紘神冥駕は、人工島西地区の路地裏を彷徨っていた。

身体の中に縫いこんであった呪符を使って、空間転移の術式を使ったのだ。苦痛を感じない僵尸鬼の肉体ならではの裏技だった。そんな手段でも使わない限り、あの縁堂縁を出し抜けるはずもない。

だがその不死身の肉体も、今は崩壊を始めていた。全身に深い亀裂が走り、パラパラと乾いた砂細工のように崩れ落ちていく。姫柊雪菜に流しこまれた、膨大な神気のせいである。死体から生み出された肉体が浄化され、本来あるべき姿へと戻りつつあるのだ。

「〝女教皇〟……！」

精神感応の術式を使って、冥駕は〝女教皇〟に呼びかける。

彼女のアバターは、藍羽浅葱に乗っ取られたが、死体から再生された〝女教皇〟の本体は、MARの研究所に今も残されているはずだった。その〝女教皇〟の助けがあれば、冥駕は今もまだ〝聖殲〟の力を使える。もちろん〝棺桶〟の管理者権限を失ってしまった以上、大規模な戦闘は不可能だが、壊れかけた肉体を修復する程度の負荷には耐えられるだろう。否、耐えてもらわなければ困るのだ。

「返事をしろ、〝女教皇〟……〝アベルの巫女〟……！」

崩壊の恐怖に抗いつつ、冥駕は〝女教皇〟に呼びかける。しかし彼女からの応答はない。

〝女教皇〟との精神感応を可能にする術式は、MARに与えられたものだ。

その精神感応術式が使えない以上、考えられる可能性はひとつだった。

ＭＡＲは絃神冥駕を切り捨てたのだ。矢瀬顕重を裏切り、しかも第四真祖に敗北した冥駕に、もはや利用価値はない。それが彼らの判断なのだろう。

「くそ……」

路地の壁に手を突いて、冥駕が荒々しく息を吐く。その指が何本か半ばからへし折れ、砂となって地面に散らばった。想像以上に肉体の限界が近いのだ。

そんな冥駕のすぐ近くから、愉しげな声が聞こえてくる。

「獅子王機関を裏切り、祖父を裏切り、矢瀬顕重を裏切った男が、最後はＭＡＲに裏切られて、捨てられたわけか。無様なものだね、絃神冥駕……」

「……っ!?」

冥駕は驚いて顔を上げた。路地の暗がりの奥に長身の男が立っている。純白のスーツに身を包んだ、金髪碧眼の吸血鬼の貴族だ。

「ディミトリエ・ヴァトラー……」

どうしてこの場所がわかったのか、と疑問を抱き、冥駕は自分の右腕に視線を落とした。第四真祖との最初の戦いで失い、ヴァトラーによって修復された腕だ。おそらくその修復作業の際に、発信器かなにかを仕込まれたのだろう。意外に芸の細かい男だ、と冥駕は感心する。

「キミにとっては残念な結末だったけれど、礼を言うよ、絃神冥駕。おかげで退屈せずに済ん

だ。いや、ずいぶん愉しませてもらったよ」

芝居がかった大げさな口調で、ヴァトラーが冥駕を賞賛する。

冥駕は呆れたように肩をすくめて、

「愉しんだ？　あなた方、魔族を滅ぼすための禁呪をですか？」

「もちろんさ。吸血鬼の真祖を滅ぼし得る力――素敵じゃないか」

ヴァトラーはそう言って美しく笑った。その瞬間、冥駕から表情が消える。

壊れかけた冥駕の肉体が、恐怖に震え始めていた。ディミトリエ・ヴァトラーという男が、紘神島に来てから繰り返してきた気まぐれな行動。それらが積み重なってひとつの形を作る。

それは恐ろしい想像だった。冥駕はそれに気づいてしまったのだ。

「そうか……ディミトリエ・ヴァトラー……あなたが紘神島に来た本当の目的は……」

ヴァトラーの美しい碧眼に睨めつけられて、冥駕はもはや動けない。

それは文字どおり、蛇に睨まれた――という状態だった。迂闊に動けばその瞬間に喰われる。逃走も平伏も、この美しい吸血鬼の貴族が許すことはないだろう。

唯一、彼が認める可能性があるとすれば、それは――

「〝聖殲〟の力――不完全とはいえ、まだ使えるんだろう？　試してみてはどうだい？」

ヴァトラーが、挑発するように告げてくる。そう。この男が望んでいるものは、常にひとつだけ――生死を賭した闘争だけだ。

「う……あああああああああああああぁ……っ！」

冥駕がついに絶叫した。ヴァトラーへと伸ばした冥駕の右腕が、光の粒子に包まれる。

〝女教皇〟の援護が受けられない以上、冥駕には深紅の弾丸は操れない。今の冥駕に出来るのは、自らの腕を生贄に捧げて〝聖殲〟の力を喚び出すことだけだ。

吸血鬼の異能の力を無効化する、世界変容の輝き。それを叩きこめば、たとえヴァトラーが相手でも斃せる可能性はゼロではない。そんな冥駕の必死の抵抗を、ヴァトラーはうっとりとした表情で眺めた。

「そうさ……それでこそ、このボクが喰らうに相応しい力だ……！」

ヴァトラーが、牙を剝く。彼が放った破壊的な魔力の波動は、傷ついた冥駕の肉体を一瞬で撃ち倒した。もはや〝聖殲〟の光など無意味だった。

硬直した冥駕の喉笛に、ヴァトラーが牙を突き立てる。戦王領域の〝蛇遣い〟がそこから吸い上げているのは、冥駕の濁った血液ではなかった。冥駕の過去の〝記憶〟そのものだ。

「ディミトリエ・ヴァトラー……あなたの目的は……〝聖殲〟の知識……咎神の叡智を……」

冥駕の最後の呟きは声にならない。その前に彼の喉笛は、喰いちぎられていたからだ。

限界を超えた冥駕の肉体は崩壊し、白煙を上げて跡形もなく消滅する。

人工島西地区の路地裏。絃神島の闇の中で、ヴァトラーは白い牙を鮮血でドス黒く染めながら、高らかに笑い出す。

「これで舞台は整った。さあ、最後の〝宴〟を始めよう。ともに美しく踊ってくれ、暁古城。美しく美しく美しく美しく美しく美しく美しく美しく美しく美しく――――」

†

夕暮れ――

古城と雪菜は浅葱を連れて、海沿いの歩道を歩いていた。

目的地は古城たちの自宅マンションだ。長時間の戦闘と疲労で古城たちの姿はボロボロだったし、おまけに浅葱は人目を惹きまくる。そんなわけでバスやモノレールを使うこともできず、三人は疲れた身体を引きずり、とぼとぼと歩き続けているのだった。

「なんであたしが、こそこそ顔を隠して歩かなきゃなんないわけ？」

じめじめと蒸し暑い中、野球帽とマスクを着用した浅葱が、古城に文句を言ってくる。

仕方ねーだろ、と古城は彼女を懸命になだめて、

「おまえは有名人だからなー。まあ、当分は我慢しろ。人工島管理公社が、事件のお詫びで、騒ぎが落ち着くまでは護衛をつけてくれるって言ってたし。そのうちみんな忘れるだろ」

「ううー……ネットの書きこみはモグワイに命令して片っ端から消させてるんだけど、キリがないわ。〝アベルの巫女〟を相手にしてるほうが、全然簡単だったわよ、もう！」

愛用のスマホの画面を眺めて、浅葱が深々と溜息をつく。

鬱陶しいといえば鬱陶しいが、彼女が文句を言いたくなる気持ちはよくわかった。二週間も潜水艇の中に閉じこめられて、しかもその間に、絃神島中に顔と名前が知れ渡っていたのだ。おまけに身に覚えのないプロモーションビデオまで撮影されていたりする。普通ならパニックになってもおかしくない状況だ。

市民の反応がおおむね好意的だったのは救いだが、それはそれで、見知らぬ人々に声をかけられまくって大変なことになったりもする。

そんなわけでこの先しばらく、思わぬ苦労を背負いこむ形になってしまった浅葱だった。

結局、〝聖殲〟のいちばんの被害者は、やはり彼女だったのだ。

「でも、藍羽先輩、体調は本当になんともないんですか？」

黒いギグケースを背負った雪菜が、怖ず怖ずと遠慮がちに浅葱に尋ねる。

二週間も幽閉されて、おまけに〝アベルの巫女〟と電子戦までやらかしたあとなのだ。本来なら即座に入院して、念入りな精密検査を受けるべきところである。

実際、南宮那月とリディアーヌが医療機関を手配しようともしたのだが、浅葱は、面倒臭い、のひと言でそれをばっくれ、現在に至る——というわけである。

しかし浅葱は、緊張感のない表情で首を振り、

「うん。まあ、潜水艇に閉じこめられてる間は時間停止状態っていうの？　冷凍保存みたいな

感じになってたらしいから。おかげでお腹空いちゃって――」

「コンビニのおにぎりを全部買い占めといて、文句言うなよ。レジの兄ちゃんが驚いてたぞ」

浅葱に聞こえるか聞こえないくらいの小声で、古城がぼそぼそと言い返す。

なにしろ今をときめくローカルアイドルが突然店に入ってくるや否や、おにぎり計三十個を買い占めた挙げ句に、店内イートインスペースですべて平らげてしまったのだ。バイト店員の青年の驚きは想像に難くなかった。

「ファミレスに入ろうとしたら騒ぎになって追い出されたんだから、仕方ないでしょ」

マスクの下の唇を尖らせながら、古城を恨みがましく見つめてくる浅葱。

そして浅葱は、くるりとその場で振り返って、後ろにいた雪菜に向き直り、

「それより、さっきから気になってたんだけど――姫柊さん、その指輪、どうしたの？」

「これ……ですか？」

雪菜がびっくりしたように目を見張る。たいして目立つデザインでもないその指輪の存在に、浅葱が目敏く気づいていたことに驚いたのだろう。

「これは、その、暁先輩に嵌めてもらったら抜けなくなってしまって――」

「は、はい？」

雪菜のたどたどしい説明を聞いた浅葱が、ギョッとしたように目を剝いた。

浅葱のその過剰な反応に、逆に雪菜が慌てふためいて、

「違うんです。あの、そういう意味じゃなくて、暁先輩はただ、おまじないということでわたしに嵌めてくれただけで――」

違うんです、と必死に言い訳する雪菜。なにひとつ間違ったことは口にしていないにもかかわらず、浅葱の機嫌は悪化する一方だ。

浅葱は、ギンッ、と殺気立った眼差しで古城を睨みつけ、

「ほー……どういうことか、詳しく聞かせてもらおうかしら？」

「いや、こっちもいろいろあったんだよ。おまえが閉じこめられてる間に」

「いろいろってなに!?」

「あー、だから、詳しく話すと、すげー面倒臭い話になっちまうんだが、つまりだな……」

浅葱に詰め寄られた古城が、億劫そうに口を開こうとする。

横断歩道の向こう側から、騒々しい叫び声が聞こえてきたのは、そのときだ。

「あー、いた！　雪菜ちゃん！」

父親の見舞い帰りとおぼしき暁凪沙が、古城たちを指さして絶叫する。

歩行者信号が青に変わると同時に、凪沙は猛然と古城たちに駆け寄り、そんな彼女の剣幕に、古城は不吉な予感を覚えた。

「な、凪沙？　どうしたんだ、おまえ、そんな血相変えて……」

「どうしたもこうしたもないよ！　古城君、雪菜ちゃんになんてことするの、馬鹿！　ケダモ

ノ！　雪菜ちゃん、大丈夫？　あたしは、なにがあっても雪菜ちゃんの味方だからね！」

古城の横っ面をトートバッグで殴りつけた凪沙は、雪菜の両手をしっかりと握り締め、目を潤ませながら早口でまくし立てる。古城と雪菜はわけがわからず、そんな凪沙を呆然と見返し、

「ケ……ケダモノ……!?」

「な、凪沙ちゃん？」

「それはたしかに、この歳で叔母さんって呼ばれるのはちょっと抵抗あるけど、あたし、雪菜ちゃんがお義姉ちゃんになるんだったら全然オッケーだし、雪菜ちゃんの赤ちゃんだったら絶対可愛いと思うし。それより名前どうしよう？　男の子かな？　女の子かな？」

「あ、赤ちゃん……？」

凪沙の爆弾発言を聞いた浅葱が、かくん、と放心したように顎を落とす。

雪菜は本気で困ったように視線を彷徨わせ、

「ご、ごめん、凪沙ちゃん。いったいなんの話だか……」

「隠さなくてもいいよ。大丈夫だから。煌坂さんに全部聞いたから！」

「紗矢華さんに？」

さすがに不安を覚えてきたのか、雪菜が表情を曇らせた。

あいつはなにをやってるんだ、と古城は思わず頭上を仰ぐ。

凪沙は悪びれることもなく、記憶を辿るように自分の唇に手を当て、

「古城君のせいで雪菜ちゃんの身体が大変なことになってて、検査薬で判定したら陽性だったって。そういえば雪菜ちゃん、最近ずっと元気なかったし、食事も摂ってなかったし……」

「あ……」

なにか思い当たることがあったのか、雪菜が大きく目を瞬いた。

そして彼女はクッと小さく噴き出すと、うつむいて肩を震わせ始める。必死で笑いをこらえているのだ。紗矢華や凪沙のとんでもない誤解の内容が、愉快に思えてきたのだろう。

しかしそんな雪菜の姿は、傍目にはむせび泣いているように見えなくもない。

「ど、どういうことなのよ、古城っ!?　検査薬で陽性って……あんた、まさかあの指輪は、男としての責任を取るつもりで……!?」

古城の胸ぐらをつかみ上げた浅葱が、キンキンと甲高い声で問い詰めてくる。

頸動脈を圧迫されてロクに呼吸も出来ないまま、古城は必死に声を張り上げた。

「違うっ！　姫柊も笑ってないで助けろっ！　話を聞けっ！　誤解だあ――――っ！」

世界最強の吸血鬼の悲鳴が、潮風に乗って黄昏の空へと溶けていく。

それは新たな〝宴〟が始まるまでの束の間の安寧。

彼らがその事実に気づくのは、まだ少しだけ先のことである。

あとがき

ふと気づけば前の巻から五カ月も空いてしまっていました。お久しぶりです。そんなわけで、『ストライク・ザ・ブラッド14』をお届けしております。

この巻は〝聖殲〟の謎解き編です。人類と魔族の関係、紘神島にまつわる陰謀、紘神冥駕の正体などなど、これまで古城たちを思い悩ませてきた多くの謎が、がっつり解き明かされているはずです。その結果、登場人物たちの何人かに大きな転機が訪れていたりもするのですが、そのあたりのちょっとした変化を楽しんでいただければ幸いです。

今回のエピソードで個人的に印象に残っているのは、やはり浅葱のアイドルデビューかなあ、と。ポテンシャル的にはアイドルになってもおかしくないキャラではあるのですが、性格的にとことん向いてなさそうということで、アイドルとしてどんな振る舞いをしていたのか、想像すると楽しいです。そしてすでに本文を読んでくださった皆様はお気づきでしょうが、今回は古城と雪菜の今後の関係性において、わりと重要な話でした。そのわりに本人たちがやってることは、普段とあまり変わらなかったような気もするのですが、のちのち例のアイテムが、大

きな意味を持ってくるのではないかと。

それから忘れてはならないのが、もうひとつの吸血シーンでしょうか。ついに古城以外の吸血鬼が（あるいは、おまえらかよ）、という感じで盛り上がってもらえると嬉しいです。

すでにご存じかと思いますが、本巻の刊行と前後して、『ストライク・ザ・ブラッド』新作ドラマCD、そして新作OVAが発売される予定になっております。ドラマCDのアフレコ現場には私も少しだけお邪魔したのですが、久々に集まってくださったキャストの皆様の熱演のおかげで、ものすごく楽しい作品に仕上がっております。完成間近のOVAについてもTVアニメ版同様、素晴らしい制作陣のご尽力をたまわり、応援してくださった皆様のご期待に添える内容になっていると思います。ぜひぜひ、ご視聴よろしくお願いいたします。

また『月刊コミック電撃大王』誌上ではコミック版『ストライク・ザ・ブラッド』が連載中、この文庫の発売に先駆けて、単行本第七巻も発売になっております。最新刊、戦闘シーンの迫力はもちろん、ラ・フォリアが（もちろん雪菜たちも）可愛くて最高でした。こちらもぜひ。

さてこの『ストライク・ザ・ブラッド』も、いよいよ次の巻で第一部終了の予定です。シリーズそのものは、もう少し続けたい気持ちがあるのですが、いちおう一区切りということで。

どうぞ最後まで古城たちの活躍におつき合いください。

いつも本作を美麗なイラストで彩ってくださるマニャ子さま、今回も大変お世話になりました。本当にありがとうございます。コミカライズを担当してくださっているＴＡＴＥ先生、毎回素晴らしい作品をありがとうございます。

そして本書の制作・流通に関わってくださったすべての皆様にも心からお礼を申し上げます。

もちろんこの本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗

◉三雲岳斗著作リスト

「コールド・ゲヘナ」（電撃文庫）
「コールド・ゲヘナ②」（同）
「コールド・ゲヘナ③」（同）
「コールド・ゲヘナ④」（同）
「コールド・ゲヘナ　あんぷらぐど」（同）
「レベリオン　放課後の殺戮者」（同）
「レベリオン　拭殺校庭園」（同）

「レベリオン　炎を背負う少年たち」（同）
「レベリオン　彼女のいない教室」（同）
「レベリオン　楽園に紅き翼の詩を」（同）
「i・d・Ⅰ　神使いたちの長い放課後」（同）
「i・d・Ⅱ　seven」（同）
「i・d・Ⅲ　滅びの王国」（同）
「道士さまといっしょ」（同）
「道士さまにおねがい」（同）
「アスラクライン」（同）
「アスラクライン②　夜とUMAとDカップ」（同）
「アスラクライン③　やまいはきから」（同）
「アスラクライン④　秘密の転校生のヒミツ」（同）
「アスラクライン⑤　洛高アンダーワールド」（同）
「アスラクライン⑥　おしえて生徒会長！」（同）
「アスラクライン⑦　凍えて眠れ」（同）
「アスラクライン⑧　真夏の夜のナイトメア」（同）
「アスラクライン⑨　KLEIN Re-MIX」（同）
「アスラクライン⑩　科學部カイメツ」（同）

「アスラクライン⑪　めぐりあい異世界」（同）
「アスラクライン⑫　世界崩壊カウントダウン」（同）
「アスラクライン⑬　さくらさくら」（同）
「アスラクライン⑭　The Lost Files」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド1　聖者の右腕」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド2　戦王の使者」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド3　天使炎上」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド4　蒼き魔女の迷宮」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド5　観測者たちの宴」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド6　錬金術師の帰還」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド7　焔光の夜伯」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド8　愚者と暴君」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド9　黒の剣巫」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド10　冥き神王の花嫁」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド11　逃亡の第四真祖」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド12　咎神の騎士」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド13　タルタロスの薔薇」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド14　黄金の日々」（同）

「サイハテの聖衣（シュラウド）」（同）
「サイハテの聖衣（シュラウド）2」（同）
「M・G・H　楽園の鏡像」（単行本　徳間書店刊）
「聖遺の天使」（単行本　双葉社刊）
「カーマロカ」（同）
「煉獄の鬼王」（双葉文庫）
「海底密室」（デュアル文庫）
「ワイヤレスハート・チャイルド」（同）
「アース・リバース」（スニーカー文庫）
「ランブルフィッシュ①　新学期乱入編」（同）
「ランブルフィッシュ②　中間試験暴走編」（同）
「ランブルフィッシュ③　場外乱闘恋心編」（同）
「ランブルフィッシュ④　伝説崩壊編」（同）
「ランブルフィッシュ⑤　凶天使襲来編」（同）
「ランブルフィッシュ⑥　亡霊殲滅編〈上〉」（同）
「ランブルフィッシュ⑦　亡霊殲滅編〈下〉」（同）
「ランブルフィッシュ⑧　決戦前夜秘湯編」（同）
「ランブルフィッシュ⑨　大会開幕奇襲編」（同）

「ランブルフィッシュ⑩　学園炎上終幕編」（同）
「ランブルフィッシュ　あんぷらぐど」（同）
「ダンタリアンの書架1」（同）
「ダンタリアンの書架2」（同）
「ダンタリアンの書架3」（同）
「ダンタリアンの書架4」（同）
「ダンタリアンの書架5」（同）
「ダンタリアンの書架6」（同）
「ダンタリアンの書架7」（同）
「ダンタリアンの書架8」（同）
「旧宮殿にて」（単行本　光文社刊）
「少女ノイズ」（同）
「少女ノイズ」（光文社文庫）
「絶対可憐チルドレン・THE NOVELS」（ガガガ文庫）
「幻獣坐 -The Scarlet Sinner -」（講談社ノベルズ）
「幻獣坐2 -The Ice Edge -」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「三雲岳斗先生」係
「マニャ子先生」係

本書は書き下ろしです。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド14
黄金の日々

三雲岳斗

発　行　2015年11月10日　初版発行

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
03-3238-1854（営業）

装丁者　荻窪裕司(META＋MANIERA)
印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークスお問い合わせ窓口あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

©2015　GAKUTO MIKUMO

ISBN978-4-04-865503-3　C0193　Printed in Japan

電撃文庫　http://dengekibunko.jp/
株式会社KADOKAWA　http://www.kadokawa.co.jp/

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド1 聖者の右腕

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

世界最強の吸血鬼、第四真祖の力を手に入れながらも平穏な日常を願う高校生、暁古城。そんな彼の前に現れた「監視役」とは……!? 待望の三雲岳斗新シリーズ開幕!!

み-3-30　2090

ストライク・ザ・ブラッド2 戦王の使者

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

世界最強の吸血鬼・暁古城と、彼を監視する雪菜の前に、欧州の真祖〝忘却の戦王〟の使者が現れる。その目的は古城に対する宣戦布告か、それとも……。

み-3-31　2191

ストライク・ザ・ブラッド3 天使炎上

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

失踪したクラスメイトを追跡して、無人島に漂着した古城と雪菜。そこで彼らが遭遇したのは、魔族特区で生み出された対魔族兵器「人造天使」だった……。

み-3-33　2280

ストライク・ザ・ブラッド4 蒼き魔女の迷宮

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

盛大なお祭りが開催されている絃神島を、古城の幼なじみが訪れる。だがその旧友との再会が、古城の肉体に驚愕の異変を引き起こすことに……!

み-3-34　2351

ストライク・ザ・ブラッド5 観測者たちの宴

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

監獄結界から脱出した〝書記の魔女〟の目的は、絃神島から異能の力を完全に消し去ることだった。魔族特区崩壊の危機の中、傷ついた古城たちの運命は……!

み-3-35　2426

ストライク・ザ・ブラッド6 錬金術師の帰還

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

中等部の修学旅行に参加する雪菜が、一時的に絃神島を離れることに。監視役不在の古城を待ち受けていたのは、怪物と融合した不死身の錬金術師だった。

み-3-37 2494

ストライク・ザ・ブラッド7 焔光の夜伯

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

古城が吸血鬼化した原因を探るため、暁凪沙の過去を調べる雪菜。そのころ絃神島には、もう一人の第四真祖が現れていた。果たして彼女の正体とは!?

み-3-38 2523

ストライク・ザ・ブラッド8 愚者と暴君

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

覚醒したアヴローラと再会する古城。そして彼らを待ち受ける惨劇「焔光の宴」。少年はいかにして世界最強の吸血鬼を殺し、第四真祖へと至ったのか――!?

み-3-39 2568

ストライク・ザ・ブラッド9 黒の剣巫

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

リゾート施設「ブルーエリジアム」で古城が出会った少女、結瞳。新たな「世界最強」の力を秘めた彼女を巡って動き出す、闇の剣巫「六刃」の陰謀とは!?

み-3-40 2624

ストライク・ザ・ブラッド10 冥き神王の花嫁

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

失踪したヴァトラーが古城に託した謎の少女セレスタ。彼女の出現で古城と雪菜の日常にも変化が。そしてセレスタの記憶に隠された、神の王の秘密とは!?

み-3-41 2714

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド11 逃亡の第四真祖

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

帰省中に消息を絶った暁凪沙。彼女を救うため、本土に向かおうとする古城と雪菜。そして二人の逃走を阻止するべく人工島管理公社が派遣した追っ手とは!?

み-3-42 | 2806

ストライク・ザ・ブラッド12 咎神の騎士

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ついに目覚めた殺神兵器の暴走によって、絶体絶命の窮地に陥る暁凪沙。そして救出に向かう古城と雪菜の前に、第四真祖の記憶に刻まれた宿命の敵が立ちはだかる！

み-3-43 | 2887

ストライク・ザ・ブラッド13 タルタロスの薔薇

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

過去いくつもの魔族特区を滅ぼしてきた暗殺集団タルタロス・ラプスの襲来。彼らの攻撃で危機に陥る絃神島。そんな中、古城と凪沙の関係に異変が……!?

み-3-44 | 2946

ストライク・ザ・ブラッド14 黄金の日々

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

幽閉された浅葱を奪還するため、キーストーンゲート第零層へと潜入する古城と雪菜。だが度重なる戦闘によって、雪菜の肉体には異変が起きていた……！

み-3-45 | 3014

アスラクライン

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

高校入学を明日に控えたその夜、留学中の兄から銀色のトランクが届けられた。そして僕と操緒の秘密を巡る、あまりにも賑やかな、高校生活が始まった――。

み-3-16 | 1123

電撃文庫

アスラクライン② 夜とUMAとDカップ
三雲岳斗 イラスト／和狸ナオ
かわいい女の子に囲まれ始まった高校生活。だけど、一人は幽霊、一人は悪魔、そしてもう一人はサイボーグ!? 普通の高校生智春は、どこへ行ってしまうのか!!
み-3-17 1160

アスラクライン③ やまいはきから
三雲岳斗 イラスト／和狸ナオ
個性強すぎの美少女たちに囲まれて、刺激強すぎの高校生活を送る智春。今度の敵は過労と記憶喪失!? トラブルの連続に、ますます加速するスクールパンク第3弾!!
み-3-18 1221

アスラクライン④ 秘密の転校生のヒミツ
三雲岳斗 イラスト／和狸ナオ
智春のクラスに交換留学生がやってくる。貴族の末裔で美少女という前評判を聞きつけて、盛り上がるクラスメイトたち。しかし彼女は……。人気シリーズ第4弾。
み-3-19 1276

アスラクライン⑤ 洛高アンダーワールド
三雲岳斗 イラスト／和狸ナオ
智春の前にまた新たな女の子が現れた!! 今度は小動物系美少女の沙原ひかり。美化委員の活動を通して親密な雰囲気になっていく二人だったが……。
み-3-20 1314

アスラクライン⑥ おしえて生徒会長!
三雲岳斗 イラスト／和狸ナオ
入学以来、めちゃめちゃな学校生活を送る智春は、その原因である行方不明の兄に会いに行くことを決意。そして兄の手がかりを握る人物を訪ねるが……!?
み-3-21 1374

電撃文庫

アスラクライン⑦ 凍えて眠れ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

洛高の二年生が修学旅行へ出かけた。留守中、佐伯兄から洛高と玲子のことを託された智春だったが……。美少女たちに囲まれた高校生活が思わぬ急展開!?

み-3-22　1426

アスラクライン⑧ 真夏の夜のナイトメア

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

アルバイトのため海辺のペンションに滞在中の智春たちだったが……。解き明かされていく二巡目の世界と、悪魔出現の謎。絶好調スクールパンク夏休み篇！

み-3-23　1469

アスラクライン⑨ KLEIN Re-MIX

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

機巧魔神や悪魔出現の謎を解く鍵を握る人物とは、操縁の姉の女子大生、水無神環緒だった!? 大好評人気シリーズ、新たな特技を身につけ暴走気味の第9弾！

み-3-24　1523

アスラクライン⑩ 科學部カイメツ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

水無神環緒が語る〝一巡目の世界〟の秘密。執拗に智春たちを狙う鳳島氷羽子。急速に非在化する奏――。物語は怒涛の急展開!! 人気シリーズ第10弾!!

み-3-25　1603

アスラクライン⑪ めぐりあい異世界

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

鋼色の機巧魔神との戦闘に敗れ、一巡目の世界へと飛ばされた智春。異界の街で彼が出会った人物は!? そして「魔女」と呼ばれる美少女が現れて……。

み-3-26　1663

電撃文庫

アスラクライン⑫ 世界崩壊カウントダウン

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

人間化した奏と、高校生の姿に美しく成長したアニア。そして大破した機巧魔神《黒鐵》の中から、操緒を救い出す方法を知る人物が現れて……!?

み-3-27　1749

アスラクライン⑬ さくらさくら

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

二巡目の世界へと帰還した智春たち。しかしここにも、世界崩壊の予兆が!? 非在化を始めた世界を前に、操緒と智春が選んだ最後の決断とは……!?。

み-3-28　1851

アスラクライン⑭ The Lost Files

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

夏目智春が謎の失踪を遂げてから数ヵ月。智春の義理の妹・苑宮和葉が、洛高に残された記録（ファイル）から知った、智春の隠された記憶とは――

み-3-29　1902

サイハテの聖衣（シュラウド）

三雲岳斗
イラスト／朱シオ

霊獣を封印した破魔の鎧――獣装戦闘服（BUD）、またの名を聖衣（シュラウド）。これは、怪物（マガツヒ）の侵攻から人々を守るため、聖衣をまとい戦う、美しき少女たちの物語。

み-3-32　2251

サイハテの聖衣（シュラウド）2

三雲岳斗
イラスト／朱シオ

「禍憑妃（マガツヒ）」の大侵攻が予感される中、相変わらずマイペースで任務に励む羽々姫たち。そんな彼女たちの所属会社「極東自衛機構」に経営危機の噂が……。

み-3-36　2457